

荆軻をして西、秦王を刺さしむ、太子送りて易水の上に至る、高漸離、筑を撃つ、荆軻和して歌ふ、
變徴の聲を爲す、士皆涙を垂れて泣く。壯士髮衝冠、其歌、羽聲を爲し忼慨す、士皆目を瞋らし、
髮盡く上りて冠を指す、是に於て荆軻車に就きて去る。昔時人已没、荆軻事遂げずして死す、其
の人は已に没きなり、水に没すと見るべからず。今日水猶寒、荆軻の詩に、風蕭蕭として易水寒し、
壯士一去復還らず、其の詩意を以て今日の景尚依然たるを言ふ。

【評論】此の篇、絶句として變態なり、五古として見れば、何の支障も無し。胡元瑞曰く、昔時
二句、初唐の絶句、精巧猶ほ是れ六朝の餘習、然れども調甚だ古ならず、初學之を慎め。

贈喬侍御

陳子昂

漢庭榮巧宦。雲閣薄邊功。可憐驄馬使。白首爲誰雄。

漢庭巧宦を榮し、雲閣邊功を薄んず、憐む可し驄馬の使、白首誰が爲めに雄
なる、

【句釋】喬は姓。侍御は官名。漢庭、漢代の朝廷、以て今の時を側面に寓す。榮巧宦、漢の汲黯が
姉姉の子、司馬安少うして黯と太子洗馬と爲る、安、文深巧にして宦を善くす、四たび九卿に至る、
人以て巧宦と稱す。雲閣は雲臺なり、漢の顯宗、建武の名臣を圖畫して雲臺に列すと。功臣を表す

る處。薄邊功、邊土を征して功勳ある喬を薄遇する。一方は巧、一方は拙。可憐驄馬使、後漢の桓
曲侍御史に拜す、時に宦官權を乗り、典剛正にして回避する所なし、常に驄馬に乗る、京師之れ
が爲めに語りて曰く行行且止まる、驄馬の御史を避けん、徒らに剛直なるが故に可憐と言ふ。白首
爲誰雄、後漢の馮唐、白首にして郎署に屈す、此れ時の爲す可らざるを見、故に白首まで淪落す、
時の惡しければなり、世に用ふるに拙なるにあらす。

【評論】此の篇、唐人の詩としては、露骨にして含蓄せず、憤激の致す所、骨露るゝを免れず。鍾
惺曰く、捷足は獲易く、朴忠は效ひ難し、古より然りと爲す。

子夜春歌

郭振

陌頭楊柳枝。已被春風吹。妾心正斷絶。君懷那得知。

陌頭楊柳枝、已に春風に吹かる、妾が心正に斷絶、君が懷那ぞ知るを得ん、

【略傳】郭振、字は元振、魏州の人、少うして大志あり、進士に擧げらる、
通泉の尉と爲る、嘗て部中の口を掠賣して以て賓客に餉す、百姓厭苦す、
武后召して之を詰らんと欲す、既に與に語る、之を奇とし、遂に擢用を得、後、同中書門下として

代公に封せらる、集二十卷あり。

【句釋】子夜春歌は、五古に太白が子夜吳歌あり、同題なり。陌頭、市街の路傍なり。楊柳枝、柳芽を出し、柳枝を垂る。已被春風吹、柳枝心あり、春風之れが爲め情を寄す。妾心正斷絶、春風に對し、楊柳を看、心緒斷えんと欲す。君懷那得知、妾は夫を懷うて心緒寸斷するも、夫は妾を懷ふや否やを知り得ずとなり。

【評論】此の篇、女子が柔情を寫出して餘蘊なし。黄家鼎曰く、六朝此の題詩多く淫褻、此れ獨り情の正を得たり。

南樓望

盧僎

去國三巴遠。登樓萬里春。傷心江上客。不是故鄉人。

國を去つて三巴遠し、樓に登れば萬里春なり、傷心江上の客、是れ故郷の人にあらず、

【略傳】盧僎は中宗の時の人、聞貴の尉より入りて學士と爲る、吏部員外郎に終る。

【句釋】南樓望は南樓に登り、遠望して其の情を叙す。去國、恐くは蜀ならん。三巴遠、閬白の二水東西に流れて三曲巴の字の如し、是を三巴と言ふ。登樓萬里春、此の樓は他郷にて登る、何處も皆春色、故國の春色は如何と思ふ。傷心、神經を痛める。江上客、自身を言ふにあらず、江

上を往來する人を言ふ、傷心する者は盧なり。不是故郷人、一人も郷人にあらず。【評論】此の篇、是れを四句全對の格と言ふ、傷心と不是とは疎對なるも、絶句としての對は、眞に然るべきもの。鍾惺曰く、平調深情と。

汾上驚秋

蘇頌

北風吹白雲。萬里渡河汾。心緒逢搖落。秋聲不可聞。

北風吹白雲を吹き、萬里河汾を渡る、心緒搖落に逢ふ、秋聲聞く可からず、

【句釋】蘇頌の傳は前に出せり。汾上は山西省の平陽府なり。驚秋、旅中に風物蕭條たるを見、秋なるを知り驚きたるもの。北風は冬の風、今其の寒きを以て秋に用ふ。吹白雲、武帝が秋風起り白雲飛の句意を用ふ。萬里、蘇は雍州の人、山西は路萬里なり。渡河汾、汾河を倒用す、汾水の源は太原府なり。心緒は種種と心痛すること。逢搖落、林木の搖落に逢ふ、蕭瑟として變衰する状を見る。秋聲不可聞、秋聲を聞くときは、詩人心緒亂れて絲の如くなり、聞くべからずと嘆息する所以。

【評論】此の篇、起句對を成し、律詩の發端なるときは妙、絶句なるときは索然と譚元春批評せるが、此の詩は絶句として全首對を成す、一二の十字のみならず譚善讀せずして評す、當らずと謂ふ

べし。黄家鼎曰く、語簡にして情深し。

蜀道後期

張説

客心争日月。來往預期程。秋風不相待。先至洛陽城。

客心日月と争ふ、來往預期程を期す、秋風相待たず、先づ洛陽城に至る、

【句釋】張説の傳は前に出せり。蜀道、蜀より洛に赴かんとして、期に後れたるなり。客心争日月、日月の行て晝夜息まざるが如きが是れ即ち客中の心なり。來往預期程、何日頃行くべしと預定したるなり。秋風不相待、秋風は我を待たずして、先至洛陽城、我より先に秋風は我が行かんとする洛に至る。

【評論】此の篇、全體散句にして、一句も對せず。鍾惺曰く、谷を秋風に歸す妙妙と。蔣一葵曰く、言外の意。

照鏡見白髮

張九齡

宿昔青雲志。蹉跎白髮年。誰知明鏡裏。形影自相憐。

宿昔青雲の志、蹉跎たり白髮の年、誰か知らん明鏡の裏、形影自ら相憐まんとは、

【句釋】張九齡の傳は前に出せり、題意は字の如し。宿昔、少壯時代を言ふ。青雲志、「史記」に須賈が曰く賈意はざりき君能く自ら青雲の上に致さんと、青雲は貧人が福人と爲り、卑官が高官と爲るの謂にあらず、高尚の志を言ふなり、國家に功を爲さんの謂なり。蹉跎は失脚なり、志遂げざるなり。白髮年、空しく衰老の身と爲る。誰知明鏡裏、題意を言ふ。形影自相憐、「列子」に、形動き形を生せずして影を生ずと。空しく一人自ら憐むの意なり。

【評論】此の篇、一二對法を爲し、三四散句なり、李林甫の爲めに相を罷め、功業の遂げざるを慨しての作とす、直道を以て黜げらる、此の嘆ある所以。唐汝詢曰く、誰知の二字宛轉の致あり。

同洛陽李少府觀永樂公主入蕃

孫逖

邊地鶯花少。年來未覺新。美人天上落。龍塞始應春。

邊地鶯花少なり、年來つて未だ新を覺えず、美人天上より落つ、龍塞始めて應に春なるべし、

【句釋】孫逖が傳は前に出せり。同は和なり。洛陽は地名。李は姓。少府は官名。觀は嫁入具の美麗なる狀を觀るなり。永樂公主、開元三年契丹の守領、李失活、種落を率ゐて内附す、玄宗失活を封じて、松漠郡王と爲す、明年失活入朝す、宗室の外甥女楊氏を封じて永樂公主と爲し之に妻は

す。入蕃、契丹に赴くなり。邊地、塞外の國は悉く邊地なり。鶯花少、春を飾る物少なし、邊地たる所以。年來、新年來るも、未覺新、依然たる冬日の狀態なり。美人は公主を指す。天上落、公主が邊人に嫁す、降嫁なればなり、花即ち解語の花が落つ。龍塞、盧龍塞上に、始應春、邊地は秋風や寒風のみと思ひしに何ぞ料らん、茲に春は來る。

【評論】此の篇、全體散句を以て成る、閒淡中自から傷情す、五絶の模範たるもの。

靜夜思

李白

牀前明月光。疑是地上霜。舉頭望明月。低頭思故鄉。

牀前明月光、疑是地上霜。舉頭望明月。低頭思故鄉。疑ふらくは是れ地上の霜かと、頭を擧げて明月を望み、頭を低れて故郷を思ふ、

【句釋】靜夜思は樂府の曲名、何事を咏するが本領するやを知らず、旅客の悲嗟を言ふものならん。牀前明月光、明の字一本看に作る、明を以て勝れりとす。疑是地上霜、我が愁思を發して牀前を看し時は月光なることを知らず、唯地上に霜が降りしやと疑ひしなり。舉頭望明月、フト氣が著けば霜にはあらずして明月の光でありしなり、山月に作る本なり、明月を勝れりとす。低頭思故郷、愁思益す發す、低頭して郷を思ふ所以。

【評論】此の篇、字字眞率、所謂不用意の作。范德機曰く、五言短古、明白に説盡すべからず、含糊するときは餘味あり、此の篇の如きは是れなり。胡元瑞曰く、太白の五言、靜夜思、王階怨等の如き、古今に妙絶、然れども亦齊梁の體格、七言絶句に視ぶれば、神韻小く減するを覺ゆ、句短にして逸氣舒べざるに縁る、鍾惺曰く、悄悄冥冥、千古の旅情、此の擧頭の十字に歸す、劉須溪曰く、自から是れ古意、言笑を須ひず。

怨情

美人捲珠簾。深坐嘔蛾眉。但見淚痕濕。不知心恨誰。

美人捲珠簾、深坐嘔蛾眉。但見淚痕の濕ふを見て、知らず心誰を恨むを、

【句釋】怨情は少婦の情を言ふ、閨怨と同意。美人捲珠簾、昭陽殿は珠を織りて簾と爲すと、西京雜記に出づ。深坐嘔蛾眉、卷の字重からず、深の字が重きなり、嘔は嘔噓、愁に因つて表はれる態度なり。但見淚痕濕、他人から見る所。不知心恨誰、他人から知らざる所。

【評論】此の篇、少婦の怨情を描出して餘蘊なし。胡元瑞曰く、第三能く美人の態を描寫す、全篇幽微と。

秋浦歌

白髮三千丈。緣愁似箇長。不知明鏡裏。何處得秋霜。
白髮三千丈。愁に縁て箇の似く長し、知らず明鏡の裏、何れの處に秋霜を得たる、

【句釋】 秋浦歌、秋浦は地名、湖北省の池州府に屬す。地に貴池あるを以て名く。白髮三千丈、五字以て天地を振動するの力あり。緣愁似箇長、愁の無き者は三千は勿論、丈も尺も寸も無し、愁の有る者は三千尙ほ不足、一萬丈なるや二萬丈なるや知れず。不知明鏡裏、明鏡は池水の澄清を言ふ、池水に此の白髮を映して見しなり。何處得秋霜、我は白髮を有せずと思ひしも、明鏡裏には此の秋霜あり、何處から此の秋霜を得來りしやと反問す。

【評論】 此の篇、全集に二十首なり、今其の一を取る、託興深微にして、尋常の言語を以て評すべからず、「左思白髮賦」より得來る思想なり。「白髮將に抜けん」とす、怒然として自ら訴ふ、稟命不幸、君が年暮に値ふ、秋霜に逼近して、生じて皓素、始めて覺る明鏡、惕然として惡まる」

獨坐敬亭山

衆鳥高飛盡。孤雲獨去閒。相看兩不厭。只有敬亭山。
衆鳥高飛し盡く、孤雲獨去つて閒なり、相看着兩が厭はず、只敬亭山有り、

【句釋】 獨坐敬亭山、此の敬亭山は湖北の宣城に在り。衆鳥高飛盡、淵明の衆鳥相與飛の句より脱化す、一鳥も餘さず飛盡せしなり。孤雲獨去閒、孤雲は我友と思ひしに是も見て居る中に去る。相看兩不厭、鳥と雲共に不可、唯山と我と兩つは互に厭はず。只有敬亭山、字の如し。

【評論】 此の篇、淵明に骨を得、劉楨、徐陵に肉を得來るもの、獨坐の境界、叙し得て神あり、然れども衆鳥と孤雲は厭ふや否やと云ふ論あり、厭ふにはあらず、唯一は飛び、一は去り、永く伴ふを得ず、是を以て彼を捨て、只山を取るのみ。鍾惺曰く、胸中事無し、眼中人無し。確評と謂ふ可し。

見京兆韋參軍量移東陽

潮水還歸海。流人却到吳。相逢問愁苦。淚盡日南珠。
潮水還海に歸し、流人却て吳に到る、相逢うて愁苦を問へば、涙は盡く日南の珠、

【句釋】 見は送ならん、送ると言はず、見と云ふは時に憚かりしならん。京兆は長安。韋は姓。參軍は官名。量移は左遷せらるゝ事。東陽は浙江省の金華府なり。潮水還歸海、「尙書」に、大水小水東流して海に歸すの語あり、人も亦潮水の如く朝廷へ還らざるべからず、然るに、流人却到吳、長

安へ還歸せずして東陽に到るは何ぞ、却の字は「アベコベニ」と訓むと意味愈よ分明となる、東陽は古の吳地なり。相逢問愁苦、左遷し來りて愁苦の狀を慰問する。涙盡日南珠、洞冥配に、駭勸國は日南に在り、人犀象の車に乗じ海底に入り寶を取る、鮫人の舎に宿し涙珠を得、則ち鮫泣く所の珠なり、東陽は日南郡より、珠を多く産す、今の詩意は日南の珠は皆我が涙なり、意日南の珠將に涙と爲つて盡んとす、意の二意を含むと、典公の説可なり。

【評論】此の篇、往きし者は還る、必ず愁苦すれ勿れとの意を以て之を慰安す、潮水は江に來るも、還海に歸る、流人となるも亦朝に還る時あるなり。譚元春曰く、妙口頭に在りと。

臨高臺

王維

相送臨高臺。川原杳何極。日暮飛鳥還。行人去不息。
相送りて高臺に臨む、川原杳として何ぞ極らん、日暮飛鳥還るに、行人去て息はず、

【句釋】臨高臺、漢の樂府鼓吹十八曲の一、臨望して傷情するなり、蓋し黎昕を送るの詩。相送は黎昕を送るなり。臨高臺、曲名を用ひて、此の句を設く、別に高臺有りと見るも可。川原は黎の征行する道路。杳何極、極目茫茫、窮處を知らざるなり。日暮飛鳥還、日暮に垂んとし、鳥は其の

宿處に還る。行人去不息、茫茫たる川原を行いて人は曾て休息せず。

【評論】此の篇、黎を送るに、古樂曲の名を以てし、歸飛の鳥を見て、行人の益す遠きを念ふなり。詩境實に神品に入る。李杜以外に此の高手を出す、天の斯道を亡ぼさざるなり。蔣一葵曰く景中に情を寫して盡さず。

班婕妤

惟來妝閣閉。朝下不相迎。總向春園裏。花閒語笑聲。
惟來妝閣の閉づるを、朝より下りて相迎へざるなり、總て春園の裏に向て、花閒語笑の聲、

【句釋】班婕妤「ハンセフヨ」は樂府題なり、即ち婕妤が怨を言ふ、漢書外戚傳に、班婕妤は彪が姑、美にして文を能くす、成帝即位し、選ばれて後宮に入る、幸して婕妤と爲す、其の後、趙飛燕微賤より興り禮制を逾越し、寢、前より盛んなり、婕妤媚道を挾み祝詛すと譖告す、婕妤、久しければ危うせらるゝを恐れ、太后に長信宮に共養せられんことを求む、乃ち賦を作り自ら傷む、其の辭に曰く、潜に宮を去て兮、幽にして以て清し、應門閉ちて禁闔局す、華殿の塵兮玉階に落ち中庭妻として兮綠草生ず。惟來妝閣閉、化妝室の閉ちたるを見て人が婕妤の身の上を惟しむなり。

朝下、朝を辭し去つてより。不相迎は朝より迎へて呉れぬ事、迎へて呉れぬ故に妝閣を開くの時無きなり。總向春園裏、他の宮女等は嬉嬉として春園に在り。花間語笑聲、妬んで居りし婕妤が失寵せしなれば、他宮女等は喜ばざるを得ず、其の權語喜笑の聲を空しく聞くのみ。

【評論】此の篇、古來より種種の釋義がある、三四の句は婕妤が長信宮に來りて太后に事へ、而して其太后に隨侍する宮女等が婕妤の心情も解せず、花園に游笑すと。又然るにあらず、朝廷の宮女が花間に語笑するなりと。又趙氏と寵を争はざること見つけ可しと。顧與新曰く、婕妤を詠じて猶嘖を含み、寵を希ふの語を爲す、婕妤が本相に非ざるに似たり。唐汝詢は此の評を破して曰く、一二の句は婕妤が節操を叙し、三四の句は他人恩寵を受くるを言ふなり、唐の言を以て、此の詩を解す、眞に穩安なるを覺ゆ。

雜詩

已見寒梅發。復聞啼鳥聲。愁心視春草。畏向玉階生。

已に寒梅の發くを見、復啼鳥の聲を聞く、愁心春草を視る、玉階に向つて生ずるを畏る、

【句釋】雜詩は何と云ふ題と定めるに確かならざるものに付する題目、今は詩に依つて案すれば、

宮女の情を言ふもの、如し。已見寒梅發、冬至頃の景物を叙す、宮女が見るなり。復聞啼鳥聲、已は過去に屬する字、復は現在に屬する字、昨日は寒梅の發きしを見、今日は啼鳥の聲を聞く、初春に近づきしなり。愁心、何故に愁心なりやと言はゞ、君王の行幸未だあらざるなり。視春草、王孫游んで歸らず、春草生じて萋萋と「楚辭」の語を借り用ふ、草に不歸草と云ふ一種あるを以てなり。畏向玉階生、我が深宮の階前に生ずるを畏る、不歸草の名を怨む故なり、不歸草なぞ縁起にもない草を視れば、益す君王の幸あらざるなり。

【評論】此の篇、雜詩の題目を宮詞と改むるに於ては其の意味容易に判然す。蔣一葵曰く、二十字中、寒梅啼鳥春草、他運筆の妙を看る。僧冷齋曰く、深婉。

鹿柴

空山不見人。但聞人語響。返景入深林。復照青苔上。

空山人を見ず、但人語の響きを聞く、返景深林に入る、復青苔の上を照す、

【句釋】鹿柴、王右丞は藍田の朝川に別墅あり、而して其の奇勝、孟城坳、華子崗、鹿柴、欽湖、柳浪、竹里館、辛夷塢等あり、裴迪と其の中に遊び、詩を賦し相酬す、各々二十絶句あり、柴は本集砦に作る、籬落なり。空山は靜閒を意味す。不見人、何處の林中に在るや否やを見ざるなり。但

聞人語響、何處とも判然せざる所に人語を聞く。返景は夕陽の返景なり。入深林、返景は晝間分明ならざる深林までに光が入る。復照青苔上、深林に入りし餘暉を以て更に青苔の上を照す。

【評論】此の篇、傳へて以て神品に入る詩とす。「山海經」に、長留の山、其の神白帝返景を主司す、

注に、日西に入り、則ち反景東照と、宋の劉孝綽が詩に、返景入池林と、張協が詩に、青苔依空墻と、此等の調を融合して以て此の玄妙なる二十字と爲す、池林と深林、一字の相違にて、千里を隔つゝの概あり。訓解に曰く、人を見ざるは幽なり、人語を聞くときは寂滅に非ざるなり、景青苔を照す、冷湊自在、摩詰、淵明に出入すと云ふ、獨朝川の諸作最も近し、其の趣きを探索するに其の詞を擬せず、淵明、廬を結んで人境に在り、而かも車馬の喧無し、喧中の幽なり、摩詰、空山人を見ず、但人語の響きを聞く、幽中の喧なり、此の如く變化して方に三昧の法門に入る、李東陽曰く、詩は意を貴ぶ、意は遠きを貴ぶ、近きを貴ばず、淡を貴び、濃を貴ばず、返景深林に入り、復青苔の上を照す、淡にして濃、近うして遠し、知者の爲めに道ふべし、俗人と言ひ難し。宋の秦少游は、朝川の圖卷を閲して疾即ち愈ゆと。嗚乎朝川は實に詩中の國手なり。我邦の廣瀬淡窓も朝川を奉じて大宗師と爲す。知者と與に道ふべし、俗人と與に言ひ難きなり。

竹里館

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。深林人不知。明月來相照。

獨坐幽篁の裏、彈琴復長嘯、深林人知らず、明月來りて相照す、

【句釋】竹里館、朝川が別墅の奇勝なり。獨坐幽篁裏、篁は「タカムラ」竹苗なり。彈琴復長嘯、

時には琴を弾じ時には長嘯するなり、子夏が退いて巖居して壤室を作り、琴を其の中に彈ず。『尚書』と、深水に臨んで長嘯す、「楚辭」に由る。深林人不知、林中の幽趣、他人は知らず、知る者は誰ぞや。明月來相照、他人は知らず、明月は獨、我意を會するが若きに似たり。

【評論】此の篇、玄味幽深窮まる所無し、人間のものにあらず。鍾惺曰く、人をして仙ならんと欲せしむ。顧華玉曰く、清興適景と合す。

長信草

崔國輔

長信宮中草。年年愁處生。時侵珠履跡。不使玉階行。

長信宮中の草、年年愁處に生ず、時に珠履の跡を侵して、玉階に行かしめず、

【略傳】崔國輔は吳郡の人、初許昌の令を授かり、集賢殿直學士禮部員外郎に累遷し、後王錯が近

親に坐し、竟陵郡の司馬に貶せらる。

【句釋】長信草は長信宮に生せし草を言ふ、前首にある班婕妤が事を咏す。長信宮中草、太后が宮

名を長信と云ふ、今は人も無く、唯草のみ生ず。年年愁處生、尤も人の無常盛衰を感じて愁ふる處に多く生ず。時、或は故に作る。侵珠履跡、行幸路なぞは特に發生する、珠履は天子の穿ちし履、不使玉階行、路を侵して生ずるゆる、玉階へ行くこと能はざらしむ。

【評論】此の篇、宋の劉孝綽の、此の題の詩に、委翠節を知るに似たり、含芳情あるが如し、全く履跡の少なきに由つて、併せて階に向つて生せんと欲す、此の詩意を翻案して答を草に歸す、婉變清楚以て誦すべきなり。

送朱大入秦

孟浩然

游人五陵去。寶劍價千金。分手脫相贈。平生一片心。

游人五陵に去る、寶劍價千金なるを、分手に脱して相送る、平生一片の心、

【句釋】朱は姓大は尊稱。入秦は五陵に入る。游人五陵去、五陵は漢の五陵前に出せり。寶劍價千金、論衡に、世に稱す利劍千金の價あり。史記に、伍子胥が其の劍を解き曰く、此の劍價千金と、依る所是れなり。分手脱相贈、友の爲め千金の寶劍を惜まざるなり。平生一片心、是れ吾が寸志なりとの意、五陵は豪俠の聚まる所、花川戸助六の類多く棲む、此に至る劍無かるべからず、寶劍を輕しとし、交を重しと爲すなり。

【評論】此の篇、輕輕に叙して去て、餘味盡きず。「訓解」に崔國輔が詩とす。誤謬なり。

春曉

春眠不覺曉。處處聞啼鳥。夜來風雨聲。花落知多少。

春眠不覺曉、處處聞啼鳥、夜來風雨聲、花落知多少、

少ぞ、

【句釋】題の如く、春の曉景を叙す。春眠不覺曉、暖ならず、寒ならざる時節、曉眠を貪り夜已に曉けたるを知らず。處處聞啼鳥、フト目が覺めて耳を敬てば、啼鳥已に曉景を弄して處處に其の聲を聞く、尙身は褥中に在るなり。夜來風雨聲、夜來は昨夕なり、黄昏とは異なる、褥中に在て風雨の聲を聞きたるなり。花落知多少、枝を持するものと、枝を辭するものと孰れか多きや、と思ふなり。

【評論】此の篇、春を惜しむの意を以て作る、襄陽にあらざれば、此の如き玄妙の詩有るべからず、古今推して名篇と爲すは萬口一致す。顧華玉曰く、眞景實情人説いて到らず、高興奇語、唯吾が孟公と。

洛陽訪袁拾遺不遇

洛陽訪才子。江嶺作流人。聞說梅花早。何如此地春。
洛陽に才子を訪へば、江嶺に流人と作る、聞道らく梅花早しと、此の地の春に何如ぞや、

【句釋】洛陽は前卷に出せり。袁は姓拾遺は官名、供奉の任なり。不遇、字の如し、洛陽訪才子、潘岳が「西征賦」に賈生洛陽之才子とあり。江嶺、湘水零陵の始安縣を出て、東北零陵縣を過ぎ、東に注ぎて越城橋水と曰ふ、南越城の嶠を出て即ち五嶺の西嶺なり、秦五嶺の成を置く、是れ其一なり、北零陵縣下に至り湘水に注ぐ。作流人、袁が嶺表に左遷と爲りて此地にあらざるなり、聞道、客を借り主を見はす法。梅花早、嶺南は暖が早き處なれば、梅開くも早きなり。何如此地春、此地は洛陽なり、洛陽と江嶺と春はドチラが早いかと寄問する。

【評論】此の篇、平淡なる語を以て深く同情を表はす、襄陽の高手此に在り、劉須溪曰く便ち怨字を著けず、亦自から深怨。

洛陽道

儲光羲

大道直如髮。春日佳氣多。五陵貴公子。雙雙鳴玉珂。

大道直うして髮の如し、春日佳氣多し、五陵の貴公子、雙雙玉珂を鳴す、

【略傳】儲光羲は魯國の人、天寶の末、監察御史と爲る、祿山が僞官に坐して貶死す、集七十卷あり。

【句釋】洛陽道は洛陽の道を主として其の繁華を叙す。大道直如髮、車馬の馳せる都合の善き様に出來て居る、即ち髮を引く如く真直なるなり。春日佳氣多、佳氣は殷賑なるを言ふ。五陵貴公子、繁華を飾るは、貴公子に在り、貧家の子弟にあらず、雙雙は二人以上を云ふ。鳴玉珂、貴公子が三三五五馬に乗り得意に玉珂を鳴らす。

【評論】此の篇、都の繁華を叙し、得意の者を出して、失意の者を憫むなり、今日東京の道を自動車で馳する徒輩を作者をして見せしむる時は、其れ何の言かある。

長安道

鳴鞭過酒肆。絳服游倡門。百萬一時盡。含情無片言。

鳴鞭酒肆に過ぎ、絳服倡門に遊ぶ、百萬一時に盡く、情を含んで片言無し、

【句釋】長安道は曲名なり、都邑三十四曲の一。鳴鞭は貴公子が鞭を鳴らす、過酒肆、即ち割烹店なり。絳服は美麗の服を言ふ。游倡門、即ち妓樓なり。百萬は金錢なり。一時盡、盡は擲つなり。含情無片言、惜しき態度も惜しき言語も吐かず成さざるなり。

【評論】此の篇、亦貴公子の游蕩を諷戒する、今日の成金奴は大底是に似たり。

關山月

一雁過連營。繁霜覆古城。胡笳在何處。半夜起邊聲。
一雁連營。繁霜覆古城。胡笳何處。在。半夜邊聲起。

【句釋】關山月は樂府鼓角橫吹十五曲の一。一雁過連營、陣營の連屋上を一雁が過ぐ。繁霜覆古城、正に是れ邊塞の秋晚。胡笳在何處、聲を聞いて、吹處を知らず。半夜起邊聲、邊土の音は側面に哀聲を帯ぶと知るべし。

【評論】此の篇、詩中、月を言はずして、句句月ならざるは無し、征人の爲めに此の語を發す。

送郭司倉

王昌齡

映門淮水綠。留騎主人心。明月隨良掾。春潮夜夜深。
門に映じて淮水綠なり、騎を留む主人の心。明月良掾に隨がひ、春潮夜夜深

【句釋】送郭司倉、司倉參軍は刺史の官屬なり。映門、王が家の門、乃ち送別の燕を開く時。淮水、綠、淮水は南陽唐縣の桐柏山に出で、東流して承天德安等を経て淮安に至り、海に入る。留騎主人、心、留まる者は郭なり、馳走する主人は王なり。明月隨良掾、掾は公府掾吏即ち良官吏なり、明月

が郭參軍に隨うて行き去る。春潮夜夜深、殘る所の主人は此の春潮と月を見て、夜夜思念が深きなり。

【評論】此の篇、前二句は正しく送別を叙し、第三は郭を叙し、第四は我を叙す。鍾惺曰く賢主嘉賓言外に想ふ可し。黃家鼎曰く清渾。

答武陵田太守

仗劍行千里。微軀敢一言。曾爲大梁客。不負信陵恩。
劍に仗りて千里に行く、微軀敢て一言す、曾て大梁の客と爲る、信陵の恩に負かず、

【句釋】答は彼方よりの間に酬ゆ。武陵、辰州府は漢晉宋齊並びに武陵郡たり。田は姓太守は郡の長たり、王が龍標尉たりし時、太守の爲め厚遇せられ、別に臨みて此を作る。仗劍行千里、千里の行一劍より外、一物も著けず。微軀は賤しき者と云ふ意味。敢一言、別に臨んで言ふ所は多からず、但一言あるのみ。曾爲大梁客、今日のみならず、昔から太守の家に客と爲て厚くせらる、大梁は魏の都、以て武陵に比するなり、客は王自身なり。不負信陵恩、魏の公子無忌は即ち信陵君なり、仁にして士に下り、食客三千人を致す、今太守を信陵に譬へ、以て我が其の恩に終身負かずとなり。

【評論】此の篇、僅僅二十字にして、其の感恩の情溢るゝを覺ゆ。鍾惺曰く初の二句、謙し得て淋漓たる感慨。

孟城坳

裴迪

結廬古城下。時登古城上。古城非疇昔。今人自來往。

廬を結ぶ古城の下、時に登る古城の上、古城疇昔にあらず、今人自から來往す、

【句釋】作者の裴迪は唐書に傳無し、關中の人、王維の友とのみ。孟城坳、坳は音「アウ」俗に凹凸の形、兩方を少し高くして中間を首の如くにし、石疊みにして置くなり。王維が輞川の別業にて維と共に賦す。結廬、結ぶ者は王維なり。古城下、輞川には漢代の斗城あり、其の下に棲む。時登、時は和語の「折ニハ」に當る。古城上、興に乗じて二人伴うて登る。古城非疇昔、古城は古昔と異なりである、且古の人も無し。今人自來往、誰が命するでも無く來往する故に自なり。

【評論】此の篇、梁の何遜の詩、家は本青山の下、青山の上にとを愛す、青山上る可らず、一たび上りて一たび惆悵す、を學んで作りたるもの。譚元春曰く、古城の字を連用す、大手筆にあらずんば能はず。顧華玉曰く、右丞が詩新たに家す孟城の口、古木垂柳を餘す、來者は復誰たる、空

しく悲しむ昔人の有、此の篇、亦維が意、而れども語興輕淺なり。「訓解」曰く語極めて古拙、寄慨淺きにあらず。吳逸一曰く迪が詩佳なるもの止輞川の諸作、然れども維は多く題外に詞を屬く、裴は題に就いて意を命ず、伎倆自から別と。

鹿柴

日夕見寒山。便爲獨往客。不知松林事。但有麝麝跡。

日夕寒山を見る、便ち獨往の客と爲る、知らざりし松林の事、但麝麝の跡あり、

【句釋】鹿柴は前に辨せり。日夕見寒山、見の字、注意すべし、淵明に悠然として南山を見るの句あり。便は俗語の「ヨリテ」なり。爲獨往客、寒山を見るによりて頻りに獨往即ち俗士を交へずして此に客と爲る。不知、氣が付かざりしなり。松林事、維が家は松林中に有る。但有麝麝跡、松林の間事は、世間の事無く、但鹿の跡があるのみ、麝は音「キン」「クン」にあらず、訓「クジカ」即ち麝、麝は音「カ」訓「ヲジカ」牡鹿なり、共に「楚辭」に出づ。

【評論】此の篇、至寂至幽の境を寫して、玄味極まり無し、然りと雖も、右丞の此の題に比すれば及ばざること遠し。

復愁

杜甫

萬國尙戎馬。故園今若何。昔歸相識少。早已戰場多。
萬國尙戎馬、故園今若何、昔歸りしに相識少く、早已に戰場多かりき、

【句釋】復愁は「ブシウ」と訓む、愁が復起るなり。萬國は一國なり。尙は昔しに對して尙なり、戎馬、安祿山が謀反を言ふ。故國は洛陽なり、杜の一族は杜陵に在り、洛に家す。今若何、天下中戦亂なり、故園はドウデある。昔歸相識少、蜀に游んで昔洛陽に歸りし時、祿山の爲め東洛陷ち知己も親族も皆離散せり。早已戰場多、當時已に戰場多かりし、戎馬の斂まらざる今日、又戰場多きことならん。

【評論】此の篇、蜀に在りて作る所、前二句は今を叙し、後二句は昔を叙す、杜詩としては尋常一様なり。

絶句

江碧鳥逾白。山青花欲燃。今春看又過。何日是歸年。

江碧りにして鳥逾よ白く、山青うして花燃えんと欲す、今春看又過ぐ、何れの日か是れ歸年、

【句釋】絶句、即景を映じたるもの、江碧、春江一碧、鏡の如きなり。鳥逾白、鷺と定めたるにあらず、白鳥が逾よ反映する。山青花欲燃、一點紅が萬綠叢中に在る趣きを言ふ、花欲燃は花益紅の意味、花を紅に改めし者あり、可笑。今春看又過、蜀に在つて此の景色を見て一春を送りしなり。何日是歸年、遂に歸期の無きを言ふ。

【評論】此の篇、前二句は景、後二句は情なり、是亦杜詩の尋常一様のもの。

長干行

崔顥

君家住何處。妾住在橫塘。停船暫借問。或恐是同鄉。

君が家何れの處に住する、妾は住して橫塘に在り、船を停めて暫く借問す、或は恐る是れ同郷ならん、

【句釋】長干行は樂府の題、都邑三十四曲の一、山隴を干と云ふ、金陵の地、大長干と小長干とあり、日本で言へば、長崎とか横濱とか云ふ類なり、船が著く所なるが故、繁華にて、且男女の道、紊るゝなり。君家、婦人が男子に對して問ふ。住何處、鄰席の男子へ媚を送る、人の住處を問ふは初對面の語として、日本も支那も同じ。妾住在橫塘、吳は江口より淮に沿うて隄を築く、之を橫塘と謂ふ、金陵の境に在り。停船暫借問、婦が寂莫に堪へず、男子を見れば、種種の間を發す、船中

に菓物や菓子くだものを商あきなふ商婦しょうふなり。或恐おそれ是同郷どうきやう、或恐おそれは俗語ぞくごの「ワルクスルト」なり、同郷どうきやうの人ひとである

かも知れぬ、惡事あくじ露顯ろけんに及およぶ恐おそれあるなり。

【評論】此の篇、少婦せうふが態たいを叙じよして頗る肯綮けんけいに中あたる、「唐書」に依れば崔さいは文ありて行なく、其の詩
大都桑間おほほろ濮上はくじやうの音おんと。然りと雖も、「毛詩」の教男女せうだんじやうの情せうを離はなれたる者ものなし。明の何景明かけいめいは、杜詩に
其の情せうを言いふもの無なきを惜をしむ、崔亦さいまた一概がいに棄すつ可べからざる人ひとなり、君きみは何處どこかと問とうて其の返事へんじを侍
たず、直すぐ自分じぶんを言いふ、寫うつし得えて急速きふそくの情見じやうみるが如ごとし。

詠史

高適

尙有なほ綈袍いばう贈おくる、應まさ憐あはれ范叔はんしゆく寒かん。不知あはれ天下てんか士し猶作なほ布衣ふい看かん。

尙有なほ綈袍いばうの贈おくる有り、應まさに范叔はんしゆくが寒かんを憐あはれむなるべし、天下てんかの士しなるを知らず、猶なほ布衣ふいの看かんを作なす、

【句釋】咏史えいしは歴史れきしの人物じんぶつを咏えいす、「史記」范雎はんしゆく字あざなは叔しゆく、魏ぎの人ひと、先に魏ぎの中大夫ちゆうたいふ須賈しゆくに事つかふ、須しゆくに
隨行ずいかうして齊せいに使つかひす、齊王せいおう雎しゆくが辯口べんこうを聞いて、金十斤きんじゆじんを賜たまふ、賈か之これを疑うたがふ、歸國きこくして其事そのことを宰相さいしやう魏齊ぎせい
に語かたる、齊大せいおほいに怒いかり、雎しゆくを笞ちげきす、佯死やうしして亡匿はうちやくし、秦しんに入る、昭王せうわうに説さいいて宰相さいしやうと爲なる、後、賈か
秦しんに使つかひす、雎しゆく疎服そふくを著つけ微行びかうして賈かを見る、賈か意いに之これを哀あはれみ、曰いはく范叔はんしゆく一ひとに寒さむきこと此かくの如ごときやと、

出門しゆもん何所なん見み。春色しゆんしき滿み平蕪へいこ。可た歎たん無な知己ちき。高陽かうやう一ひと酒徒しゆと。
門もんを出いでて何なんの見みる所ところぞ、春色しゆんしき平蕪へいこに滿みつ、歎たんずべし知己ちき無なきを、高陽かうやうの一ひと
酒徒しゆと、

田家春望

【評論】此の篇、前二句は范叔はんしゆくが感恩かんおんを叙じよし、後二句は未だ知己ちきならざることを叙じよす、五絶の上
乗多じやうた得とくすべからず。鍾惺しゆせい曰いはく語直ごちよくに意遠いとほし、尙なほと應おとの二字じ、工夫くふうの存ぞんする所ところなり、自みづから范はんに比ひす
る所ところあり。

【句釋】田家春望でんかしゆんぼう、農村のうそんの春景しゆんけいを叙じよす。出門しゆもん、我が門もんを出いづ。何所見なんしよけん、王祭わうさいの詩しに、「門もんを出いて見みる
所ところ無なし」無なを何なんと改あらためしなり、何なんを見みる。春色しゆんしき滿み平蕪へいこ、見みるものは春色しゆんしき氣氳きこんとして平郊へいかう蕪野こに滿み

るのみ。可歎無知己、我を知る者は一人も無きを歎す。高陽一酒徒、史記に、酈食其、沛公に見えんと欲す、公、儒生なるを以て見ず、酈生劍を按して曰く吾は高陽の酒徒、儒生に非ざるなり、以て適自身を酈生に比す。

【評論】此の篇、見る所は田家の春色のみ、復知己はあらず、何ぞ酒徒に混せざるを得ん。黄家鼎曰く骯髒たる襟、懷、俱に言外に在り。

行軍九日思長安故園

岑參

強欲登高去。無人送酒來。遙憐故園菊。應傍戰場開。

強ひて高きに登り去らんと欲するに、人の酒を送り來る無し、遙かに憐む故園の菊、應に戰場に傍うて開くべし、

【句釋】行軍、岑嘉州は將軍の書記官なり。九日は九月九日の佳節。思長安故園、此の時長安未だ回復せざるなり、天寶以後、長安は數ば亂る。強は無理にと云ふ事。欲登高去、重陽は登高して佳節を賞するが通例なり、客中と雖も廢し難し。無人送酒來、續齊諧記に、費長房、桓景に謂つて曰く、九月九日、汝が家當に大災あるべし、速かに去るべし、家人をして絳囊を作り、茱萸を盛り以て臂に繫け、高きに登り、菊花酒を飲むべし、此の禍消すべし、景其の言の如く家を舉て山に登

る、還つて見れば牛羊雞犬皆暴死す、淵明九日に酒無し、宅邊菊叢中に出でて坐すること久し、白衣の人來るを見る、即ち刺史王弘酒を送るなり。遙憐故園、故園の菊は開くも、之を賞する主人は軍中なり、彼を憐むは自ら憐むなり。應傍戰場開、主人無きのみならず、幸に開くも戰場なり、愈よ憐む可し。

【評論】此の篇、景情一合して、以て客中九日を叙す、客中の寂寞も、尙故園の悲慘には勝れり。蔣一葵曰く、但戰場の二字を點して輒ち限り無き悲愴。顧華玉曰く、二十字中、備さに題意を見る。

見渭水思秦川

渭水東流去。何時到雍州。憑添兩行淚。寄向故園流。

渭水東流し去る、何の時か雍州に到らん、憑つて兩行の涙を添へて、寄せて故園に向つて流さん、

【句釋】渭水は陝西の涇源縣鳥鼠山に出でて東流し咸陽渭南を経て華陰に至り、黄河に入る、長安に入るを秦川と云ふ。秦川は山西澤州府の巨隄山より出で南流して沁水と合す。渭水東流去、咸陽の方面へ流るゝ。何時到雍州、此の雍州は咸陽なり、陝西の西安府是れなり。憑は「タノム」なり、

添雨行淚、水若し情あらば、我が兩眼の涙を送り呉れよ。寄向故園流、郷を思ふの至切此に至る。
【評論】此の篇、客中に郷を思ふも、我が切を訴ふる所無し、但此の渭水のみなり、以て我が情を寄流すべし。蔣一葵曰く岑が詩、此等の處、人をして哭し得ず、笑ひ得ざらしむ、是れ鬼王の語。

登鶴鵲樓

王之渙

白日依山盡、黃河入海流。欲窮千里目、更上一層樓。
白日山に依つて盡き、黃河海に入つて流る、千里の目を窮めんと欲して、更に一層樓に上る、

【句釋】鶴鵲樓は山西省蒲州府の南に在り。白日依山盡、樓上見る所の景、太陽は山の陰に藏れんとする、山は中條山を云ふ。黃河入海流、黃河は龍門より下鄆陽を歴、朝邑に到り、稍折れて東、蒲州の境に入る。欲窮千里目、積極的に窮めんと欲する。更は俗語の「其上」と云ふ意味。上一層樓、一番高層まで登る。百尺竿頭に一步を進むるなり。

【評論】王之渙は并州の人、少うして俠氣あり、中年節を折りて文を工にす、王昌齡、高適と形を爾汝に忘る、此の篇、黃河の折る處を極めんと欲するが主意あり。枕存中曰く、樓前中條を瞻、下大江を瞰る、唐人詩を留むる者多し、王之渙、李益、暢當三詩能く其の景を狀す。胡元瑞曰く、

結句對を爲す者、須らく意盡くすべし、千里の目を窮めんと欲して、更に一層樓に上る。

終南望餘雪

祖詠

終南陰嶺秀、積雪浮雲端。林表明霽色、城中增暮寒。

終南陰嶺秀、積雪浮雲端の端、林表霽色明に、城中暮寒を増す、

【句釋】祖詠の傳は前卷に出せり。終南は山名。望餘雪、春雪を望んで作る。試験に應じて此の題四句を賦し、之を有司に納む、有司之を詰る、詠曰く意盡く。終南陰嶺秀、陰の字注意すべし。積雪浮雲端、山の高きを形容す。林表明霽色、表は外なり、客中增暮寒、嶺は陰なり、故に雪積んで消せず、已に霽る、時は暮寒彌よ甚し。

【評論】此の篇、二十字を以て終身の祿を取らんと欲したる大膽なる作なり、然れども此に縁つて贏ち得たりとすれば、一字千金に當る。鍾惺曰く、凜凜猶ほ寒色あり。譚元春曰く、漢の五言の風味に肖たり。

罷相作

李適之

避賢初罷相、樂聖且銜盃。爲問門前客、今朝幾箇來。
賢を避けて初めて相を罷め、聖を樂んで且盃を銜む、爲に問ふ門前の客、今

朝幾箇か来る、

【略傳】李適之は常山王の後、天寶元年、牛仙客に代りて左相と爲る、李林甫の爲め中てられ、罷貶して袁州に死す、此の詩其の時の作。避賢、字の如く正面の解は賢者と愚者と一所にならぬから愚者は退くと意なるが、側面は濁酒を飲んで間に自ら娛しむに若かずとなり。初罷相、李林甫の毒手に罹り罷めらる。樂聖、是も正面の解は聖道を樂しむなるが、側面は清酒を飲み、以て自ら樂しむなり。且銜杯、「史記」に、石慶上書して曰く、慶幸に罪を丞相に待つことを得、罷駑以て治を輔くる無し、願はくは丞相侯の印を歸し、骸骨を乞ひ歸り、賢者の路を避けん。「魏略」に、太祖酒を禁ず、人竊んで之を飲む、故に酒と言ひ難し、清める者を聖と爲し、濁る者を賢と爲す、李適之、酒を飲む一斗亂れず、飲中八仙の一人として、杜子美「盃を銜み聖を樂しみ賢を避くと稱す」の句は、即ち李を詠じたるなり。爲問門前客、翟公が在官の時は賓客多く、免官後は門前雀羅寂寥を極む。今問ふ所以は、多少此の意味もあらんが、深く怨んで此の詩を作りしとは思はれず、酒の相手がツマリ何人來るかと言ふにすぎず。今朝幾箇來、幾箇は幾多又幾許と同義、多少を問ふの辭、「イクバク」と訓む。

【評論】此の篇、不平にて作りしや、自適の意を以て作りしやと二異論あり。敖子發曰く、此の詩良に風刺あり、然れども錢起の「谷口春殘黃鳥稀なり、辛夷花盡きて杏花飛ぶ、始めて憐む幽竹を罵るに近し。此の評言眞に確當なり。」

奉送五叔入京兼寄綦母三

李頎

陰雲帶殘日。悵別此何時。欲望黃山道。無由見所思。

陰雲殘日を帶び、別れを悵む此れ何時なる、黃山の道を望まんと欲す、所思を見すに由無し、

【句釋】五叔は未詳、綦母三は槐里縣令たり、叔、途此の槐里を經るに依つて寄せしならん。陰雲は晴雲の反對、クモリシ雲なり。帶殘日、雲が日を帶ぶるにあらず、日が雲を帶ぶ、倒裝句法ゆゑ雲が帶ぶとする。悵別、此の氣持の惡き日に當りて、別れるとは。此何時、「ナンテ言フ時ゾヤ」の意味。欲望黃山道、此の黃山は京兆の槐里縣に在る。無由見所思、我が所思を見はすに方法無し、所思とは綦母三を思ふ所の情想なり。

【評論】此の篇、唐汝詢の評する如く、送別寄懷二十字に盡き局促を見ずと、當れるを覺ゆ。

左掖梨花

丘爲

冷艷全欺雪。餘香乍入衣。春風且莫定。吹向玉階飛。

冷艷れいえん全く雪ゆきを欺あざむき、餘香よかう乍たちち衣ころもに入る、春風しゅんぷう且かつ定さだまること莫なれ、吹ふいて玉階ぎよくかいに向むかつて飛とばせ、

【略傳】丘きゆう爲なは嘉興かきうの人ひと、繼母けいぼに事つかへて孝かうなり、常かつて靈芝れいしの堂下だうかに生しやうずるなり、太子たいしの右庶子うしよしに累る官くわんす、卒しゆつする年とし九十六、王維わうゐと交游かういうふ深ふかし。

【句釋】左掖さえきは地名ちめいにあらず、門下省もんかしてうの東門とうもんを言いふ。梨花りかは果宗くわそうの名なあるを以もつて官署くわんしやうに栽かうう。冷艷れいえんは白色はくしやくにして光ひかりあるを云いふ。全欺雪ぜんあきゆき、色いろの方ほうを云いふ。餘香乍入衣よかうしちやく、雪ゆきなりと思おもひしに香氣かうきの衣ころもに入いるを見みれば、雪ゆきにあらずして芳はななるを知る、全ぜんと乍しちと工夫くふうのある所ところ。春風且莫定しゅんぷうじやくちやく、定ちやくは止し、ヤムなり、春風吹しゅんぷうふき止やむことはならぬ。吹向玉階飛ふきかうぎよくかい、天子てんしの座所ざしよまで此この花はなと此この香かとを飛とばせよと言いふ。

【評論】此この篇へん、王維わうゐと同じく賦ふしたるなり、春風しゅんぷうの十字じゆじは言げんを託たくす、己おのれも登用とうようせられんことを欲ほつすとの説せつあり。蔣一葵しやういき曰いはく、寓意ぐうい彼かれに在あり。鍾惺しゆせい曰いはく、首二句しゆじく、獨歩どつぽと稱しょうす可べし。

九日陪元魯山登北城留別

蕭穎士

綿連めんれん渢川ふんせん迴わ香渺かうみやう鴉路深あろふか、彭澤興不淺ほうたくきやうあさ臨風動歸心

綿連めんれんとして渢川ふんせん迴わか、香渺かうみやうとして鴉路深あろふかし、彭澤興不淺ほうたくきやうあさからず、風かぜに臨のぞんで歸き心を動うごかす、

【略傳】蕭穎士しやうえいし、字あやなは茂挺もてい、四歲能さいよく文ぶんを屬ぞくす、十歲大學じゆさいだいがくに補ほし書を觀かん、一覽いちらん即すなはち誦しやうす、各家かくかの譜ふ系けい、書籍しゆしやくの學がくに長ちやうず、開元中進士かいげんちゆうしんしに擧あげられ、祕書正字ひしよせいじに補ほす、名な天下てんかに播しく、蕭夫子しやうふしと號がうす、後のち汝南じよなんの逆旅ぎやくりよに客死かくしす、門人もんじん、元げん先生せんせいと諡おくりなす、集十卷しゆじくあり。

【句釋】九日陪元魯山きゅうじつはいげんろくしやう、元德秀げんとくしゆ、字あやなは紫芝しし、河南かなんの人ひと、家貧いへひんにして求もとめて魯山ろさんの令れいと爲なる、歲滿としみち筥しに一織けんを餘あまし、柴車さいしやに駕がし去さる、天下てんか其その行おこなひを高たかしとし、名なを言いはず、之これを元魯山げんろさんと謂いふ、此この詩し、魯山ろさんを去さりて、河南かなんに歸かへるとき留別りうべつするなり。綿連めんれんは絲いとの如ごとく續つづくこと。渢川ふんせんは魯山ろさんに出いで、流ながれて葉縣せつげんより、砂河さがに入る。迴わはハルカなり遠えんなり。香渺かうみやうは深遠しんえんを形容けいようする語ご。鴉路深あろふか、三鴉路さんあろ、南陽府なんやうふの北きた、七十里ななじゆりに在あり、二路にろに分わかつ、東北とうほくより西せいを帶おびびて行ゆく者もの、之これを三鴉路さんあろと謂いふ、即すなはち西せい洛らくの便路べんろなり、石川せきせんを第一鴉路口だいいあろこうと爲なし、分水嶺ぶんすゐりやうを第二鴉路口だいいあろこうと爲なす、今いま汝州じよしゆうの界さかひに在あるものは第一鴉路口だいいあろこうより相傳あひつたふ、漢かんの光武くわうぶ、北河朔きたかきやくを超こえ此こに至いたりて路みちを失しつす、鴉あの馬前ばぜんに引ひくを得う得え、因よつて名なくと。彭澤ほうたくは縣けんの名な、晉しんの陶淵明たうえんめい此こに令れいと爲なる、今いま以もつて魯山ろさんを淵明えんめいの豪傑かうけつに比ひす。興不淺きやうふせん、此この三字じは晉しんの庾亮こりやうが老子らうし此處興不淺ここのこゝにきやうふせんの語ごを取とる、九日きゅうじつなるが故ゆゑに特に晉代しんたいの故事こじを出いす。臨風動歸心りんぷうどうきしん、送おくる者ものは歸かへる者ものを羨うらやむ意いなり。

【評論】此この篇へん、他奇無たきなしと雖いへども、情じやうの切せつなる處ところあり。蔣一葵しやういき曰いはく、九日きゅうじつ便べんち彭澤ほうたくを用もちふ、常談じやうだんのみ、然しかれども留別りうべつに於おいて則すなはち切せつ。鍾惺しゆせい曰いはく、留別りうべつ、切せつにあらず、切せつは縣令けんれいを罷やめて歸かへるに在あり、正しやう

面と側面との解に依つて異なるなり。

平蕃曲

劉長卿

渺渺成煙孤。茫茫塞草枯。隴頭那用閉。萬里不防胡。

渺渺として成煙孤なり、茫茫として塞草枯る、隴頭那ぞ閉づるを用ひん、萬里胡を防がず、

【句釋】平蕃曲は唐の凱曲、吐蕃を平伏せし曲。渺渺は水の長き形容、轉じて他の物へ通ず。成煙孤、一直線に上る故に孤と云ふ。茫茫は原野が廣大なる形容、轉じて他の物へ通ず。塞草枯、正に是れ秋晚。隴頭、隴山の頭に關門あり。那用閉、蕃人再び侵入せず、閉づるの要無し。萬里不防胡、關門に守備兵を置くを用ひず、胡兵は關門に入らざるなり。

【評論】此の篇、中唐の詩としては盛唐に近し、語の平直なるは即ち雄偉なり、婉致を缺くと蔣一葵は云ふ。婉致も題に依つて然り、此の如き題、婉致の要なし。

平蕃曲

絶漠大軍還。平沙獨戍閒。空留一片石。萬古在燕山。

絶漠大軍還る、平沙獨戍閒なり、空しく一片の石を留めて、萬古燕山に在り、

【句釋】絶漠は絶塞沙漠、匈奴の南界を言ふ。大軍還、凱旋する。平沙は是れも沙漠なり。獨戍閒、大軍は還るも、小軍は守る。空留一片石、一箇の石、即ち碑石。萬古在燕山、平定したる功を記して、燕山上に碑石を樹つ、空の一字を以て諷諭の意味隱然たり。

【評論】此の篇、尙盛唐の氣味あり。唐汝詢曰く、空留の二字味有り、平直爲らず、と蔣一葵を破したる説なり、當る。

逢俠者

錢起

燕趙悲歌士。相逢劇孟家。寸心言不盡。前路日將斜。

燕趙悲歌の士、相逢劇孟の家、寸心言ひ盡さず、前路日將に斜ならんとす、

【句釋】逢俠者、相與に信する者、是非を同じくする者、力能く公侯を折く者、是を俠者と云ふ、和訓に「ウデコキ」とあり、能く當る。燕趙、燕と趙との國、古代より最も此の俠者多し、一方に勢力あるものあればなり。悲歌士、世を憤る慷慨の士。相逢劇孟家、劇孟は漢代の人、商賈を以て資と爲し、俠を以て顯はる、孟が母死して遠方より來り葬に會する者千乗と。寸心言不盡、我が寸心を言に發せんと欲するなれど、言は盡すこと得ざるなり。何故に然りと云はば、前路日將斜、吾老いて俠者と爲る能はずと嘆ず、俠者は骨力強きを要すればなり。

【評論】此の篇、前二句は俠者を叙し、後二句は我を叙す。蔣一葵曰く、末二句冷淡中より俠氣を逗出す、中唐の五絶として上乘なるもの。

江行無題

咫尺愁風雨。匡廬不可登。祇疑雲霧窟。猶有六朝僧。

咫尺風雨を愁ふ、匡廬登る可らず、祇疑ふ雲霧窟、猶六朝の僧あらんかと、

【句釋】江行、仲文秦中より楚を歴、吳に入る、江行百篇を作る。無題は有るも無きも可なり。咫尺、咫は八寸、尺は一尺、以て其の近きを云ふ。愁風雨、風雨を愁ふる所以は、匡廬不可登、匡廬山は彭蠡の上に在り、匡裕は周の威王の時の人、生れて神靈なり、此の山に廬す、故に名く、此の名山も風雨の爲め、空しく望んで登る能はず。祇は只なり。疑雲霧窟、雲霧中の巖窟には、猶有六朝僧、六朝の僧は晉の惠遠法師を主として、其餘の高僧を言ふ、思慕の念あるなり。

秋夜寄丘二十二員外

韋應物

懷君屬秋夜。散步咏涼天。山空松子落。幽人應不眠。
君を懷うて秋夜に屬ふ、散步涼天に咏ず、山空しうして松子落つ、幽人應に

眠らざるべし。

【句釋】丘は姓、二十二は尊稱。員外は官名。懷君屬秋夜、屬は會ふなり、當るなり。散步は道を限定せず來往する。咏涼天「天ヲ」と訓ずる本あり、「天ニ」の訓が可し、涼天に吟咏するなり。山空、人聲も無く、羣籟の聲も無し。松子落、松の實が落つる微音を聞くのみ。幽人は隱人、世を隠る人、幽は深遠なるを以てなり。應不眠、員外は定んで松子の落つる音を聞いて、我と同じく尙眠に就かざらんと。

【評論】此の篇、秋夜の寂寥たる景情を描出して、實に幽致を極む、韋蘇州は淵明を學んで、其の澹遠を悟るもの。蔣一葵曰く淺にして遠し、自から蘇州の本色を見る。

聽江笛送陸侍御

遠聽江上笛。臨觴一送君。還愁獨宿夜。更向郡齋聞。

遠く江上の笛を聽き、觴に臨んで一に君を送る、還愁ふ獨宿の夜、更に郡齋に向て聞かんを、

【句釋】聽江笛送陸侍御、陸は姓、侍御は官名。遠聽江上笛、外界の狀。臨觴一送君、席上の狀。還愁獨宿夜、今日より以後の事。更向郡齋聞、郡長の官舎にて聞かんことを愁ふ、此の別を憶ひ起

すなり、蘇州は郡長なればなり。

【評論】此の篇、平平の語、亦以て蘇州の詩境。譚元春曰く一意相關。

聞雁

故園眇何處。歸思方悠哉。淮南秋雨夜。高齋聞雁來。

故園眇として何れの處ぞ、歸思方に悠なる哉、淮南秋雨の夜、高齋雁の來るを聞く、

【句釋】故園眇、此の眇は耳に従ふ字と爲り易し、目に従ふ字、和訓の「スガメ」一目小なるなり、然れども渺字と同様に用ふ。何處、渺渺として處を知らず。歸思方悠哉、故園の歸思あるも、如何せん遠方にて悠かなり。淮南は今の滁州、蘇州が滁に在りし時。秋雨夜、夜なり、故に一層寂し、日にては寂しからず、高齋は蘇州が住室、聞雁來。雁の聲を聞くなり。

【評論】此の篇、前二句は未だ雁を聞かざる時の思、後二句は正しく題目に歸す、情先にして、景後なり。蔣一葵曰く、更に愁を説かず、愁自から言ふ可からず。唐汝詢曰く、方字味有り。

答李泚

林中觀易罷。溪上對鷗閒。楚俗饒詞客。何人最往還。

林中に易を觀罷んで、溪上鷗に對して閒なり、楚俗詞客饒し、何人が最に往還する、

【句釋】李泚の信書に對して答へしなり。林中觀易罷「易」に惟入于林中の語あり。溪上對鷗閒、易を觀罷んで、實際に之を應用して、鷗の機心を卜ふ。楚俗饒、饒は多なり。詞客、楚は大文豪の屈原を出せし地、後世も詞人墨客多きなり、今の湖北、河南、湖南、山東の地は悉く古の楚地なり。何人最、最は特の意に見よ。往還、誰が特に往還するぞ。

【評論】此の篇、前二句對を以て起し、其の人の安心立命する意を叙す、韋此の時洛陽の丞たり。鍾惺曰く閒趣掬すべし。

婕妤怨

皇甫冉

花枝出建章。鳳管發昭陽。借問承恩者。雙蛾幾許長。

花枝建章に出で、鳳管昭陽に發る、借問す恩を承くる者、雙蛾幾許か長き、

【略傳】皇甫冉、字は茂政、潤州の人、十歲能く文を屬る、張九齡之を嘆異す、天寶の間、弟曾と俱に登第す、無錫の尉を授く、難を避けて陽羨に居る、大歷中、王綰が掌書記と爲る、左金吾衛兵曹參軍左輔闕に卒す、集三卷あり。

【句釋】婕妤怨は上に辨せり。花枝出建章、此の句意も亦前に辨せり。鳳管、鳳皇の形を以て作る管。發昭陽、昭陽宮は天子の在す宮、婕妤は長信宮より之を聞く。借問承恩者、天子に侍して管を吹く者を承恩と云ふ、自分以外の美人、飛燕と表はに言はざるなり。雙蛾は美人の眉毛、幾許長、何程に雙蛾が長きや、雙蛾の長きは美人なればなり。

【評論】此の篇、罵る者と、稱する者とあり。顧華玉曰く無味なり。鍾惺曰く、怨言ふ可らず、又出と發と下し得て妙、花枝が出でて美人を思ひ、鳳管發して承恩を知ると、説を立てし人あり、仔細に之を讀む、女兒の情を言うて、怨意言外にある、無味にはあらず、顧評誤れるもの。

題竹林寺

朱放

歲月人間促。煙霞此地多。殷勤竹林寺。更得幾回過。

歲月人間促り、煙霞此地に多し、殷勤す竹林寺、更に幾回か過ぐるを得ん、

【略傳】朱放、字は長通、襄州の人、越の剡溪に隠れ、貞元の初、召して拾遺と爲す、就かず、集一卷あり。

【句釋】竹林寺は廬山に在り。歲月人間促、人間は歲月の爲め驅られて、生計特に忙がし。煙霞此地多、山中は塵街と異なり煙霞が特に多し、此は閒なり。殷勤は丁寧と同じ、意を屬けること。竹

林寺、此の寺やと喚ぶ。更得幾回過、人間は生計の爲め多事、過ぎんと欲して屢ば過ぐる能はざるなり、蓋し過ぎんと欲する願はあるなり。

【評論】此の篇、平平淡淡、話言の如きも、塗澤するものに勝る、第三句は二句を承け、第四句は一句を承ける、細心に讀むべし。

秋日

耿漳

返照入閭巷。憂來誰共語。古道少人行。秋風動禾黍。

返照閭巷に入る、憂來誰と共に語らん、古道人行少に、秋風禾黍を動かす、

【略傳】耿漳は河東の人、代宗の寶應二年の進士、大理司法と爲り、左拾遺に卒す、詩二卷あり。

【句釋】返照は夕照。入閭巷、街區の終路、俗の場末なり。憂來誰共語、秋風に堪へざるも、語る者は無し。古道少人行、人は新道を行き、古道は行かず。秋風動禾黍、禾は「イネ」黍は「キミ」箕子麥秀歌に禾黍油油とあり。

【評論】此の篇、即景を叙して、凄然餘有り。黃家鼎曰く感慨冷致あり。鍾惺曰く之を讀む凄然。郭氏曰く布景蕭寂、只一句情に入る、妙妙と。

和張僕射塞下曲

盧綸

月黑雁飛高。單于遠遁逃。欲將輕騎逐。大雪滿弓刀。

月黒うして雁飛ぶこと高し、單于遠く遁逃す、輕騎を將て逐はんと欲すれば、大雪弓刀に滿つ、

【句釋】和は例の如し。張は姓。僕射は官名、三侯の一。塞下曲は樂府題なり。月黑雁飛高、月明なるときは、胡兵攻め來る、月黒きに依つて唯雁聲のみ高し。單于遠遁逃「漢書」匈奴傳に、匈奴事を擧ぐ、常に月の盛壯に隨ひ、以て攻戰す、月虧くる時は兵を退く、又「漢書」陳湯傳に、單于必ず遁逃遠舍して敢て邊に近かずと。欲將輕騎逐、輕騎を將て其の遁逃する單于を逐はんと欲すれば、大雪滿弓刀、一尺以上積む雪を大雪と云ふ、弓刀に滿つは引かんと欲するも能はざるなり。

【評論】此の篇、邊威の壯、守備の整を見て、士卒の寒苦に堪ふるを言ふ。顧華玉曰く、中唐音律柔弱、所謂古樂府なるもの獨此の篇盛唐の作に參すべし。大に當る。

別盧秦卿

司空曙

知有前期在。難分此夜中。無將故人酒。不及石尤風。

前期の在る有るを知れども、分れ難し此の夜の中、故人の酒を將て、石尤の風に及かざらしむること無かれ、

【略傳】司空曙、字は文明、廣平の人、進士第に登る、貞元の初、水部郎中と爲る、虞部郎中に終る、集二卷あり。

【句釋】知有前期在、前程は期限あり、一刻も遲緩すべからず、我も之を知る、而かも情に於て戀戀。難分此夜中、奈何せんや此の夜遽爾として手を分つに忍びざることを。無將故人酒、今暫時は宜しからんと一杯又一杯と友人が酒を斟むも可いが、不及石尤風、期に後れて石尤風が吹き、海水暴れて舟を發する能はざらしむる事は不可と言ふなり、石尤風は打頭の逆風、即ち海上に起る颶風なり、「五雜俎」に、相傳ふ石氏の女、嫁して尤郎の婦と爲る、尤出でて歸らず、妻之を憶うて死に至る、曰く吾當に大風（現今の颶風なり）と作り、天下の婦人の爲めに高旅を阻ふべしと、此の如き傳説より、颶風を石尤風と稱す。

【評論】此の篇、情を言ふ微に入り、巧妙の作とす。鍾惺曰く情語噴を帶ぶ妙と。顧華玉曰く情多し、所以に得難し。

幽州

李益

征戍在桑乾。年年薊水寒。殷勤驛西路。此去向長安。

征戍桑乾に在り、年年薊水寒し、殷勤す驛西の路、此を去つて長安に向ふ、

【句釋】 幽州、范陽盧龍郡は幽州に屬す。征戎在桑乾、桑乾河は山西の大同府城南六十里に在り、源は馬邑縣の北、洪濤山下に出づ、金龍池水と合流して東南盧溝河に入る、李益は武人なればなり。年年蕪水寒、蕪水は即ち桑乾なり、二句に此の如く用ふる法は、是を疊法と謂ふ、桑乾は縣名と見て、河と見ざるも可なり。殷勤、旁徑に依らず、一直線に行く、是れ殷勤なり。驛西路、幽州驛西路は長安への道路。此去、此の幽州を去つて。向長安、陝西の鳳翔府は即ち漢の西都、幽州より此に至る、數千里程なり。

【評論】 此の篇、征戎の久しき、其の客思に堪へざるを言ふ。鍾惺曰く、情思は此去の二字に在り。譚元春曰く、久戍豈怨まざらん、妙不言に在り。

三閭廟

戴叔倫

沅湘流不盡。屈子怨何深。日暮秋風起。蕭蕭楓樹林。

沅湘流盡きず、屈子怨何ぞ深き、日暮秋風起る、蕭蕭たり楓樹林、

【略傳】 戴叔倫、字は幼公、潤州の人、蕭穎士に師事して門人と爲る、貞元中及第す、劉晏奏して湖南に主運と爲す、徳宗の建中中、撫州の刺史を守り、後、容管經略に遷る、徳宗曾て中和節詩を賦せしむ、使を遣はして寵餞し代つて還り

戴叔倫傳、新唐書二百四十三。

道に卒す。

【句釋】 三閭廟は楚の屈原の墓なり、屈原は楚の懷王に仕へて三閭大夫と爲る、三閭の職は王族の三姓を掌る、昭屈景と曰ふ、廟は湖南の長沙府湘陰縣の北六十里に在り。沅湘、屈原の騷に沅湘を濟りて以て南に征す、沅水は源四川に出て沅州を経て常德府の界に入り、湘水と相合す、故に沅湘と稱す。流不盡、沅水は東流、湘江は北流し、最後に合するが、其の流は不盡なり。屈子怨何深、屈原懷王に仕ふ、同列譖して之を疏んず、乃ち離騷を作る、襄王立つて、復讒言を信じ、原を江南に謫す、是に於て漁父の諸篇を作り、以て志を見はず、遂に自ら汨羅江に沈んで死す、沅湘は能く流るゝも、其の怨は流す能はざるなり。日暮秋風起、秋風は哀愁を帯ぶるもの、況や日暮に於いて聞くをや。蕭蕭、風が樹を吹く音。楓樹林、廟前に在る楓林を言ふ。

【評論】 此の篇、三閭を敬慕する念有りて作るもの、屈子を言ひ盡さざる感あるも、五絶の短言、止むを得ざるべし、戴は七言に、「沅湘日夜東流し去る、愁人の爲めに少時も住まらず」の句あり。

思君恩

令狐楚

小苑鶯歌歇。長門蝶舞多。眼看春又去。翠輦不曾過。

小苑鶯歌歇み、長門蝶舞多し、眼に見る春又去るを、翠輦曾て過ぎず、

【略傳】 令狐楚、令狐は姓、楚は名、字は穀士、五歳文を能くす、冠に及んで進士に擧げらる、後太原の書記と爲る、徳宗文を喜び太原奏議を省る毎に能く楚が所爲を辨ず、是れに由つて名重し、累遷して中書侍郎、同平章事と爲る、後、山南節度使を拜して卒す、是の夕大星の寢上に隕つる有り其の光、廷を燭す、坐して家人と訣れ、乃ち終る、漆園等の集一百三十卷あり。

【句釋】 思君恩は宮詞なり、宮女幸を望むの情を寫す。小苑は芙蓉苑なり。鶯歌歇、歌は鶯の音を言ふ。長門は宮名、漢の孝武の陳皇后は寵を擅まゝにし貴に驕る十餘年、子無し、長門宮に退居す、蝶舞多、鶯は歌むも、蝶は猶ほ舞ふ。眼看は眼前に看る。春又去、上の二句を承けて晩春の節を叙す。翠輦は天子の幸車。不曾過、春晚れんとして幸は未だし。

令狐楚傳、新唐書卷一百六十六、舊唐書一百七十二。

【評論】 此の篇、宮女の怨むが如く、訴ふるが如き狀を寫出して見る如し。譚元春曰く「東髮より深宮を守り、白首まで恩澤無し」是れ此の詩の注脚。

登柳州峨山

柳宗元

荒山秋日午。獨上意悠悠。如何望郷處。西北是融州。

荒山秋日午なり、獨上りて意悠悠、如何ぞ郷を望む處、西北是れ融州、

【句釋】 柳州は今の廣西省柳城縣の西南地を云ふ、元和十年に宗元此に刺史と爲りて來る。峨山は府城の西に在る、山巔石あり鶯の如し。荒山、石山の樹木なぞ生せず荒山と稱する所以。秋日午、日の方に中なる時。獨上、伴無し。意悠悠、意思遠し。如何は「ドウシテ」の和語に當る。望郷處、柳が故園は河東なり。西北是融州、西北が京兆に當れども、京兆は見る能はず、却て融州を見る。

【評論】 此の篇、山を咏するにあらず、但自身の情想を叙するなり、淵明を學んで其の自然を得たりとは此の詩に對する通評とす。

秋風引

劉禹錫

何處秋風至。蕭蕭送雁羣。朝來入庭樹。孤客最先聞。

何處より秋風至る、蕭蕭として雁羣を送る、朝來庭樹に入る、孤客最先に聞

【略傳】 劉禹錫字は夢得、中山の人、貞元九年の進士、博學宏詞の科に登る、監察御史と爲る、時に王叔文、幸を得、禹錫與に交る、叔文敗れて朗州の司馬に貶せらる、召還して復出で、播州に刺たり、連州に易ふ、又夔州に徙る、後和州に

劉禹錫傳、新唐書卷一百六十八、舊唐書卷一百六十。

徙る、入りて主客郎中と爲る、裴度薦めて翰林學士と爲る、太子賓客に遷る、以て禮部尚書を檢校して卒す、禹錫才を恃んで廢し、怨望無きにあらず、年益す晏れ、偃蹇合ふ所寡なし、乃ち文章を以て自適し、晩節尤も精し、樂天常に推して詩豪と爲す、集四十卷あり。

【句釋】 秋風引、古樂府に思歸引あり、走馬引あり、引は曲と殆んど同義。何處秋風至、秋風の聲を聞く、其の來る所を知らず。蕭蕭送雁羣、雁群が秋の爲め送られ行く。朝來入庭樹、入る者は秋風なり。孤客、雁羣と反對に我は孤客、乃ち寂寞たる人なり。最先聞、聞くは愁へ聞くなり。

【評論】 此の篇、題目の如く、句句風ならざるは無し。蔣一葵曰く、聞に堪へずと曰はずして最先に聞くと曰ふ、語意最も深し。鍾惺曰く、甚だ悲秋の景を得。

鞏路感懷

呂溫

馬嘶白日暮。劍鳴秋氣來。我心渺無際。河上空徘徊。

馬嘶きて白日暮れ、劍鳴りて秋氣來る、我心渺として際無し、河上空しく徘徊す、

呂溫傳、新唐書一百六十、舊唐書一百三十七。

【略傳】 呂溫、字は和叔、河中の人、陸贄に従つて春秋を治む、進士第に擢んでられ、藻翰精富、流輩推尚す、李吉甫が陰事を奏す、憲宗怒り、均州の刺史に貶す、再び

道州の刺史に貶す、集十卷あり。

【句釋】 鞏路、鞏洛の路即ち洛陽の東に當る。感懷、貶後に此の路を過ぎ感懷を催せしならん。馬嘶白日暮、黄昏途上にて匹馬嘶く、憂愁を抱く者何ぞ聞くに堪へん。劍鳴秋氣來、北方肅殺の氣、我が劍佩を襲うて來る。我心渺無際、心に際あらば愁へず、際無し、愁ふる所以、種種の哀愁起りて息まず。河上空徘徊、宿を求むるに所なく空しく徘徊す。

【評論】 此の篇、唯是れ凄慘の況、凄慘の情。蔣一葵曰く、意、言外に在り。譚元春曰く、窮まらざるの思、直ちに會得すべし。

古別離

孟郊

欲別牽郎衣。郎今到何處。不恨歸來遲。莫向臨邛去。

別れんと欲して郎が衣を牽く、郎今何の處に到る、歸來の遲きを恨みず、臨邛に向つて去ること莫れ、

【略傳】 孟郊、字は東野、湖州武康の人、少うして嵩山に隱る、性耿介、

孟郊傳、新唐書一百七十六、舊唐書一百六十。

五十にして進士第に登る、深陽尉と爲る、日に詩を賦す、曹務多廢す、令、府に白し、尉を以て之に代ふ、其の半俸を分つ、鄭餘慶奏して參謀と爲す、卒して貞曜先生と

謚す、集十卷あり。

【句釋】古別離は樂府題、別離十五曲の一、別離の哀愁を言ふなり。欲別牽郎衣、婦が夫に別れんとして其の衣袖を牽き言はんと欲する事有るなり。郎今到何處、向ふ所の分明なるを希ふなり。不恨歸來遲、郎は郎の活動あり、歸日の遅きは恨みとは思はず。莫向臨邛去、漢の司馬相如、臨邛の令、王吉と善し、臨邛の富人卓王孫が、王吉に貴客有るを聞き、具を爲し之を召す、客百を以て數ふ、相如至りて一座皆傾むく、酒酣にして、令琴を奏せんと相如に請ふ、相如令の爲め鼓すること一再行、時に王孫、女あり文君と云ふ、新に寡にして音を好む、故に相如謬りて令の與に相重んせられて、琴心即ち鳳が凰を求むる曲を奏して之を挑む、文君竊かに戸より窺うて、心悦んで之を好む、夜相如に奔る、是司馬相如傳に出づる所、今の詩意は、郎が若し臨邛に行かば、又此の如きことあらん、依つて行く莫かれとなり。

【評論】此の篇、婦女の心事を道ひ得て餘蘊無し。鍾惺曰く真にして切。

尋隱者不遇

賈島

松下問童子。言師採藥去。只在此山中。雲深不知處。

松下童子に問へば、言ふ師は藥を採り去ると、只此の山中に在らん、雲深う

して處を知らず、

【略傳】賈島、字は浪仙、范陽の人、連りに文場に敗れ、遂に浮屠と爲る、名は無本、東都に来る、韓愈其に文を爲ることを教ふ、遂に浮屠を去つて進士に擧げらる、大中の末、長江主簿と爲る、長江集あり、世に行ふ、「劉公家語」に、島、僧と爲り、法乾寺に居す、宣宗嘗て微行し寺に至る、鐘樓に吟聲あるを聞き、島が案に於て詩を取りて之を覽る、島、臂を攘りて睨みて曰く、郎君何ぞ此を會せんや、遂に詩卷を奪ひ取る、帝慚ちて樓を下つて去る、遂に島を除して長江主簿と爲すと。【句釋】隱者は學識有りて仕へず、山林に隱る者、不遇、不在なり。松下問童子、隱者の在否を問ふ。言師採藥去、隱者は多く藥草を採收するが商賣なり。只在此山中、在處は分明なり、如何せん、雲深不知處、其の在處を知る可からず。【評論】此の篇、「高士傳」の夏馥、林慮山中に入る、家人之を求むれども處を知らずとあるを學んで作る。俞仲蔚曰く、意味閒雅、率ね人口に膾炙す。鍾惺曰く、愈よ近うして、愈よ杳たり。

賈島傳、新唐書一百七十六。

宮中題

文宗皇帝

輦路生秋草。上林花滿枝。憑高何限意。無復侍臣知。輦路秋草を生じ、上林花枝に滿つ、高きに憑る何限の意、復侍臣の知る無し、

【略傳】 文宗皇帝、諱は昂、憲宗の子、恭儉文雅、治功に志有り、然も優游不斷、侍臣に制せらる、貞觀開元の美を紹ぐこと能はずして崩す、年三十二、在位十五年。

【句釋】 題意は明白なり。輦路生秋草、草の生ずるは輦の過ぎる無きが爲めなり。上林花滿枝、春の如き句なるが、秋にも通ずべし、上林は苑の名、花枝に滿つるならんも、曾て游幸せず。憑高、高處より見る。何限意は、無量の感慨と云ふこと。無復侍臣知、忠臣の無きを云ふ、忠臣ならば、帝の感慨を知るべきなり。

【評論】 此の篇、失政の如何ともすべからざるを慨して作る、文宗は天子として明君の部に入るべき人なり、太和九年、王涯鄭注を誅して後、仇士良、權を弄す、文宗樂しまず、往往瞠目獨語す、左右敢て進問する者莫し、因つて此の詩を賦す、翌日牡丹を觀、吟じ罷みて嘆息して泣下る、因つて命じて樂を作り自適す、宮人沈翹翹、河滿子を歌ふ、浮雲白日を蔽ふの句あり、其の聲宛轉、文宗因つて歎歎して問うて曰く汝之を知るや、此れ文選の古詩第一首、蓋し忠臣姦邪の蔽ふ所と爲るなり、乃ち金臂環を賦す、後世の論者曰く、人主孤立、威權を人に假す可けんや、我邦慶長以來の主上は此の感慨を抱かれしものならん、哀しい哉。

文宗傳、新唐書卷八。

勸酒

于武陵

勸君金屈卮、滿酌不須辭。花發多風雨、人生足別離。

君に勸む金屈卮、滿酌辭するを須ひず、花發いて風雨多く、人生別離足し。

【句釋】 于武陵は、杜曲の人、李頻と同時の人。勸酒、誰に勸むと限りたるにあらず、通漫に此の題を設けたるもの。勸君金屈卮、金製の酒器なり、屈は飲器に把子の有るもの、卮は圓器なり、一に卮と名く、卮は小卮なり、宮禁の酒盃は皆金屈卮を用ふ、李適之に匏子卮あり、昭宗に鸚鵡卮なり、鸚鵡は水鳥即ち「フシドリ」なり。滿酌不須辭、痛飲淋漓たるを辭せざるなり。花發多風雨、富貴圓滿千秋萬歳は天が許さぬと云ふ意なり、花發けば風雨の爲めに損害せらる、是の故に無用の心配せずと、飲む則は飲む可し。人生足別離、生別と死別の二なり、生別は免るゝ者あるも、死別は免るものあらず、心配せずに飲む則は飲むべきなり。

【評論】 此の篇、花の未だ落ちざるに及び、人の未だ別れざるに及んで、滿飲せよと勸むるなり、全首辭婉に意長し、人をして悲を悲しみ、樂を樂しましむと鍾惺の評言、要を得たり、第三句尤も人口に膾炙す、以て千載の名句とす。

秋日湖上

薛瑩

落日五湖游。煙波處處愁。浮沈千古事。誰與問東流。

落日五湖に遊ぶ、煙波處處愁ふ、浮沈す千古の事、誰與東流に問はん、

【句釋】 薛瑩は唐末の人、洞庭詩三卷あり。落日は黄昏なり、五湖は洞庭湖を言ふ、蘇州の西南水五道に通ず、故に名く、「禹貢」に之を震澤と謂ひ、「周宮」「爾雅」に之を具區と謂ふ、「史記」「國語」に之を五湖と謂ふ。煙波、水上の煙波。處處愁、此處も彼處も我が愁の種ならざるは無し。浮沈千古事、此の湖開闢以來、水を見て樂しみし者もあらん、水を見て悲しみし者もあらん、世の盛衰興亡、猶ほ水の浮沈の如しと譬へたるなり。誰與は人無きなり。問東流、問ふ人無きゆる東流に興廢の事を問はんとなり。

【評論】 此の篇、水は客にして、情は主なり、水を咏するが主意にあらず、是を以て誦す可し。譚元春曰く、再誦に堪へず。黃家鼎曰く、此の茫茫に對して、百端交も集る。徐秋濤曰く、造語冷甚し。皆當る。

題慈恩塔

荆叔

漢國山河在。秦陵草樹深。暮雲千里色。無處不傷心。

漢國山河在り、秦陵草樹深し、暮雲千里の色、處として傷心ならざるは無し、

【句釋】 荆叔は「唐書」に傳無し。慈恩塔は五古登慈恩寺浮圖の條下に於て辨せり。漢國山河在、塔上より四方を望めば、漢代の山河は依然たり。秦陵草樹深、是れも塔上より望む、但秦の始皇陵に草樹森森たり。暮雲千里色、日の極むる處、唯暮雲漸漸逼り來る。無處不傷心、咸陽は秦漢の故都、壯麗繁華、天下に甲たり、然るに只今の風景、此の如し、豈に傷心せざるを得ん。

【評論】 此の篇、全く塔を咏するにあらず、塔上より望んで、我が情懷を叙したるもの、詩格中晩唐にあらず、全く盛唐諸公の概あり。蔣譚二家の評、言ふに足らず、此に出さざる所以。

伊州歌

蓋嘉運

聞道黃花成。頻年不解兵。可憐閨裏月。偏照漢家營。

聞く説く黃花成、頻年兵を解かずと、憐む可し閨裏の月、偏に漢家の營を照

【句釋】 蓋嘉運は「唐書」に傳無し。伊州歌は塞上の曲と、閨怨との二を兼ねて言ふ、伊州、吾郡は隴右道に屬す、初め伊吾城主七城を擧げ來降す、因つて其の地を列て伊西州と爲し、黃花成を置く、「唐書地理志」今日の甘肅省安西州の北是れなり、伊州歌は樂府題にて、一名商調曲、開元中に前五疊を進む、歌と爲す、後五疊を入破と爲す、蓋嘉運開元中西京の節度たりし時、此の詩を進むと。聞道

黄花戍、何人が聞く道くの人ぞ、婦人が聞くなり、夫の征戍を思うて、紫家戍、白狼戍、昌黎戍等十二戍ある、黄花戍は其の一なり、伊吾城を指す。頻年は毎年なり。不解兵、堅守して、兵を解散せしめず、此處を破られては直ぐ玉門を破らるゝ事となる。可憐閨裏月、夫の征を家に在て守る婦が空閨を照すの月み。偏照漢家營、我を照す月のみ、亦夫の成る漢家の陣營を照すなり、其の他は達すべからず。

【評論】此の篇、閨怨を叙するに毫も淫陋に墮せず、洵に盛唐の風格を具す。蔣一葵曰く、輕輕説き來り、轉更に沈著。

其二

打起黃鶯兒。莫教枝上啼。啼時驚妾夢。不得到遼西。
黃鶯兒を打起して、枝上に啼かしむること莫れ、啼時妾が夢を驚かし、遼西に到ることを得ず、

【句釋】打起黃鶯兒、強て「ウグヒス」を打き起して、莫教枝上啼、無理に早曉から啼かす事は止めて呉れる。啼時驚妾夢、夢にでも夫に遇はなければ、遇ふ時はあらず、征を守る長き、何時還るとも定まらず。不得到遼西、遼西は夫の成る處、遼西郡は今日の直隸省永平府盧龍縣なり。

【評論】此の篇、古今に議論多し、敖子發は曰く、此の詩淺淺の語、筆を提れば便ち難し、前輩人をして絶句を作らしむるに、打起黃鶯兒を誦せしむ、肺腑中より流出して牽強斧鑿の痕無し。王元美曰く、陶弘景が、山中何の有る所ぞ、嶺上白雲多し、只自ら怡悦すべし、持して君に贈るに堪へずと、此の詩同法、唯語意の高妙なるのみにあらず、其の篇法圓緊して、中間一字を増すことを得ず、一意を減することを得ず、起結極めて斬然絶然其の中自から緩舒、餘法無くして餘味あり、謝茂秦曰く、杜詩、日は出づ籬東の水、雲は生ず舍北の泥、竹高うして翡翠鳴き、沙僻にして鷓鴣舞ふ、此れ一句一意、一句を摘んでも亦詩と成る、嘉運が此の詩、一意、一句を摘んでは詩と成らず、劉會孟曰く、恨恨極まり無し、謝評の一句詩と成らずとは、「枝上に啼かしむる莫れ」此の一句では何が啼のか分らぬと云ふに在り、「啼く時妾が夢を驚かす」是れも何が啼くのか分らん、洵とに其の説の如し、蓋し二十字を一句としたる作法として見れば別に故障あるべからず、例せば儲光羲の長安道詩、鳴鞭酒肆を過ぎり、袂服倡門に遊ぶ、百萬一時に盡き、含情片言無し」の類も作法稍此と似たり、何ぞ必ずしも「雲は生ず籬東の水」一句一意の詩のみ詩ならん、余は他の諸家の説に讚す。

哥舒歌

北斗七星高。哥舒夜带刀。至今窥牧马。不敢过临洮。

西鄙人

北斗七星高し、哥舒夜刀を帶ぶ、今に至るまで馬を牧せんと窺ふ、敢て臨洮を過ぎず、

【句釋】西鄙人は未詳。哥舒、姓。名は翰。蓋し突騎、哥舒部の酋長、世西安に居る、漢人種にあらず、漢の王忠嗣に事へて牙將に署す、吐蕃邊を盜む、翰半段槍を持して迎へ撃つ、向ふ所敵無し、名軍中を蓋ふ、後、神威軍を築き、青海に置く、吐蕃攻めて之を破る、更に龍駒島を築き二千人を以て之を成る、是に由つて吐蕃敢て青海に近かず、功を西域に樹つ、邊人之を歌ふ、後祿山の爲め殺さる、惜む可し。北斗七星高は、深夜の景色を言ふ、劍には七曜星を、

哥舒翰傳、新唐書一百三十五。

鏤するを以て其の劍氣と共に高きを言ふ。哥舒は元一部落の名なれども、以て其の姓と爲す。夜帶刀、好守するを言ふ。至今窺牧馬、胡人が漢土を犯すは畢竟自由に牧馬せんが爲めなり、胡人は其の期會を今日まで猶ほ窺ふ。不敢過臨洮、而かも漢土を侵す能はざるは哥舒が好守するに由る、臨洮は今日の甘肅省鞏昌府岷州なり。

【評論】此の篇、哥舒翰が武勇を嘆稱して全く遺憾なし。蔣一葵曰く、中國の爲めに氣を長うすの何等の愚評ぞや。譚元春曰く語斤兩あり。

答人

太上隱者

偶來松樹下、高枕石頭眠。山中無曆日、寒盡不知年。

偶來松樹の下に來り、枕を高うして石頭に眠る、山中曆日無し、寒盡くれども年を知らず、

【句釋】太上隱者は固より隱者、何人なるやを知らず。答人、他の問に答ふ。偶來松樹下、松は君子樹、隱者の憩ふ所當然なり。高枕石頭眠、列仙傳に、卓いかな修羊名石に太華に枕す。山中無曆日、史記に、文帝曰く、朕上帝の宗廟に事ふ今に十四年、曆日縣に長し。山中は事ふる物も無し、曆の無き所以。寒盡不知年、冬去つて春來るも知らざるなり。

【評論】此の篇、自身の世外に超然たることを示すなり。蔣一葵曰く、人隱者の本末を知る莫し、好事の者、其の姓名を問ふ、答へずして此の詩を留む、楊用修詩話に、山魃一足の怪、自ら太上隱者と稱し、民間に就いて酒を取る、詩を爲つて曰く「酒盡きて君沾ること莫れ、壺乾かば我當に發すべし、城市塵囂多し、山に還りて明月を弄せん、東坡が所謂山中の木客吟詩を解す即ち此。唐汝詢曰く、語太古の風あり、蓋し唐時の隱君子朱桃椎の類の如し、木石の性と稱する者は誕妄の語のみ。

國譯唐詩選卷六終

國譯唐詩選卷七

七言絕句

七言絶句は亦古樂府の梁の元帝の烏棲曲、江總が怨詩行の作に出づ、七言四句の樂府を唐人始めて聲勢を穩順にし以て絶句と爲す、徐伯魯の如きは第三句を主と爲すとの説なるが、妄説にて取るに足らず、四句中に就て主客の別斷じて有る無し、起承轉合皆重し、何ぞ獨三句のみ重からん、但景情虚實を相錯綜し、四句意味一貫して、竹に梅を接ぐ如き拙なくんば善し、此の選中に就て其の法を知るべし、余輩の嘔呶を要せず。

蜀中九日

王勃

九月九日望郷臺。他席他郷送客杯。人情已厭南中苦。鴻雁那從北地來。
九月九日望郷臺。他席他郷客を送の杯。人情已に南中の苦を厭ふ。鴻雁那ぞ北地より來る。

七言絶句

【句釋】

蜀中九日、王勃、沛王府の修撰と爲る、高宗の時、諸王雜を闘はす、勃戲れに文を爲り英

王の雞に檄す、高宗怒つて曰く、是且交構の漸なり、檄は兵を徵する書しりぞ、平當之を用ひず、斥けて府を出す、既に廢して劍南に客と爲る、此の詩、山に登り曠望して賦し以て情を見はすなり。九月九日望郷臺、初唐は平仄猶整正ならず、此の句法を爲す、盧照鄰に九月九日眺三山川の句あり、此の望郷臺は蜀の成都の北隋の王秀が築く所、他席他郷送客杯、勃が外に此の臺上で酒を飲み餞送する人ありて勃も之に廁るなり、他席の意味明了ならん。人情は他人にあらず、勃己が情なり。已厭、もはやあきた。南中苦蜀と限定せず、蜀の入るは勿論なれど、泛と南方の地を稱して南中の字を用ふ、苦は羈愁を言ふ。鴻雁那從北地來、「禮記月令」に、仲秋の月、鴻雁來と、注に曰く、自北而南來と、此の語を本として作る。

【評論】此の篇、佳節の日に於て、此の悲愁を發す、所謂人情の情たる所以、詩人の詩たる所以、唐汝詢曰く、唐人絶句、無情の處に於て有情を生ず、此の聯、是れ其の鼻祖、那字何字と同意義の場合あり、又語助の場合あり、那字は多く仄に用ふ、今平用としたるは、初唐未だ整正せざるものと知るべし、是を以て法と爲すこと勿れ。鍾惺曰く、情景相稱ふ、悠柔迫らず、兩の他字好對は、板ならず。

渡湘江

杜審言

遲日園林悲昔游。今春花鳥作邊愁。獨憐京國人南竄。不似湘江水北流。

遲日園林昔游を悲しむ、今春花鳥邊愁と作る、獨憐む京國の人南竄せられ、湘江水北流するに似ず、

【句釋】湘江の事、前に辨せり、審言、膳部員外郎に遷る、張易之に交通する罪にて峯州に流さる、此の詩其の時の作。遲日は「毛詩」の春日遲遲より出づ、日脚が「オソキ」なり。園林、江上の園林なり。悲昔游、審言前に吉州の刺史に貶せらる時、湘江を渡る、今復過ぐ、悲涙ならざらんや、又一説あり、江上の園林にあらず、京地に在りて見し事を追想して悲しむなりと、前説が可なる如し、何となれば、上に悲字あり、二句に愁字出づ、若し京地の園林とすれば、悲を想と爲すべし、悲字より見れば、前説信に近し。今春は上の遲日を承ける。花鳥作邊愁、今春の花鳥、今春はにあらず、典公は去春の花鳥は園林の樂と爲ると、誤るなり、のとはとの相違より此の異説を生ず、湘江は本來よりすれば邊地にあらず、長安より見れば邊地なり、此が邊地は上の句長安なりとは稱し難し。獨憐自ら憐笑する。京國人、審言は長安杜陵の人。南竄、南地に驅逐せらるゝを云ふ。不似、水と人と反對なれば云ふ。湘江水北流、湘水北流して二千里洞庭に入る、有情の人、無情の水を羨むなり。

【評論】此の篇、王勃が蜀中九日の詩と全く其の調を同じうす、想ふに漢土、地面廣大、南人は北人と異なり、西人は東人と異なり、東西南北の此の感、小島國の人より見れば、非常に力の強きものあらん、況んや流竄者に於てをや、譚元春曰く初唐七絶の冠と。

贈蘇綰書記

知君書記本翩翩。爲許從戎赴朔邊。紅粉樓中應計日。燕支山下莫經年。

知る君が書記は本翩翩、爲て許す戎に從つて朔邊に赴くを、紅粉樓中應に日

を計ふべし、燕支山下年を経ること莫れ、

【句釋】蘇は姓、綰は名、唐書に元帥節度使掌書記一人あり、書記は即ち記室なり、贈とあるも綰が從軍を送るなり。知君、蘇を指す。書記本翩翩、文章意の儘なるを云ふ、本は從來なり、飛鳥の自由なる形容を翩翩と云ふ、疾飛也と注して、障害物なきの形容、魏の文帝吳質に與ふる書に「元瑜書記翩翩として致しき、樂しむに足れり」、是れ陳琳を稱するの語、今以て蘇に比す、爲は典公の和訓「ヨリテ」とす、太だ善し、「ソレダカラ」の俗語に當る。許は勅許なり。從戎は征戎に從軍する。赴朔邊、朔は北なり、盡なり、萬物北に盡きて蘇して復生するなり、故に北を朔と曰ふ。紅粉樓は、婦人の粧樓、今は蘇綰が細君を指す、紅は「ベニ」粉は「オシロイ」口と面に著ける具。

中應計日、細君が良人即ち蘇の歸來の日を屈指して遅つならん。燕支山は焉支山とも書す、賀蘭山の支脈として其の中心を甘肅の甘州府とす、「西河故事」に云ふ、祈連山燕支の二山張掖酒泉の二界に在り、上に松柏五木あり、水草美なり、冬は温に夏は涼し、畜牧養に宜し、匈奴二山を失ふ、歌つて曰く我が祈連山を亡なふ、我が六畜をして蕃はざらしむ、我が燕支山を失ふ、我が婦女をして顔色無からしむ、此の山紅藍を産す、燕脂と爲すべし、闕氏の匈奴王とて以て飾と爲す、之を失ふ、則ち婦女顔色無き所以。下莫經年、此の如き蠻夷の地に久滯する莫れの説と、燕支山下美人多し、故に室家を以て之に感じ久滯する莫れとの二説あり、婦女の情として二説共に通ず、其の熟れに隨ふも讀者の選擇に從す。

【評論】此の篇、從軍者の自由にならざる反對に、婦女が理に依らず、専ら情の一片より言ふ所を記し、朋友の情、婦女の恨、狀し得て全く遺憾なし、紅粉と燕支と共に是れ燕脂、故に蜀中九日、渡湘江二詩の好對に如かざるに似たりと評する者は、木強漢の解、未だ婦女の情を解せざる者の言なり、瑞公は持戒比丘、到底詩趣を解せず。蔣一葵曰く、紅粉燕支切に映帶あり。鍾惺曰く、風韻挹すべし。

戲贈趙使君美人

紅粉青娥映楚雲。桃花馬上石榴裙。羅敷獨向東方去。謾學他家作使君。
紅粉青娥楚雲に映ず、桃花馬上石榴裙、羅敷獨東方に向つて去る、謾に他家を學んで使君と作らん、

【句釋】戲贈趙使君美人、人をして怒を發せしめざる戲は敢て詩道を害せず。趙は姓、使君は太守。美人は趙の愛妾ならん。紅粉は燕脂。青娥は美人の眉。映楚雲、楚の襄王、宋玉と、雲夢の臺に遊ぶ、高堂を望む、雲氣生ず、王曰く此れ何の氣ぞ、宋玉曰く、所謂朝雲是れなりと、巫山の神女と今の美人と其の美同じと云ふ。桃花馬は大宛より汗血馬を進む、一を紅叱撥と名け、二を紫叱撥と名け、其の六を桃花叱撥と名く、叱撥は馬の名。上石榴裙、石榴の花模様ある裙即ち下裳を翻めかして此の桃花馬に乗る。羅敷は邯鄲秦氏の女、千乗の王仁に嫁す、仁、後に趙王の家令と爲る、羅敷出でて桑を陌上に採る、趙王見て之を悦び、置酒して奪はんと欲す、羅敷善く彈箏す、陌上桑を作り、以て從はざるを示す、曰く「使君一に何ぞ愚なる、使君自ら婦あり、羅敷自ら夫あり、東方の千餘騎、夫壻上頭に居る」羅敷、趙王を指して使君と曰ふ、今趙氏の使君、故に其の愛する所の美人を羅敷に比せしなり。獨向東方去、使君と同行せず、今日は美人單獨にて東の方に往く、東方の字は「陌上桑」より取る。謾は何の理窟も無くと之意義。學は倣なり、「マネル」なり。他家は他人と同意味。作使君、古の趙王が羅敷を挑んだ如く、今日は我が古の趙王と化けて以て君を挑まんとかとの意、結局は杜自身の事を言ふ。

【評論】此の篇、杜の性格を表現して、全く此の外ならず、詩道には功ある人間なれども、其の品操の陋劣卑下、齒するに足らず、修文館直學士に登りて咏する所此の如し、眞に唾棄すべし。

銅雀臺

劉廷琦

銅臺宮觀委灰塵。魏主園陵漳水濱。即今西望猶堪思。況復當時歌舞人。
銅臺の宮觀灰塵に委す、魏主の園陵漳水の濱、即今西望して猶思ふに堪へたり、況や復當時歌舞の人をや、

【略傳】劉廷琦は開元の初の人、岐王範と友とし善し、酒を飲み、詩を賦して娛しむ。

【句釋】銅雀臺は魏の曹操が築く所、鄴都即ち今の河南省彰德府臨漳縣の地に在り、水井臺と金虎臺と並んで三臺と稱す、相去る各六十步、其上、複道樓閣相連なり、大なる銅雀高さ一丈五尺なるを鑄る、之を樓頂に置く、終に臨んで遺令す、總帳を上施し、朝晡宮人をして帳中に歌吹し、吾が西陵の墓田を望ましめよ。銅臺宮觀、觀は仄聲とす、觀の言たる、觀望にて、小なる者に觀望あらず、宮殿なりと知る可し。委灰塵、何人の爲めに灰塵に委せられたるか、古來の注書一言も記

載なし、余は謂ふ、魏の臣司馬懿の孫、西晉の祖たる司馬炎ならんと思ふ、臣だの君だのと稱するも、本是れ惡黨輩の集合、私慾以外、眼中に何事も無し、私事よりして遂に君主たる魏の宮殿を灰塵せしは、蜀にもあらず吳にもあらず、魏國より生ぜし、鼠輩の爲せし業なり。魏主は曹操なり。園陵漳水濱、單に漳水と言ふも、山西の鳩山に出るもの濁漳と名け、樂平縣少山に出づるもの清漳と名くるなり。即今は今日を言ふ。西望、曹操が死に臨んで愚語を吐きし西陵の墓田を望む。猶堪思、思字は平仄兩用、今は去聲四寔として用ふ、瑞公は憶の入聲なりと云ふが、妄斷なり、入聲にあらす、去聲にて可なり、曹操が意氣を思ふに堪へたるなり。況復、「マシテマタ」。當時、曹操の生死前後を指す。歌舞人、曹操の爲めに寵せられし歌妓等を一括して云ふ。

【評論】此の篇、銅雀の荒涼たるを叙して、詩人が一時の雄を憐みしものなり、奇警の所ならずと雖も、奸雄の跡を弔して全く遺憾無し。

送梁六

張說

巴陵一望洞庭秋。日見孤峰水上浮。聞道神仙不可接。心隨湖水共悠悠。

巴陵一望洞庭の秋、日に見る孤峰水上に浮ぶ、聞く道く神仙接す可からずと、心湖水に随つて共に悠悠

【句釋】張說が傳は前卷に出せり。梁は姓、六は尊稱、洞庭邊へ歸る人ならん。巴陵は湖南省の岳州府なり、晉に巴陵縣を置き、後建昌郡を置く。一望、巴陵より一望したるなり。洞庭秋、此の洞庭も同じく岳州府を中心とす、巴陵は高地、洞庭君山眼中に收まる。日見は日日見ること。孤峯は洞庭湖の中心に出づる君山を指す、洞庭山、湘山、共に君山の異名なり。水上浮、王子年の「拾遺記」に、洞庭山、水上に浮ぶ、下に金堂數百間なるあり、王女之に居るとあり。聞道は他の傳説を聞くと云ふ氣味。神仙、洞庭山、方六十里、下に金堂あり、仙女之に居る、即ち是れ仙境、梁六疑ふらくは、是れ洞庭山に歸隱するならん、是の故に仙を以て之を期す。不可接、接は近接、人間と仙女とは近づくを得ずと從來聞くなり。心は張說の心なり。隨湖水、梁六が赴く方の湖水に随つて。共悠悠、梁が心と同様に悠悠たるなり、悠悠は「ハテシナキ」なり際涯なきを云ふ。

【評論】此の篇、但湖水の悠遠を叙して、別離の意、自から顯然たるを覺ゆ。葉弘勳曰く、此の詩の苦き、題を掩うて以て見れば、誰か是れ梁六を送ることを知る者あらん、末句含情盡くる無し。

涼州詞

王翰

葡萄美酒夜光杯。欲飲琵琶馬上催。醉臥沙場君莫笑。古來征戰幾人回。

葡萄の美酒夜光の杯、飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す、酔うて沙場に臥す

君笑ふこと莫れ、古來征戰幾人か回る、

【略傳】王翰字は子羽晉陽の人、少うして豪邁嗜酒を喜び、進士第に擢でられ、昌樂の尉に調せらる張説、輔改し、召して正字と爲す、開元中、道州司馬に貶せられ卒す、集十卷あり。

【句釋】涼州詞は涼州の事に付いて詠ず、甘肅の平涼府、漢の安定、隋唐には平涼と稱す、今日は平涼と涼州とは遠隔の地とす、開元中、西涼の都督、郭知運が進むる所なり、沙門玄奘の「西域記」に龜茲國の王、臣庶の樂を知る者と、火山の間に於て風水の聲を聽く、節を約し音を成す、後翻つて中國に入る、涼州、伊州、甘州の如き、皆龜茲の境なり、今日の青海蒙古の地是れなり。葡萄は葡萄、蒲桃、義同じ、葡萄釀して以て酒を爲る、麴麥より甘し、善く酔ふ、涼州地方の名産とす、太宗、高昌を破り、馬乳蒲桃實を苑中に收め、之を種う、並に其の酒法を得、遂に酒を造て成る、綠色、芳香酷烈、長安始めて其の味を知ると、太宗本紀卷一にある。美酒、前の如し。夜光杯、「十洲記」に周の穆王の時、西胡、昆吾割玉刀、及び夜光常滿杯を獻す、盃は是れ白玉の精、光明夜照す、冥夜、盃を中庭に出し、以て天明くる比に向つて、水汁已に盃中に滿つると、涼州の民、獻じ來る物とす。欲飲、飲まんとしたら。琵琶、我が酒を飲まんとしたら、他人が琵琶を、馬上催で、馬上から琵琶の彈聲が起る、瑞公が此の「欲スレバ」の説を立つ、發明と謂ふ可し。典公の博識高明を以ても「欲シテ」と訓じたり、「シテ」には

王翰傳、新唐書卷二百二、舊唐書一百九十中。

斷じてあらず、琵琶を彈する者は他人なり、酒を飲む人にあらず。醉臥沙場、此の美酒を、美杯で飲み、更に琵琶が興を扶けて豪飲、酔を取り、暫時邊庭の苦を忘れ酩酊して平沙漠場に臥す。君は琵琶を彈する人を指す。莫笑、嘲笑し玉ふな。古來征戰、國の開闢以來、征伐戰闘する人。幾人回、戰死の者も多く、病死の者も多く、生きて本國へ還る者果して幾人ぞ、身尙恙が無し、寧ろ飲まざるべけんや。

【評論】此の篇、征夫の心情を表現して、唯是れ血、字あるを見ず、血も涙も無き黃金貯蓄三味の鼠輩は斷じて此の詩を讀むべからず、悲痛を言はずして、悲痛の極、文字の外に在り。鍾惺曰く、悲慨醉臥の二字に在り。譚元春曰く、又壯又悲。黃家鼎曰く、至理慘情、偏に醉裏より看出すと。王元美曰く、可憐無定河邊骨、猶是深閨夢裏人、用意工妙此に至り絶唱と謂ふ可し、惜むらくは前二句の爲めに累せられ、筋骨畢露す、人をして厭憎せしむ、葡萄美酒の一絶、便ち是れ無瑕の璧、盛唐の地位凡ならざること乃ち爾り。

清平調詞

李白

雲想衣裳花想容。春風拂檻露華濃。若非羣玉山頭見。會向瑤臺月下逢。雲に衣裳を想ひ花に容を想ふ、春風檻を拂つて露華濃やかなり、若羣玉山頭

に見るに非んば、會ま瑤臺月下に向つて逢はん、

【句釋】清平調詞、房中の樂に、清調と平調とあり、周時代の遺聲、瑟調を加へて之を三調と言ふ。天寶中、白、翰林に供奉たり、禁中初め本芍藥を重んず、沈香亭に植う、花開くや玄宗、照夜車に乘じ、楊太眞歩輦を以て從ふ、梨園中の弟子を選び、弟子は樂女、樂十六色を得、李龜年手づから檀板を捧げ、衆樂を押へて前む、玄宗曰く、名花を賞し、妃子に對す、焉んぞ舊詞を用ひんや、龜年に命じて金花牋を持して宣賜す、李白立ちどころに清平調三章を進む、龜年之を歌ふ、太眞、坡黎の七寶盃を持ち、西涼の葡萄酒を酌み、笑つて歌意を領す、玄宗玉笛を調し以て曲に倚る、每曲徧して將に換へんとす、則ち其の聲を遲して以て之に媚ぶ、是より李翰林り白なを顧みること諸學士に異なる、會ま高力士、終に靴靴を脱することを恥づ、太眞重ねて前詞を吟ず、力士曰く、飛燕を以て妃子を指す、賤しむ甚し、太眞頗る然りとす、玄宗嘗て三たび白に官を命せんとす、卒に宮中の揮がるる所と爲りて止む。雲想衣裳花想容、玄宗が貴妃を寵愛すること厚く、五色の朶雲を見ては其の衣裳かと思ひ、牡丹の花を見ては貴妃が艶美なることを想ふ、癡愛の極度、人間は此に至る、要するに仙女かと思ふなり。春風拂檻、沈香亭地の欄檻、即ち花壇の「手スリ」を云ふ、亭上の欄干にはあらず。露華濃、牡丹の花上に浮ぶ露が非常に濃かに見ゆ。若非羣玉山頭見、「穆天子傳」に、穆天子、西の方崑崙山に登り、王母を見て曰く、癸巳羣玉の上に至ると、西王母に貴妃を比したる

なり。會は「カナラズ」でも「タマタマ」と訓んでも支障なし。向瑤臺月下逢、「楚辭」に、瑤臺の優塞を望み、有娥の佚女を見ると、若し西王母でなければ、瑤臺の佚女であるならんと、白が貴妃を賞めて言ふは、玄宗が言はんと欲する所を言ふ、月夜には白日以上の美を知る事が出来るなり、字としては山頭と月下と對する邊もあり。

【評論】此の篇、貴妃の美を嘆稱して、神彩奕奕たり、太白以下に斷じて見る能はざる詩とす、「訓解」に、明星、貴妃薨後に美人を得ん事を思ふ、故に雲を見て其の衣かと思ひ、花を見て其の貌を想ふなりと、誤謬も甚だし、此の詩は貴妃の死後にあらざることを分明なり、後生此の誤注に誤まらるること勿れ。

其二

一枝濃艶露凝香。雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得似。可憐飛燕倚新粧。
一枝の濃艶露香を凝す、雲雨巫山枉げて斷腸、借問す漢宮誰か似たるを得ん、可憐の飛燕新粧に倚る、

【句釋】一枝、花の一枝は、人の一身即ち貴妃に比す、玄宗は此の一枝より外、愛は無きなり。濃艶、貴妃の美貌を云ふ、貴妃は肥滿して牡丹の如くなりしなり、嬋娟妖嬈を濃艶と言ふ。露凝香、色も

香も勝れるを云ふ、凝は結なり、香の凝りて散せざるなり。雲雨巫山の解は前已に辨せり。枉は、「ムダ」徒らなり。斷腸は悲傷の極度を言ふ、楚の襄王は巫山の神女を待ち焦がれて、終に逢はざりしを以て、頻りに痛む、斷腸せざるを得ず、玄宗は枉にあらず、竟に襄王は悲しみ、玄宗は樂しむ事を言ふ。借問漢宮、漢宮の掖庭即ち美人の多きは漢に過ぐる者なし、然らば、其の漢宮の誰を以て貴妃に比すべきや。得似、美を同じうする者は誰ぞ。可憐は、「アハレムベシ」にはあらず、「カレン」なり、俗語の「カハイラシイ」の訓に當る。飛燕は、趙飛燕、長安の人、陽阿公主の家に入り、歌舞を學ぶ、漢の成帝微行して公主の家に過ぐ、樂を作り之を悦ばしむ、召し入れて大に幸す、後立てて后と爲す。倚粧は倚は頼なり、藉なり、自らの美を「タノミ」にする、新粧は天稟の美の上に更に粧を施す、益す美ならざる得ず、貴妃に比する者飛燕一人のみ、李夫人や衛子夫は竟に及ばず。

【評論】此の篇、花と人と、特に區別して作りしものにあらず、人即ち花、花即ち人なり、拘泥する者は、此の詩の妙は知り難し。梅禹金曰く、巫山の妖夢、昭陽の禍水、微文隱諷、風人の旨と。國を亡ぼし政を害せし女を以て譬ふ、白の諷諫、高力士にあらずと雖も皆知り易し。

其三

名花傾國兩相歡。常得君王帶笑看。解釋春風無限恨。沈香亭北倚欄干。

名花傾國兩つながら相歡し、常に君王の笑を帯びて看ることを得、春風限り無き恨を解釋して、沈香亭北欄干に倚る、

【句釋】名花は牡丹、木芍藥、天香國色等の多名あり。傾國は貴妃、漢の武帝の時李延年に妹あり、李、帝に侍し、歌つて曰く、北方に佳人あり、絶世にして獨立、一たび顧みれば人の城を傾け、再び顧みれば人の國を傾くと、妹は李夫人是れなり、傾は「クツガヘス」歌は美を言ふなるが、他よりは亡し覆すこととなる。兩相歡、無語の花と、解語の花の兩を見て玄宗が歡樂する。常得、時として得ざるは無し。君王、玄宗。帶笑看、貴妃を見るの時、必ず笑を含む。解釋、解散と消釋。春風無限恨、花は散じ易く、人は老い易し、春は恨むべきもの、其の無限の恨を君王が恩寵の厚きを蒙り、妃子は解散消釋す、正面の注脚此の如し、裏面は之と反對に、春風に限り無きの恨あるなり、寵を得て居る時に、寵の長く失せざらんことを思へば、無限の恨を生ずべきものなり。沈香亭は沈香を以て爲る、柏梁臺の柏を以て爲るに比す。北、牡丹は南に在り、牡丹に背いて貴妃がある、花に背き、情を含み、貴妃が殊更に表情する態。倚欄干、此の欄干に倚るが貴妃が玄宗に媚を獻する爲めの姿態、讀者自由に解釋すべし、巧に解釋する者あらば、太白の知己なり。

【評論】此の篇、歡と笑と恨と倚の四字、一字千金なり、歡ぶが故に笑ひ、恨むが故に倚る、而かも自然に語を成して、不自然の所無し、典公は欄干に倚るは媚を求むるにあらすと注するが、典公は方外の人、此の詩の意味は到底解釋する所にあらず、「唐宋詩醇」に、此の三篇採らず、採らざる所以のもの明明たり。

客中行

蘭陵美酒鬱金香。玉椀盛來琥珀光。但使主人能醉客。不知何處是他鄉。

蘭陵の美酒鬱金香、玉椀盛り來る琥珀の光、但主人をして能く客を醉はしめば、知らず何れの處か是れ他郷、

【句釋】客中行、旅行中の作を言ふ、行は詩と見ても作と見ても可。蘭陵は今の山東省兗州府嶧縣なり、古の楚地、東漢は徐州東海郡なり。美酒鬱金香、香草あり、鬱金と名く、之を煮て酒を醸造す、酒甚だ香烈と。玉椀、椀は盃の俗字、小盃なり。盛來、酒を盛と云ふ、器物に滿つる如きを、固形體でも、流動體でも皆盛と云ふ。琥珀光、琥珀は松脂が滲んで地中に入る千年化して茯苓と爲り、二千年化して琥珀と爲る、此の琥珀の光と酒の光と其の色を同じうす。但使、外の事は如何でも可。主人、羈亭の主人なり。能醉客、酒を客ますして能く與へて呉れる主人ならば。不知何處是他郷、

郷、旅行中と雖も、猶故郷に在るの想あるなり、酒に因つて旅情を忘る、醉へば自分が客なることを忘るなり。

【評論】此の篇、酒の爲め、強ひて客中の愁を忘るゝを云ふ、實は旅愁を説くにある。譚元春曰く、全く寒酸の氣無し。蔣一葵曰く、乃ち其の本相故に佳。

峨眉山月歌

峨眉山月半輪秋。影入平羌江水流。夜發清溪向三峽。思君不見下渝州。君を思へども見えず渝州に下る、

【句釋】峨眉山は今の四川省嘉定府峨眉縣にある、唐代は劍南道嘉州なり、成都を去る南千里、秋日望見すれば、兩山相對して峨眉の如しと「水經注」にある。歌は直ちに見聞の景を歌ふなり。山月半輪秋、半輪に就いて種種の注釋があるが、弦月リヅギが實寫なり、天上の眞月は一輪であるが、峨眉は雙方に掛けなければならぬもの、故に半と言ふて、一と言はず、味此に在り。影入平羌江水流、平羌江は峨眉山下を繞りて叙州に入り、大江と合す、羌夷人が寇せる時、諸葛武侯が此の地に於て平定せしより此の名起る。夜發、月あり、夜字は缺くを得ず、且下の不見の字を喚び出す。清

●溪は縣名、唐時之を置く、今は成都府に屬す。向三峽、明月峽と温湯峽と石洞峽なり、重慶府に屬す、夔州は誤る、峽は山際を云ふ、山と山との間を云ふ、甲斐を峽と日本で言ふが如し。思君、月を指して云ふ、竹を王右軍が此君と稱したる類なり。不見、平羌江に影が落ちし時は見えたるも、此の清溪では見えざるなり、月が山の陰となる。下渝州、渝州ニ下る、渝州ヲにあらす、典公は「ヲ」とす、「ヲ」なれば、本の清溪へ還る事となる、太白狂醉は、凡人の狂醉と異なる、此の如き狂態は爲さざるなり、唐代の渝州は今日の重慶府是れなり。

【評論】 此の篇、久しく人口に膾炙する詩とす、地名を五箇入れたと云ふので、古今驚嘆して居る。葉弘助曰く、夜清溪を發するは始なり、三峽に向ふは終なり、平羌江、峨眉山渝州の中間、太白の奇、唯五の地名を用ふるのみならず、又顛倒錯亂して、人をして測らざらしむ、太白笑つて曰はん、汝こそ顛倒錯亂なり、吾は然らず、舟にて下る道程は清溪より大渡河に依り、此より大江へ移る、彼の峨眉山下を通行する、然れども平羌江の中心へは出でず、平羌の中心へ出づれば、成都へは行ける、重慶府には行く能はず、平羌、大渡河、大江、此の三水脈が連なりてあるを以て峨眉の月、平羌に入ると云うて臺も支障なし、月の影は平羌に入ると云ふ句にして、自分の身が平羌を下りつとあると云ふ句にはあらず。明の王元美曰く此は是れ太白の佳境、二十八字中、峨眉山、平羌江、清溪、三峽、渝州あり、後人をして之を爲らしむれば、痕跡に勝へず、益す此の老鑑鍾の妙を見る。

上皇西巡南京歌

誰道君王行路難。六龍西幸萬人歡。地轉錦江成渭水。天廻玉壘作長安。誰か道ふ君王行路難と、六龍西幸して萬人歡ぶ、地は錦江を轉じて渭水と成し、天は玉壘を廻らして長安と作す、

劉會孟曰く情を含んで凄楚、竹杖縹渺の音あり。

【句釋】 上皇は玄宗。西巡南京は蜀郡なり、蜀は長安より西南方に當る、天寶十五年日本孝謙天皇六月、胡人安祿山、范陽に據りて謀反し、十五萬の兵を以て南下、洛陽を陷し、自ら大燕皇帝と稱す、顏真卿、張巡、許遠等の英雄、之に當れりと雖も、賊熱猖獗にして、遂に長安も陷落す、是に於て玄宗、蜀に蒙塵し、七月、其の子肅宗、即位して長安洛陽共に回復し、祿山は其の子慶緒に殺されたり、肅宗は父の玄宗を尊んで上皇と曰ふ、十二月、蜀より還り、蜀郡を南京と稱したるなり、出奔又は蒙塵と曰はずして西巡と曰ふ、臣子の分として然るべきものなり。誰道は「別裁」に莫道に作る、誰道の本が多し、道ふ者が有る。君王、玄宗を云ふ。行路難、三字本笛の曲名、玄宗が蜀へ行くは不可なりと道うた者がある、其の證據には出でた時は萬を以て算したる兵が、蜀に至り千三百人に減す、楊貴妃も伴うて行きしが、將卒の乞を容れて馬嵬驛にて縊死せしめたり、貴妃が死ん

だゆるに將卒が始めて安心したとの事なり、行路難は行路易と化した。六龍、古の禮として天子は五輅六馬に駕す、馬の八尺なるを龍と曰ふ。西幸は蜀に至るを云ふ。萬人歡、蜀の人民は天子の至るを聞いて箚食壺漿して迎へる。地轉、天子の幸に依つて土地の位置が轉換したるなり。錦江は成都府華陽の南を流る、江。成渭水、此の渭水は長安を流る水、錦江が渭水と變成したるは、要するに天子が行幸したるを以てなり。天廻、天は山の意味、廻は「スエナホス」山は高く聳ゆれば天なり。玉壘、山は蜀成都の北方に在る山。作長安、玉壘山も長安の山と變化したるなり。

【評論】此の篇、玄宗を憐んで、其の非を説きし箇處なし、清平調の諷諫と全く異なる、太白の太白たる所以見るべし。「詩醇」の評に、渭水長安、暗に故都の感を寓す、且以て其の早還を幸とす、成都の華麗を誇るにあらず。甚だ當る。譚元春曰く、當時明皇蜀に奔る、劍門道上に崎嶇たり、鳥啼花落を見、悲慘に非ざるは無し、殊に光景を成さず、此の二章之が爲め回護し、大に行色を壯にす。是れ亦當る。本集に三首あり、今二章を選ぶ。

其二

劍閣重關蜀北門。上皇歸馬若雲屯。少帝長安開紫極。雙懸日月照乾坤。
劍閣の重關蜀の北門、上皇の歸馬雲の若く屯す、少帝長安に紫極を開き、日

月を雙へ懸けて乾坤を照す、

【句釋】劍閣は蜀の保寧府劍州縣の北二十五里に劍門山あり、其の山の飛閣通衢之を劍閣と云ふ、孔明が造りしもの、蜀の咽喉とす。重關は關門が幾重にも嚴重なるを言ふ。蜀北門、劍閣は蜀の北門であると云ふなり。上皇歸馬、玄宗と、從士等とを合して云ふ、長安へ歸る狀なり。若雲屯、雲は人馬の多きを形容す。屯は聚「アツマル」の意、駐屯守成が第一義なれど、聚の意に成るときもあり。少帝は肅宗。長安開、開は即位の事、批難せる者もあるが、此の即位は止むを得ざるに出づ。紫極は天上の宮名、以て人間の天子の宮に比す、紫極を開くは、九五の位に就きしと云ふ事なり。雙懸日月、日は正位の肅宗、月は閏位の玄宗、肅宗は玄宗が出奔後、年號も至徳と改む、其の翌年、玄宗が長安へ歸りしを以て之を南宮に養ふ、後西宮に移す、肅宗は明君にはあらざるも、煬帝よりは孝徳を具へて居りしなり。照乾坤、王堯衢は日は男、月は女、乾は陽、坤は陰と區別して居る、小兒の見、笑ふべし、二人の天子が國土を治むと云ふに過ぎず。

【評論】此の篇、全く白が新創にて前古人無きものなり、「詩醇」の評に、當時の事を述ぶ、何等の明白ぞ、詩史と謂つ可し、肅宗位を避け以て上皇の復辟を請ふべしと謂ふ者あり、張良娣に惑ひ上皇を南内に徙すと謂ふ者あり、皆傳會の説と。沈歸愚曰く、二句上皇、三句少帝、而して末句を以て總收す、格法又別と。

聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄

楊花落盡子規啼、聞道龍標過五溪。我寄愁心與明月、隨風直到夜郎西。
楊花落盡子規啼、聞道龍標過五溪。我寄愁心與明月、隨風直到夜郎西。

【句釋】王昌齡は太白の友人なり、初め江寧丞と爲る、細行を修めず、是に於て龍標の尉に左遷せらる、龍標は今日の湖南省沅州府黔陽縣治なり、左遷の意味祿を減するにある、今は遠謫と見れば可。有此寄は、我より彼に贈るを言ふ。楊花は柳絮なり。落盡、三月晩春の景。子規啼、黃鳥啼を息め、子規始めて啼く、已に初夏なりんとする節、此の鳥は啼血、哀愁を含むなり。聞道は「キクナラク」道の字は助辭なり。龍標は官名、尊稱して其の人の代名詞と爲す。過五溪、五溪は現今湖南の辰州府に屬す、「後漢書」の馬援傳に、劉尙、武陵五溪を撃ち深入す、援因て復行を請ふと、雄溪、櫛溪、酉溪、撫溪、辰溪を合して五溪と云ふ、龍標に至る通道と爲る。我寄愁心、太白が愁心を寄するなり、太白も此の時、永王璘の事に坐して夜郎に流されて居る、然るに昌齡も亦龍標に左遷されたりと聞く、我と彼と共に愁心と成る。與明月、愁心は深く且大なるも何物に依つて之を龍標に知らしめんや、但明月より外に寄與する者はあらず、是に於て月に寄す、君も亦愁心を我に寄

するや如何。隨風、明月が主と爲つて風は客なり、其の客たる風が情を運ぶ仲介者なり、俗語の「風の便り」などの意にて知るべし。直到、龍標と夜郎は相距る一千里、其の間、山川路險、相見難し、唯明月と清風とは自由自在、遠近を擇ぶ所あらず、直ちに即ち一直線に到るを得。夜郎西、詩人が東西南北の字を用ふるに、古よりの確のもの、的確ならざるものがある、單に韻を押す爲め東とすべきを西と押し、西と押すべきを東と押し、決して定義なし、詩は地理志の如くならざればなり、今の句は的確に西なり、何ぞや龍標は夜郎の東に當る、其の東に遷る君は、我より愁心を明月に寄せしからは、君は風に隨つて直ちに我が在留する夜郎の西に到れとなり、「到ル」と注する本多きも、「到レ」の命令詞ならざれば通せず、太白が龍標に到るにはあらざるなり。

【評論】此の篇、一句は時節を叙し、二句は時節に就いて龍標が事を叙し、三句は我、四句は龍標を叙す、事を賦して以て情を叙するが主意なり。胡元瑞曰く、眞に八極を揮斥し九霄を陵厲するの意あり。梅禹金曰く、曹植が將心寄明月の句、白其の意を裁し、奇語を撰出す。今謂く、白は古今の大詩聖たり、詩聖たる白を以て猶古を學ぶもの、古を學んで而かも清新、古今の大詩聖たる所以此に在り、後生、動もすれば、屢氣樓を畫きて以て清新と稱するあり、一笑を發すべし。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

故人西辭黃鶴樓。煙花三月下揚州。孤帆邊影碧空盡。唯見長江天際流。
故人西黃鶴樓を辭し、煙花三月揚州に下る、孤帆の遠影碧空に盡き、唯見る
長江の天際に流るゝを、

【句釋】 黃鶴樓は前卷已に辨せり。孟浩然は白の友人、傳已に出せり。廣陵は歷代屢ば變遷あるが、
現今の江蘇省揚州府江都縣是なり、天寶の初年は淮南道に屬す。故人は孟浩然を云ふ。西辭、廣陵
より武昌を見れば即ち西方、襄陽も同處なり、辭去の辭と、文辭の辭とは別字とす。煙花は、春に
限り用ふる成語、「春日ノ景」と云ふ意味。三月、正に是れ晚春。下揚州、下は都より漸漸離れ去る
を云ふ、揚州は禹貢に出づ、春秋の時、吳越、漢の代に吳、景帝江都と改め、武帝廣陵と更たむ、
隋唐共に揚州と稱す、煙花風流の地として佳人才子の艶説する處。孤帆、武昌より揚州へ下るには
揚子江を舟にてするが第一の捷路とす。遠影、白が黃鶴樓上より目送して其の孤帆の影の滅するま
で遠望する。碧空盡、碧天の盡くるに至り、帆影も亦盡く、盡は空の見え難きも意味し、帆影の盡
くる意味も亦含む。唯見、帆影の盡きる後、見る所のものは何ぞ。長江の浩浩として、天際流で天
と水と相接する如く見ゆる状を云ふ、長江は即ち揚子江なり。

【評論】 此の篇、三四は送時に於て別後の状を云ふものに似たり、「詩醇」の評に、語近く情遙か、

洞庭西望楚江分。水盡南天不見雲。日落長沙秋色遠。不知何處弔湘君。
洞庭西に望めば楚江分る、水盡きて南天雲を見ず、日落ちて長沙秋色遠し、
知らず何れの處に湘君を弔せん、

陪族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至游洞庭湖

手五弦を揮ひ、目飛鴻を送るの妙あり。唐汝詢曰く、目力已に極む、離思涯無し、悵望の情、俱に
言外に在り。吳吳山曰く極めて深く、極めて淡く極めて濃か、真に仙筆なり、太白の浩
然に於ける實に骨肉も及ばざる所、本集浩然に寄するもの頗る多し、深契する所のあるべし、
浩然是謹嚴、太日は颯逸、性格大に異なる、其の異なる所、太白の推服する所以か。

【句釋】 陪は和語の供の意味で見よ。族叔は「イトコヲチ」太白的父方の叔なり、白は曄の外に中
孚と名け、高座寺の僧と爲つて居りし者も在る。刑部侍郎は官名、天下の刑法に關する政治で管掌
する役なり、我が司法省の如きもの、侍郎は侍官、尙書は大臣とす。曄は名。中書舍人は日本の内
閣書記官の類なり。賈至は今岳州司馬の官に遷され、此處に來つて寓す、乃ち三人で、洞庭湖に舟
遊せしなり、洞庭湖の事は前に辨じてある。西望、洞庭より以西は古の楚地、舟中より西望する。
楚江は大江又岷江と云ふ、西より來りて岳陽樓前に至り、洞庭の水と合して東流す。分、實は水江

悉く分る、特に楚江を出すは結句の湘君を對照させん爲なり。水盡、水盡くるにあらざるも、目力盡くれば水も亦盡くるなり。南天は楚江の西と對照す。不見雲、雲影全く無し、碧空盡と意味大略同じ、天の晴澄なるを云ふ。日落、正に是れ落日、聊か蕭條たらんとする景色。長沙は郡名、洞庭より東三百里に在る。秋色遠、三百里も隔つ長沙の方も秋色一面なり、第一は西望、第二は南望、第三は東望なり。不知、秋色一様にして、甲地乙地の別なければ知らざるなり。何處、知らざるが故に何の處と云ふ、知らば此處と斷定する。弔湘君、堯帝に娥皇と女英の二女あり、以て舜に妻はす、然るに舜は南巡して蒼梧即ち今日の廣西省梧州府蒼梧縣治に崩じたり、二妃之を追うて及ばず、沅湘の間に溺死す、後之を祠りて黃陵廟と稱し、湘水を守る神とし世に湘君と云ふ、現に湖南の岳州府黃陵山上に黃陵廟ある、瀟湘の尾、洞庭の口、唐の韓愈廟の碑文あり。

【評論】此の篇、全く洞庭の游を叙し、他意なし、曄の詩は見ず、賈至は楓岸紛紛落葉多し、洞庭秋水晚來波つ、興に乗じて輕舟近遠無し、白雲明月湘娥を弔すと、詩は同字を忌む、法にあらざればなり、不見と不知の字二字となる、而かも名詩たるを害せず。鍾伯敬曰く、此の句秋色遠を形容するのみ、俗人知らず誤看して湘君を弔することと作す、俗人にあらざるも湘君を弔する意あるを知る、弔するにあらざして弔す、詩の意義此に存ず、單に秋色を言ふのみでは意義を有せず。詩醉の評に、即日傷懷、情を含む限り無し、二十八字、九辯の哀を減せず、解者之を形迹の間に

求む、何を以て其の神韻を會せんやと。甚だ當る。本集に四首あり、此れ其の一、然るに此の本も「別裁」も「唐賢三昧集」も「唐人絶句」の四本共に此の首を録す、人口に膾炙する所以なり。帝子瀟湘去つて還らず、空しく秋草を餘す洞庭の間、洞庭湖の西秋月輝く、瀟湘江の北早鴻飛ぶ」の句、亦以て誦すべし。

望天門山

天門中斷楚江開。碧水東流至北廻。兩岸青山相對出。孤帆一片日邊來。

天門中斷楚江開、碧水東流北に至りて廻る、兩岸の青山相對して出づ、孤帆一片日邊より來る、

【句釋】天門山は處處にある、山西省朔平府にもある、湖北省安陸府にもある、安徽省太平府にもある、今の天門山は安徽省太平府黨塗縣の西南に在る、二山大江を夾む、東を博望と曰ひ、西を梁山と曰ふ、對峙して門の如し、俗に東梁山、西梁山と稱す、二山相峙つ中間より天を望む、故に天門山の名あり。中斷、東梁と西梁と相對して、而して中間に大江を有す、故に中斷と云ふ。楚江は沅江の下流なり。開は開き流るゝなり。碧水東流、江水が流るゝ本系は東なればなり。至北廻、東流の水が此の處に至り宛轉曲折、遂に北方に向つて廻り流るを云ふ、北は此の誤なりと、毛西河は辨

じて曰く、梁山と博望と夾峙に因つて江水此に至りて廻旋するなり、既に東、又北、既に北、又廻、已に句調に乖く、兼ねて義理を失す、西河は學人にて詩人にあらず、太白の詩に向つて此の凡解を下す、大笑せざるを得ず、此に至りて廻旋する位の事何人か知らざらん、北の字にて不服の意あらば、此と訓讀して亦可なり、凡と警との別を知らば、他は論ずるの要なし。兩岸青山は東岸の博望山と西岸の梁山なり。相對出、對は對峙、出は二山對峙して其の間廣からざるを見はすなり。孤帆一片、一箇の小舟なり、片は箇と大底意義同じ。日邊來、太陽の邊より來る意義が根本なるが、人間としての太陽は即ち天子である所より、帝都の意味を日邊と云ふ、「晉書」に、晉の明帝八歳の時、長安と日邊との遠近を論じたる話あり、其より以來、詩人は長安を日邊の代名詞と爲し用ふるなり、此の結句の意、單に長安の意にはあらず、兼ねて日邊へも通じて居る、而して必ずしも夕景と拘泥するにも及ばざるが、日邊の字を活躍させるには夕景と見る方が可なり。

【評論】此の篇、太白絶句中の名篇として人口に膾炙する所のもの。「詩醇」の評に、對結別に是れ一體、詞調高華、言盡きて意盡きず、半律を以て之を議するを得ず。胡元瑞曰く、自然を極む、洵に神品に屬す、以て一代に擅場するに足る。就いて辨ず、此の本の選者李于鱗は海門中斷出三吳關と、我邦の服部南郭は海門中斷大潮來と、又、海門中斷九州間と中斷の意義何れの處に在る、梁の寶月和尙の句に、浮雲中斷開明月、白が臨摹は寶月に在り、白も寶月も共に開の字ありて以て此の妙趣を成す、天門の中斷を運轉するの妙は此の開字にあり、出と間と來との三字何等の意を以て中斷に對せんとするや、鷺を學ぶの鳥、到底溺没の殃を免る能はざるなり。

早發白帝城

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。

朝辭白帝彩雲の間、千里の江陵一日に還る、兩岸の猿聲啼いて住まらず、輕舟已に過ぐ萬重の山、

【句釋】早發は早天に出途する。白帝城は夔州の城東に在る、西、大江に臨み、東高きこと二百丈、西北、高きこと一千丈、城は山上に在る、漢の公孫述が築く所、蜀の劉備が呉の陸遜に苦しめられしも此の城、諸葛武侯が遺詔を受けたも此の城とす、今太白は此を去つて江陵へ赴くなり。朝辭は早曉と共に別る、後漢末に漢室の衰ふるや、諸國に豪傑競ひ起り、我も帝王なり、彼も帝王なりと稱したり、中に公孫述は蜀に據つて、白帝と稱す。乃ち城に名づくる所以。彩雲間、白と彩と對應する文字。千里江陵、蜀と江陵との間は清里九百四十五里と稱す、蜀は夔州にて江陵は湖北省の荊州府、秦の盛弘之の「荊州記」に「朝ニ白帝ヲ發シ暮ニ江陵ニ到ル、其ノ間千二百里、飛雲迅鳥ト雖モ過グル能ハズ」と、蜀地は高く江陵の低きに向ふ故なり。一日還、一は千の字と對應す、迅速

に還る意味を云ふ、十二時間の一日と正直に解釋する者は詩を讀む資格無きものなり、之と反對に江陵より舟路夔州に向ふには、早くて一ヶ月遅くて二ヶ月は費すが事實とす。兩岸は巫山と峽山との兩岸なり、「荊州記」に、峽長七百里、兩岸の連山、略絶處無し、重巖疊嶂、天を隠し日を蔽ふ、常に高猿長嘯するあり、清遠を屬引すと。猿聲、此の句語は借客見主法と云ふ、聲が屬引くは清遠たればなり。啼不住、舟が暫時も住まらざるなりと注する人ある、大に當る、舟行早きに依つて一聲未だ絶えざる頃に。輕舟已過、猿聲が住まらざる間に已に過ぎる。萬重山、舟行迅速にして飛箭の如きを云ふ。

【評論】此の篇、徹頭徹尾、舟行の迅速なるを叙す、千一兩萬等の數字を句句に用ゐて、何等の不自然を覺えず。「詩醇」の評に、順風に帆を揚ぐ、瞬息千里、但眼前の景色を道ひ得て、便ち疑ふ筆墨の間亦神助あるかと。三四色を設け托起し、中流に自在なるを覺ゆ。胡元瑞は曰く此の篇太白絶句中の絶出なる者。沈歸愚曰く、猿聲一句を入れて、文勢直に傷らず、畫家色を設け、毎に此の處に于て意を用ふ、後生以て法と爲すべし。

秋下荆門

霜落荆門江樹空。布帆無恙挂秋風。此行不爲鱸魚膾。自愛名山入剡中。

霜落ちて荆門江樹空し、布帆恙無く秋風に挂かる、此の行鱸魚の膾の爲ならず、自ら名山を愛して剡中に入る、

【句釋】秋下荆門、秋日に荆門を下る、下るは荆門より漢江を経て楊子江へ下るなり、荆門州は湖北省の安陸府、荆門山は湖北省の荊州府、安陸と荊州は六十清里を隔つ、今荆門州を下るなり。霜落、正に是れ秋九月。荆門は江陵縣、即ち荊州府に屬す。江樹空、霜の落つるが爲め江畔の樹葉も亦空と爲る。江の字、一本楓に作る、江を以て可とす。布帆無恙、順風なるが故に布帆無事に通過する。晋の顧愷之は既仲堪が參謀と爲りて荆門に在る、還る時、堪、布帆を以て之に借す、破家に至りて風に遭ふ、仲堪に與ふる書に、行人安穩、布帆無恙と、自此の語を用ひしなり。挂秋風、挂は掛の正字なり、亦挂は布帆にかかる、秋風は詩の全體にかゝる。此行は「左傳」の「虞臘せず此行ニ在リ」の語に依る。不爲鱸魚膾、晋の張翰秋風の起るを見るに依つて、乃ち自身の故郷吳中の葦蕒鱸魚の膾を思ひ、官を辭して還る、鱸は和名「スズキ」漢土では吳中、日本では雲州松江が名産地とす、巨口細鱗、四鰓あり、川鱸は脂肪多し、海鱸は脂肪少なし、膾は膾と同字、細かに肉を切る事を云ふ、太白は此の魚を食ふ爲めならずと辨ず、上句を承けて一筆を展開したるなり。自愛、彼張翰は口腹の欲望なるが、我は眼を娛ましむる爲めなり。名山、雁蕩山、丹霞山等の名山多し。入剡中、剡は唐以前は縣揚州會稽郡で唐代は縣江南道越州、今日は湖北省紹興府嵊縣治とす、「博物

志」に「剡中名山多シ以テ災ヲ避ク可シ」とあり。

【評論】此の篇、詩法として見る可し。第三句の此行不の孤平を除き、他の三句は全く孤平無し、邦人の詩、如何なる句にも之れ有らざるは無し、盛唐を口にする徂徠派の徒、猶此の眞諦を悟らず、況や享保以下の詩人をや、「詩醇」の評、輕秀古を運し化に入る、絶妙好辭と。沈德潛曰く、明明に天下將に亂れんとするを説き、身の歸隱を説く、却て又推開解説、此れ古人身分及ぶべからざる處と。

蘇臺覽古

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不勝春。只今唯有西江月。曾照吳王宮裏人。

舊苑荒臺楊柳新なり、菱歌清唱春に勝へず、只今唯西江の月のみ有りて、曾て照す吳王宮裏の人、

【句釋】蘇臺は春秋十四強國の一なりし吳王夫差が建てしもの、今の江蘇省蘇州府が所在地なり、夫差は之を建て、桂苑姑蘇臺と名け、天池を掘り、日に西施を水遊と爲し、遂に越王勾踐に滅ぼさる。覽古は何の意味ぞ、吳吳山曰く、荒臺新柳見る可きものあり、故に覽と曰ふ、戰士宮女皆見る可らず故に古と曰ふ。古人字を下す苟くもせざる處と。吳吳山は動もすれば臆斷を下す、但し此の説は

可なり。舊苑、昔日の桂苑、遺跡と爲りては舊苑なり。荒臺、姑蘇臺の遺跡も今日と爲りては荒臺なり。楊柳新、苑と臺との二物は決して古の面目にあらず、獨楊柳のみ舊に仍つて青青として新なり。菱歌は採菱の歌、支那は古代より此の水遊を爲し、男女舟に乗り、菱を採る、榜人船長が採菱の歌を奏す。清唱は歌聲の清亮なるを云ふ、昔時は吳王も此の水遊を爲したらん、今日は少年子女嬉遊を恣まゝにする。不勝春、菱歌の清唱を聞く、春風覽古の情に勝へざるなり、勝は俗語の「コラヘキレナイ」と云ふ氣味、「韓非子」に「木枝大ニシテ本小ナレバ、將に春風ニ勝ヘザラントス」と。只今は即今と同義。唯有は餘物を交へざるの意、見る所のものは新柳、聞く所のものは菱歌、然りと雖も悉く昔時の遺物にはあらず、獨故物として見る可きものは、西江月、是れ當年の故物なり、西江は西江邊を照すの月を謂ふ、又勾踐と戦ふ處を西江と云ふ。曾照、曾は過去に屬する字、昔照したるなり。吳王宮裏人、是れ何人を指すやと云ふに西施を指すなり、粉黛の美なるも一時の假、苑の佳麗、臺の壯雄、遂に千年の物にあらず、眼を轉すれば一夢空華、詩人の感慨別に無量なるもの有り。

【評論】此の篇、巧妙の伎倆を自然の中に包むこと、他多く見ざるの作とす、舊苑荒臺の蕭索たるものに對し、菱歌清唱の艶麗を以てし、楊柳新に對し、不勝春の文字を以てし、第三句一轉して只今唯有と非常に痛恨する意味を淡然冷然たる語に表はし、之に西江の月を借り來り、天象の窮り無

きを嘆ずるに吳王宮裏の人を以て之を表はす、片言隻語、口を衝いて出づる如くにして、其の實辛
苦經營の跡彰彰たり。只今唯有の四字の法門は此に初めて開く所、後世無數の詩人、皆稽首して
之を受く、真に廣大教化主と謂つ可し。譚元春曰く弔古多く此の意を用ふ、語、天花空處より幻出
するが如し。

越中懷古

越王勾踐破吳歸。義士還家盡錦衣。宮女如花滿春殿。只今唯有鷓鴣飛。
越王勾踐吳を破つて歸る、義士家に還りて盡錦衣、宮女花の如く春殿に滿つ、
只今唯鷓鴣の飛ぶ有り、

【句釋】 越中は即ち越王の國、會稽是れなり、今日の浙江省紹興府とす、吳と鄰を爲し、而して互
に争ふ、吳王闔廬、越を伐しも破られて死し、其の子夫差、嗣いで立ち、復讐の念息まず、屢ば門
ひ遂に越王勾踐を破り、之を捕虜と爲す、吳に伍子胥と云ふ英雄あり、之を殺さんことを王に勸む、
勾踐賂を吳の宰相伯嚭に貽りて赦さるることを得、國に歸り、夏に兵を起して遂に吳を亡ぼすに至
る、而して越も顯王の三十五年楚の爲めに亡ぼさる、此の事が詩聖の筆に上りしもの即ち此の篇と
す。懷古は覽古と略同じ。越王勾踐、吳の臣子胥、勾踐を評して曰く、越王人と爲り辛苦に能ふ、

此の辛苦に能へたるを以て遂に會稽の恥を雪ぐを得たり、但し漢人の辛苦に能ふと云ふは他日劣等
の娛樂を享受せんが爲めのみ、何等道の爲めの辛苦にはあらず、論より證據、勾踐も亦暫時にして
亡ぼさる、然りと雖も、一樽の酒、自ら飲めば餘る、兵士に與ふるには不足、是に於て之を水の上
流に傾け、其の下流を多數の兵士に飲ましむ、酒味薄きは言ふに足らざるも、兵士は大に感激して
之が爲め身命を捧げて報いんと欲したる事は、以て越王の智を知る可し。破吳歸、吳は太伯より夫
差に至る二十五世、遂に此に至りて滅亡す。義士は一本戰士に作る、吳吳山曰く、傳寫の誤なり、
越人安んぞ義士と稱するを得ん、小兒の見到類す、伯夷、叔齊、荆軻、季札の義士たるは論勿きも
此の詩の義士は主の爲めに力を竭す、即ち軍師范蠡初め太夫種等を指す、一國の義士、天下の義士
にはあらず。還家は凱旋の事、歸と還と別句に用ふ、而かも厭ふべきなし。盡錦衣、盡の意は一人
も餘まさざるの謂、上は軍師より下は雜卒に至る、勳八や功七級の類。宮女如花、彼の人と爲り明
君にもあらず、聖主にもあらず、我欲を満足すれば足る底の木葉人間なり、辛苦に能ふと子胥は述
べたるが、道の爲めの辛苦にあらざるが故、國も家も身も花の如く散じて餘す所は癡名のみ。古は
宮女九人に過ぎず、是で十分なり、然るに百人、千人、三千人猶ほ足れりとせず、馬鹿天子共名の
天子にして徳の天子にあらず。滿春殿、滿は多の宮女を意味する、春殿は前に花字あり、春にあら
ざれば花活きず、乃ち錦衣と花とを承ける、文字使用法なり、此の句に至る起承轉二十一字は悉く

昔時を叙す。只今唯有、前の姑蘇臺は此の四字轉句に用ふ、此の篇は結句に用ふ、作法の別、知るべし。鷓鴣は一名、越鳥、越中に多く棲むを以てなり。飛ぶこと月に随つて異なる、正月は一度飛んで止む、夜飛ぶ時は木葉を以て自ら其の背を覆ふ、常に南に向うて北に徂かず、東西回朔すと雖も、翅を開くの始め必ず先づ南に翥る、其の鳴聲を古代の漢士人は「鉤輞格櫟」と聞きしなり、注者自身も未だ其の鳴聲を聞かず。

【評論】此の篇、蘇臺覽古と併稱する名篇なり、沈歸愚曰く、三句盛を説き、一句衰を説く、其格獨創と。蔣春甫曰く、古を思うて今を傷む、其の得小の處、全く只今唯有の四字に在り、嗚乎春殿は荒邱と化し、美人は黃士と爲る、底物か其れ能く千古萬古に餘すものぞ、無情の小鳥に附與して當年の盛事を語らしむ。箇中の消息、二十八字、悉して餘蘊なし。千萬言の文、何ぞ能く之に越えんや。

與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛

一爲遷客去長沙。西望長安不見家。黃鶴樓中吹玉笛。江城五月落梅花。

一たび遷客と爲りて長沙に去る、西長安を望めば家を見ず、黃鶴樓中玉笛を吹く、江城五月落梅花、

【句釋】史は姓、郎中は官名、欽は名、姓の下に官名を附け、官名の下に名を書するの例、唐人の

集中殊に多し。黃鶴樓は前已に辨あり。吹笛を沈の「別裁」に聞笛に作る、德潛が臆斷なり。一爲は始めて爲る意、「句解」の説は大に誤まる。遷客は左遷の客で、遠謫を云ふ、浪人に爲つた事にも官を移されし事にも用ふ、今史も李も共に遷客と爲り、共に吹笛を聴くなり。去長沙、典公の「集注」「長沙ヲ」と訓す、「ヲ」にはあらず「ニ」なり、長沙に去るなり、長安を中心とせざる時は遷の意味を爲さざるなり、長沙郡は秦始めて置き、唐は潭州と稱し、天寶の初、復長沙に復す。西望、長沙より長安を望めば西方に當る。不見家、西洋人に懷郷病有りと聞く、東洋人にもこれ有り、殊に詩人の罹り易き病とす、長安は白の故郷にはあらざるも、史は故郷なり、「訓解」に、太白は長安に家が無いと論ずるが、白は醉へば何處へでも眠る、長安市上の酒家なども、故郷と思ふ人なり、韓愈の曰く、中世士大夫宦を以て家と爲す、白も翰林學士と爲りて長安に在住せしなれば、是の意味を以て故郷と言へるなり。黃鶴樓中吹玉笛、吹笛に巧なる人を雇うて之を聴きしものか、或は樓中に我に關せず吹く者ありしか、白と史とは唯之を聴きしなり、玉笛の玉は、瑞公曰く「枕辭」と、然れども、「涼州記」に、咸寧中、盜、張駿が冢を發き白玉笛を得と、因つて知る、金笛もあり、銀笛、鐵笛、玉笛、皆有るなり、聲音より言ひしものにあらず。江城は鄂州府城即ち武昌城、江に臨んで在るより名く。五月、「風俗通」に、五月落梅の風あり、梅子の熟して落ちるなり、江淮以て信風と爲す、乃ち知る遷客と爲る時、此の時節なるも、落梅花は笛の曲名、別離を傷む意味の曲なり、

五月は落梅風即ち信風の吹く時節は知つて居る、蓋し今笛中に之を聴く、吾感一層深し、歸思豈生せざらんや。

【評論】此の篇、白が集中傑作なるもの、一、白が詩、大底尋常の平語を以て構成し、曾て奇恠偏僻の字を用ひず、而して一篇の中、一箇處、非常に斤量ある語を夾み、之れに觸るれば、大音響を發するの妙を持して居る、此の篇亦然り、一二三と平語の如きも第四の結に到り江城五月と一たび口に上るや、實に微妙なる音響を發するの感を生ず、箇中の消息は詩聖と冥合一如する者ならざれば談ずること能はず。詩醇の評に、凄切の情、言外に見はる、含蓄不盡の致あり、落梅に至り、笛曲點用化に入る、論者乃ち紛紛梅の落と不落とを争ふ、豈癡人の前夢を説くを得ざるに非ずや。明の謝茂秦曰く、一爲、西望、黃鶴、江城の八字を截つて語意亦足る、此の八字あるを以て大に精彩を減ず、殊に聲調に乏し、太白が作にあらず。嗚乎茂秦の毛を吹いて疵を求むるの愚、一笑を發す可し、此の八字の活躍を爲すの力、非常なる者あり、之を解せざる茂秦の愚、詩聖も地下にて憫笑すべし。

春夜洛城聞笛

誰家玉笛暗飛聲。散入春風滿洛城。此夜曲中聞折柳。何人不起故園情。

誰が家の玉笛ぞ暗に聲を飛ばす、散じて春風に入つて洛城に滿つ、此の夜曲中折柳を聞く、何人か故園の情を起さざらん、

【句釋】洛城は洛陽城、唐の都、現今の河南省河南府なり。誰家の二字著眼して見よ、詩聖筆を下すの妙を知らん。玉笛、都城下の吹笛、竹笛も不可、鐵笛愈よ不可なり、玉笛ならざるを得ず。暗は吹笛の人を見ず、亦誰家なるを知らず、亦月下ならざればなり。飛聲、飛は下句の風の字あるが爲めなり、風無くんば飛と言はず。散入春風、風有るが爲め聲飛び、聲の飛ぶは風有るが爲め、影略互見の法。滿洛城、其の聲遠く聞え遙かに響くを謂ふ。此夜は題意分明と爲る。曲中聞折柳、漢の李延年が傳へたる横吹二十八曲中に折楊柳と云ふ一曲あり、折柳は離別の時縮ねて贈るものなれば、今夜客中に於て此の曲を聞く者は獨我のみならず、何人か郷愁を起さざらん。何人は起句の誰家の字に對して餘味限り無し。不起故園情、不起の字は散入の字と脈を引き、故園情の字は滿洛城の字と脈を引く、故意に脈を引かんと欲する者は、脈の爲めに制せらる、自然にして此に至る、天衣無縫の妙あり。

【評論】此の篇、春風折柳、玉笛、鄉情、洛城に客と爲つて之を聞く者、誰か一片の哀愁を引かざらん。胡元瑞曰く、之を讀む、其に八極に揮斥し、九霄を凌厲するの意あり、賀監謂つて謫仙と爲す、良に虚ならず。黃家鼎曰く、唐人聞笛の詩、多く韻致ある、此の如し、散逸瀟灑なるもの復見

す。「詩醇」の評に、杜甫次笛七律と同意、但彼結句、白鶴樓絶句と出すに變化を以てし、事を用ふるの迹を見ず、此の詩並に翻新ならず、深情自ら見る、亦異曲同工なり。

宴城東莊

崔敏童

一年又過一年春。百歲曾無百歲人。能向花前幾回醉。十千沽酒莫辭貧。
一年又過一年の春、百歲曾て百歲の人無し、能く花前に向つて幾回か酔はん、十千酒を沽うて貧を辭する莫れ、

【句釋】崔敏童は「唐書」に傳無し、惠童の弟と傳ふるのみ、開元年中の人。城東莊は自家の別莊。一年又過一年春、今年も又過ぐ今年の春、九十の春光を送り盡くす、一年又の仄平仄、盛唐人罕に有ること注意すべし。百歲曾無百歲人、此の春光を賞して百歲に至る人は絶無なり、「中阿含經」に梵土梵摩百二十六にして死すと、我が垂仁天皇は百四十一の寶算を以て崩す、蓋し有數なり。能向花前幾回醉、百年間、花前に酔倒する事は到底能はず、何遍と指を屈する位に過ぎず、十千は一斗の代名詞なり。沽酒、沽は買ふ賣る兩義を持つ變な字なり、今は買ふなり。莫辭貧、貧なるが故に沽ふ能はずと言ふ莫れの意なり、貧を一本頻に作る、頻は平凡なり。

【評論】此の篇、王元美の評に、後二句王翰が、酔うて沙場に臥す君笑ふ莫れ、古來征戰幾人か回ると同一に憐む可き意なり、翰語は爽、崔語は緩、其の喚法亦兩反すと「藝苑卮言」にあり。

奉和同前

崔惠童

一月主人笑幾回。相逢相值且銜杯。眼看春色如流水。今日殘花昨日開。
一月主人笑ひ幾回ぞ、相逢ひ相値うて且杯を銜む、眼に看る春色流水の如くなるを、今日の殘花昨日開く、

【句釋】崔惠童は開元の時の人、明皇の晉國公主を尙す、敏童の兄とす。奉和同前は後人が設けし題ならん、弟が城東莊に宴して一年春の詩に和したる者、弟に與ふるに奉字を以てす、禮に過ぐ、斷じて後人が設けし題なり。一月は一箇月三十日間。主人は敏童を云ふ。笑幾回、笑に種種あるが單に笑は權笑に屬す、其の權笑が一月に幾回あるぞや。相逢相值、逢も値も同義の字、重ねたるなり。且銜杯、他事は關する所にあらず、唯酒是れ飲む可し。眼看は眼前に看る。春色如流水、九旬の春色去つて水の如し。今日殘花昨日開、昨日は少年今は白頭と意想略詞じ。

【評論】此の篇、弟敏童の詩と大略意同じ、花殘すと言つて、人の老ゆると言はず、味此に在り、起句は仄仄仄平仄仄仄、弟と共に此の作法を爲す、他盛唐諸公の無き所、宋元の釋氏往往之を爲す、正法にあらざるなり。願華玉曰く、意自から慷慨、興自ら悠揚。

邙山

沈佺期

北邙山上列墳塋。萬古千秋對洛城。城中日夕歌鐘起。山上唯聞松柏聲。
北邙山上墳塋を列ぬ、萬古千秋洛城に對す、城中日夕歌鐘起る、山上唯聞
松柏の聲

【句釋】邙山は河南省河南府の城北十里に在り、綿亙四百餘里、東漢の諸陵及び唐宋名臣の墳墓多
く此に在り。北邙山上、城北なるが故に北字を付す。列墳塋、墓の高きを墳、四方圍ある者を塋と
云ふ、塋は總稱、墳は別稱。萬古千秋は山の有らん限りの意。對洛城、洛陽城は河南府を以て中心
とす。城中日夕歌鐘起、山上より下瞰する所の景、生者に屬す。山上唯聞松柏聲、正しく是れ山上
の景、死者に屬す、歌鐘は陽なり、松柏は陰なり。

【評論】此の篇、拗體を以て成る、山上と洛城とを重疊して聊かも自然を損せず、蔣黃二家の評、
揚ぐるに足らざるを以て出さず、偶ま謝肇制の「五雜俎」を閱す、南人の墳墓多く松柏を種うと。

送司馬道士遊天台

宋之問

羽客笙歌此地違。離筵數處白雲飛。蓬萊闕下長相憶。桐柏山頭去不歸。
羽客の笙歌此地に違ふ、離筵數處白雲飛ふ、蓬萊闕下長く相憶ふ、桐柏山頭

去つて歸らず、

【句釋】司馬は姓、名は承禎、河内の人、潘師正に事へて穀を辟くる導引の術を傳へ、遍く名山に
遊ぶ、天台に廬して出でず、睿宗召し至らしめて道を問ふ、固辭して山に還る、朝士、詩を贈る者
百餘首、開元中再び召され、卒する年八十九。道士は周の老子を祖とし道德經の道を傳ふる者を稱
す、亦靈藥を製造するを以て副業とす。遊天台、浙江省の台州府に天台山あり、名山と稱せらる、
遊と言ふと雖も實は歸隱を謂ふなり。羽客は羽仙又は羽人、仙人と同じ、今司馬を指す。笙歌、仙
人王子喬好んで笙を吹き鳳鳴を作す。此地違、違は別の意、此の都城にて離別する、天台山に洞天
あり、金庭宮と名く、司馬鍊師上人と稱するが如し、居る、名を崇道觀と賜ふ、王子喬に比するに便と爲
す。離筵數處白雲飛、後漢の薊子訓、神異の道あり、同時に諸貴人の宅、二十三處に到る、去る日
徐徐として行く、諸貴人、馬を走らしめ逐へども及ばず、唯白雲の數處に騰り起るを見ると、今以
て司馬を譬ふ。蓬萊闕下、唐の大明宮、高宗改めて蓬萊宮と名く、仙居より以て宮に稱す、送者即
ち朝士の側より云ふ。長相憶、司馬道士の徳を憶ふなり。桐柏山、唐崔尙が「天台山碑」に、此の
山、代之を天台と謂ふ、眞に之を桐柏と謂ふ、道士が名けて天台を桐柏と稱するなり。頭去不歸、
司馬が宋之問に答ふる詩に、見すや其の人誰と與に言はん、歸坐琴を弾じ思逾よ遠し、歸らざる所
に益す道士の操行高きを知るなり。

【評論】此の篇、故事を用ひ得て、筆氣矯健、初唐の格を見るに足る、我邦の齋藤拙堂は此の詩を見る輕きに失す。

送梁六

張說

巴陵一望洞庭秋、日見孤峯水上浮。聞道神仙不可接、心隨湖水共悠悠。
巴陵一望洞庭の秋、日に見る孤峯水上に浮ぶを、聞く道く神仙接す可からずと、心湖水に随つて共に悠悠。

【句釋】梁は洞庭湖上の人にて、其の歸るを送るならん。巴陵は湖北省岳州府巴陵郡なり。一望、巴陵の地廣且高なるが故に、君山も洞庭も一望中に在るなり、「ズイト見ワタス」が一望なり。洞庭秋、洞庭湖も洞庭山も悉く秋色なり。日見、前の一望は總じて洞庭巴陵の景を望む、今見ば別して洞庭山即ち孤峯君山を見る、湖の中心に在る山。水上浮、王子年の「拾遺記」に、洞庭山は水上に浮ぶ、下に金堂數百間あり玉女之に居る、即ち是れ仙境と。聞道神仙不可接、常に聞く仙人の境界は、人間に近接すべからざるものと、梁は今日より吾人の接近すべからざる人と爲る。心は宋之間の心なり。隨湖水、梁を懷ふの心は湖水の悠悠たるに随つて我も悠悠たれば、其の字を以てす、水と我と共に悠悠たるなり、極まり無きの謂なり。

【評論】此の篇、宋が司馬を送る詩と、相軒輕する所無し。蔣一葵曰く、詩中但悠遠を言ふ、而して別意自から見る、美人秋水の思、當に是れ別後の意なるべきのみ。

春宮曲

王昌齡

昨夜風開露井桃、未央前殿月輪高。平陽歌舞新承寵、簾外春寒賜錦袍。
昨夜風開く露井の桃、未央の前殿月輪高し、平陽の歌舞新たに寵を承け、簾外春寒うして錦袍を賜ふ、

【句釋】春宮曲は樂府題にて宮詞なり、唐人の宮詞或は事を賦し、或は怨を抒べ、或は風刺を寓し、其の旨とする所多し、此の詩は玄宗の妃子に惑ふを諷す、宮中の夜宴、明主の爲す所にあらざるなり。昨夜の二字此の詩の眼目なり、全首悉く昨夜の事を叙す。風開、風暖かなる故に、露井桃、花開かざるを得ず、輓轡ありて屋蓋なき井を露井と云ふ、屋根の無き苑中の井戸なり、其の井畔の桃が開く。未央は漢の高祖が建し宮名。前殿は殿前を倒用したる語。月輪高、夜深けて圓月高きなり。平陽歌舞、漢の衛子夫を謂ふ、武帝平陽公主の館に幸し、謳者衛子夫が善歌舞するを見て載せて廻り遂に立て皇后と爲す、今以て貴妃を云ふ。新承寵、新の字殊に工なる所、物の新は人の賞する所、況や美人の新なるに於てをや、寵は恩と愛とを兼有して居る。簾外は衛子夫が歌舞する處、

簾内は即ち武帝が歌舞を見て居る。春寒。簾外は屋外とは異なる、何の寒か之れ有らん、而かも寒からんと思ふは愛の極なればなり。賜錦袍、卓異記に、武后、龍門に遊び、羣臣に命じて詩を賦せしむ、先に成る者に錦袍を賜ふ、東方虬なる者先づ成る、乃ち賜はる、座末の宋之間、詩成る、文理兼美なり、乃ち虬の錦袍を奪うて之を衣る、唐代宮廷の賞品として第一の賜品でありしなり、抑も天子は甲夜に事を視、乙夜に書を覽るが、天子の天子たる勤めなり、然るに花前月下、佳人の歌舞を見て、之に錦袍を賜うて、婦女の懽心を買はんとするは、天子の徳を害する大なるもの、陽に武帝を叙し、陰に玄宗を叙し、諷意を以て事を咏じたるなり。

【評論】 此の篇、諸家の評、衛子夫を謂ふとあるに、楊用修一人は趙飛燕の事を咏じ、開元末だ玉環を納れざる時と言ふ、大に誤まる、飛燕に關する事全く無し、且玉環を納れざる時は新承寵是れ何者ぞ、玉環以外に玄宗が此の詩を受くる理由なし。沈歸愚曰く、龍標、絶句、深情幽怨意旨微茫、昨夜風開の一章只他人の承寵を説き、而して己の失寵悠然思ふ可し、此れ響きを絃指外に求むる者なり、詩中天子の稱ある作者、千古の絶伎、嘆嗟するに餘り有り。

西宮春怨

西宮夜靜百花香。欲捲珠簾春恨長。斜抱雲和深見月。朧朧樹色隱昭陽。

西宮夜靜にして百花香ふ、珠簾を捲かんと欲して春恨長し、斜に雲和を抱きて深く月を見る、朧朧たる樹色昭陽隱たり、

【句釋】 西宮春怨は樂府題怨思二十五曲の一、西宮は長信宮を云ふ、春怨は班婕妤が事なり、成帝が趙飛燕を納るるに及んで婕妤は寵を失し、退いて太后が所居の長信宮に入り、以て太后に供養す、而かも女性なり、豈怨無かるべけんや、此の詩、乃ち其の怨を云ふ。西宮夜靜、晝猶は靜かなり、況や夜をや。百花香、花氣は夜靜かなるが故に特に其の香を送る。欲捲珠簾、花香を覺ゆるに因つて簾を捲き以て花に對せんか、君王は見えず、正に是れ情緒寸斷遂に之を捲かず。春恨長、恨は怨と略同し、人の有情を以て、花の無情に對應す。斜抱雲和、珠簾は捲く可きもの、而かも捲かず、雲和は鼓く可きもの、而かも鼓かず、斜は「ヨコスチカヒ」抱は「カカヘル」雲和は元來山の名、此の山に出づる材で琴を造る、其の聲特に清亮なり、遂に琴の名と爲りしもの。深見月、瑞公は簾を捲き深く簾中に坐して見ると解したるが、簾は捲かずと解する方、良工の苦心を見る、乃ち簾を捲かずして深坐して月を見る、珠簾固より捲かずとも月は見らるるなり。朧朧は不明の貌、ボンヤリの形容語、而して春夜に限り用ふる語。樹色も月色も春夜は特に朧朧たり。隱昭陽、成帝は今夜も昭陽宮に車駕を廻らしたるならん、昭陽を見んと欲するも、樹色に隱即ち覆ひ藏され、見る能はず、昭陽は趙飛燕と其の妹趙合徳の舍とする所なり。

【評論】此の篇、明の胡應麟は李白の長門怨の詩、「天は北斗を廻らし西樓に挂る、金屋人無く螢火流る、月光長門殿に到らんと欲す、別に深宮一段の愁と作る」と此の詩を比較して曰く、李は則ち意、語中に盡く、王は則ち意、言外に在りと。今謂ふ、李が長門怨と此の詩とは斤量の相違甚だしく、到底比すべくもあらず、時代は後るゝが晚唐杜牧の「後宮詞」以て比すべきか、「監宮引出して暫く門を開く、例に随つて須らく朝すべし是れ恩ならず、銀鑰却收して金鎖合す、月明に花落ちて又黄昏、」

西宮秋怨

芙蓉不及美人妝。水殿風來珠翠香。却恨含情掩秋扇。空懸明月待君王。
芙蓉も及かず美人の妝。水殿風來つて珠翠香し、却て恨む情を含んで秋扇を掩ふことを、空しく明月を懸けて君王を待つ、

【句釋】西宮秋怨は春と秋との異なるのみ。芙蓉は蓮の開きたるもの、其の未開のものを菡萏と云ふ、花の美なるもの比喩なし、西宮は宮娥の寢室と知るべし。不及は「シカズ」と訓む、逐ひ著かぬこと。美人妝、班婕妤が姿色衰へたるに依つて、成帝之を捨てしにはあらず、大底人情新を好む、芙蓉も及かざる美人を捨てしは飛燕の新妝、別に有ればなり。水殿は水榭、池亭の類。風來、風あ

るが故に香を送る。珠翠香、珠翠は婦人の服飾と、帳の飾りの二種あり、「西征賦」に、甲乙を絡ふに珠翠を以つてすとあるは、閣の華麗なるを言ふ、「洛神賦」に、金翠の首飾を裁し、明珠を綴りて以て軀を輝かすと、注に黄金翠羽、其の釵を装ふ、明珠を上綴りて其の首を光耀するなり、此の句は閣飾と服飾と雙方に係る。却恨、此の二字は下の十二字を貫ぬく、芙蓉は自ら開き、自ら色に驕る、涼風は徐に來り香氣を送る、而かも此の身は失寵し、鳳車の之に過ぎる事無し、是の故に此の良夜も樂む能はず、反て恨む媒介と成る。含情、寵衰へしと雖も、姿態猶ほ情を含むが婦女の天性なり、瑞公は「身は秋扇の如しと思へども口へ出して言ひもせず故に含むと曰ふ」と、是れ婦女の天性を知らざる説なり。掩秋扇、扇は夏日用なり、秋日は無用なり、自分も寵の盛なる時は、夏日なり、最早今日は秋日なり、扇の棄てられたる如く、自分も亦棄てられたるなり、掩は二様の見方あり、扇を以て面を掩ふ(是二)無用たるが故に扇を掩ふ即ち放下(是二)今は放下と見る方可し、扇は團扇なり。空懸明月、天上の月は秋夜に屬して皓皓として光を放つも人の觀ること無ければ、空しくなり、此の明月は天上の月と團扇と兩方に繋る。待君王、瑞公は容貌尙美一池中蓮可愛二香風滿殿三明月可玩四此の四の恃むべきあり、君王を待つ所以と。明瞭の解釋なり。

【評論】此の篇、春怨に對して其の渾雅の妙、相軒輕する能はざる觀あり、春怨の自然に比すれば、聊か細工に渉る所、遜色と爲す。鍾伯敬曰く、語意渾雅、之を言外に求むと。王漁洋の「廣唐賢三

味集」に、却恨含情の四字を誰分含啼に作る。漁洋たる者、何等の見解ぞや。

長信秋詞

金井梧桐秋葉黃。珠簾不捲夜來霜。熏籠玉枕無顔色。臥聽南宮清漏長。
金井の梧桐秋葉黃なり、珠簾捲かず夜來の霜、熏籠玉枕顔色無し、臥して聽く南宮清漏の長きを、

【句釋】長信は宮名、即ち西宮、是れも樂府の題、班婕妤の事を咏ず、秋詞を秋思に作る本あり、詞が可、秋に因つて怨詞を賦するなり。金井は前に叙した露井と同じ、晉の戴延之の「西征記」に大極殿上に金井欄、金博山鹿盧ありと、宮禁中の井戸なり。梧桐は井邊が最も能く發育する、魏の曹丕の詩に、梧桐空井に生じ、枝葉自から相加ふ。秋葉黃、梧桐は晩春葉を生じ、晩秋に凋む、黄色とあるは、深秋に逼るなり。珠簾、起句の金井と字面の對を取る。不捲、簾を垂て捲かざるは君王臨幸せざるが爲めなり。夜來霜、夜來は前夕を云ふ、晩來即ち黃昏と混する勿れ。熏籠は竹を以て之を造る、香を焚き以て衣に薰する所以、漢の制、天子象牙を以て火籠を爲ると、「西京雜記」に在り、香爐と同用のものなり。玉枕は天子の用ふる枕、三國の魏の明帝が玉虎頭枕を得たる故事もある。無顔色、是れ美麗なる熏籠や玉枕あるも已に君寵を失する身、亦何の顔色もあらずとなり。

臥聽は獨、空間に在りて空しく聽く。南宮は一本に宮中に作る、南宮は史上に分明ならず、自身の住處は西宮、其の西宮より南宮から漏れ出づる清漏即ち時計の長きを聽くのみ、支那の古代銅壺を以て水を受け、其の水の滯るゝを計り、晝夜を分ちしものとす。

【評論】此の篇、宮詞三昧を以て古今の白眉とする王に在りては上乘のものにあらず、加賀の千代女が「起キテ見ツ寢テ見ツ帳ノヒロサ哉」を韻字を以て出したるに過ぎず、石川丈山は三十六詩仙の中へ王昌齡を收め、而して此の詩を取る、王として最下のものを取る、丈山の詩眼、余輩と異なる所のものあるなり。

其二

奉帚平明金殿開。且將團扇暫徘徊。玉顔不及寒鴉色。猶帶昭陽日影來。
帚を奉じて平明金殿開く、且團扇を將て暫らく徘徊す、玉顔は及かず寒鴉の色、猶ほ昭陽の日影を帯びて來るに、

【句釋】奉帚、帚は音「シユウ」訓「ハハキ」竹冠を付するは俗字なり、班婕妤の賦に、灑掃を幃幄に共にし、永終死以て期と爲す、婦の夫に事へることを云ふ、必ずしも掃除をすることにあらず、今は灑掃して鳳輩の來るを待つ。平明は平旦明發にて曉天を云ふ。金殿開、金門と殿閣、灑掃終つ

て始めて開く。且將、且は「カッ」又「シバラク」將は「モテ」なり。團扇、清の謝肇淛云ふ、大明以前摺扇無し、多く團扇を用ふ、支那の團扇は日本より風雅にして俗陋ならざること人の知る所、秋に至れば扇は捨てられ、自分も棄てらる、拈弄して百憂集る。暫徘徊、暫時氣を晴らす爲め徘徊して憂を遣る。玉顔、是れ班の顔面の美を云ふ、漢の枚乗が詩に、燕趙佳人多し、美なる者顔玉の如し、玉顔龍顔は後世天子に限り用ふ。不及寒鴉色、才人は自分の才に戀戀し、美人は自分の美に戀戀す、而かも此の美を以てして寒鴉の色に及かず。及かざる所以は、猶帶昭陽日影來、昭陽宮は天子の住する所、趙飛燕も亦侍する所、其の宮上を過ぎ來る寒鴉は實に恩輝を帶ぶるものと謂つ可し、我が寒鴉に及ばざるを怨む、敢て寒鴉を怨むにはあらず。

【評論】此の篇、怨んで而して怒らざる詩人温厚の旨、三百篇の旨、此に存す、口角沫を飛し、怒號する底の詩は、遂に詩にあらざるなり。明の胡元瑞曰く、優柔婉麗、意味無窮、風骨内に含み、精芒外に隠す、清廟の朱紘の如し、一唱三嘆。清の沈歸愚曰く、優柔婉麗、含蘊窮まり無し、人をして一唱三嘆せしむ。是れ胡評を襲ひしもの。王漁洋は、李白の白帝城、王之暎の黄河遠上詩、王维の渭城詩と龍標の此の詩とを併稱して四章と云ふ、漁洋の神韻宗の興る所、此等の處にあるなり。楊升菴は秦玉鸞の「蘭幙蟲聲切に、椒庭月影斜なり、憐む可し秦館の女、及かず洛陽花」の詩が粉本なりと云ふ、出典は玉鸞詩ならんが、音節の響亮、原作の及ぶべきにあらず、出藍と稱すべし。

其三

眞成薄命久尋思。夢見君王覺後疑。火照西宮知夜飲。分明複道奉恩時。
眞成に薄命なるかと久しく尋思し、夢に君王を見て覺めて後疑ふ、火は西宮を照して夜飲を知る、分明なり複道恩を奉ぜし時、

【句釋】眞成は東京語の「ホント」京阪地方語の「ホンマニ」と云ふ意味。薄命は薄倖と同義、佛教語の宿業に當る、男女共に用ふるが殊に女に多く用ふ。久尋思、薄命なる經過歴蹤を尋思すること久し。夢見君王、薄命と嘆じても下民の様に明日食ふ米が無い、衣服が無いと云ふにはあらず、衣食は十分、施すも餘ある、但天子に愛を失し、深宮に孤棲を守ることが薄命なり、然らば、天子が舊の如く一顧を與ふれば、薄命が直ちに饒倖と轉化する、此の如く再三再四尋思して止まざるが故遂に天子を夢に見る。覺後疑、虚夢なれば疑はず、實夢なるを以ての故に疑ふ、學者は夢に周公を見、堯舜を見ることを冀ふ、宮人は天子を見んと冀ふ、人情此に至る。火照、燭光の影照すなり。西宮は即ち長信宮。知夜飲、此の夜飲は直ちに上の西宮を承けるにはあらず、昭陽殿の夜飲に當り、燈燭の餘輝が西宮に返照するを言ふ。分明は俗語の「アリアリト」と云ふ氣味、夢覺めて後も目前に在るが如く見る。複道は閣道とも云ふ、木を空中に架し、以て往來を通ずるを曰ふ、

上下に道あり故に名くと、二階廊下の事なり。奉恩時、天子幸すなどの報知の有る時、複道まで出で迎へ、天語の貴きを賜はる、此の如き妄想が夢幻の間に彷彿し來る、實夢は遂に虚夢と化し去る。
【評論】 此の篇、夢の一字を注脚せん爲め他二十七字有るなり。胡元瑞曰く。少伯宮詞、樂府題と雖も、實に唐人の絶句、六朝に涉らず。黄家鼎曰く、思に因つて而して夢み、既に夢みて疑ふ、宮人の心事を描寫して殆んど盡くす。沈歸愚曰く、分明の二字を下して夢境を寫し微に入る、嗚乎少伯の宮詞、千古の絶調なる哉。

青樓曲

白馬金鞍從武皇。旌旗十萬宿長楊。樓頭小婦鳴箏坐。遙見飛塵入建章。
白馬金鞍武皇に從ひ、旌旗十萬長楊に宿す、樓頭の少婦箏を鳴して坐す、遙かに見る塵を飛ばして建章に入るを、

【句釋】 青樓曲は樂府題、宮苑十九曲の一、齊の世祖道成青漆を樓壁に絶す、世之を青樓と謂ふ、後轉じて婦人の所居を稱し、三轉して娼妓の居所を稱するに至る、今は意義の轉化せざる最初の義を取る。白馬金鞍、天子の游幸に扈從する鞍馬必ず須らく華麗なるべし、馬に跨る者は少婦の夫なり。從武皇、漢の武帝に從ふは、即ち玄宗に從ふを言ふ。旌旗十萬は、扈從人の多きを言ふ、旌旗

の數を言ふにはあらず。宿長楊、盤屋縣の東南三十里に秦の離宮あり之を長楊宮と云ふ、漢の武帝之を再修して以て巡幸に備ふ。宿は天子の泊宿游幸するなり。樓頭少婦は、武皇に從ふ者の妻なり。鳴箏坐、鼓絃竹身の樂器を箏と云ふ。遙見飛塵、人は稻麻の如く、車は流水の如く、馬は龍の如く、十萬の人、先を争うて相從ふ、塵飛んで、面を拂ひ空を蔽ふ、故に樓頭より遙かに望見する。入建章、建章宮に向て吾が夫は意氣揚揚と入る、少婦は吾が夫の威勢を喜ぶ、題を青樓曲に借り以て玄宗の游幸を諷諭す、其の作意明明たり。

閨怨

閨中少婦不知愁。春日凝妝上翠樓。忽見陌頭楊柳色。悔教夫婿覓封侯。
閨中の少婦愁を知らず、春日妝を凝して翠樓に上る。忽ち陌頭楊柳の色を見

て、悔ゆるは夫婿をして封侯を覓めしめしを、

【句釋】 閨怨は樂府題、前に辨ず、家を守る婦の情を叙するが普通なり、夫婿と隔離して居ること勿論なるが、夫が從軍中の事を叙するを第一義とす。閨中は婦人の室を云ふ、宮中の小門を指すが本義なれど、閨閣を以て婦人の「ネヤ」と稱し來る久しきなり。少婦、「ワカキツマ」不知愁、知字を會字に作りし本あり、知が可なり、少婦なるが故に未だ辛苦を経ず、故に別離を愁ふるの情も切ならざるなり。春日凝妝、粉黛青娥の妝を積極的に施す。上翠樓、翠と青とは同じ、盛妝成りたるを以て樓に上る。忽見、忽は乍と違ふ、意外にフト發見することを持つ字義なり、少婦が何の氣も無しに樓に上つて見れば意外の事ありしなり。陌頭は東阡南陌と熟語して市中の街頭を云ふ。楊柳色、漢土の風俗、人を送るに必ず柳條を結ねて以て贈る、結んで環形の如くす、環の音即ち還、無事に歸還を祈る意味、歐土の花輪は此の風俗が移りしものなり、今少婦が樓上より陌頭の柳色を見て、嚮に送りし時の事を憶ひ出し愁を爲すなり。悔教、悔は前に夫婿をして遠征を勧めしが今其の非を悔ゆるなり。夫婿の婿は濁音にして「ゼイ」と訓む。覓は求と同義、覓は俗字なれば今用ひず。封侯、是れ一縣一城の主と見ても、子爵男爵の意に見ても共に通ず、動員令が一たび下るや、我も彼も筆を投じ、皆戎軒に志し、功を樹て、勳を樹て、平民より一躍して、或は男爵、或は子爵、或は勳、或は位、一身一家の光輝を増す、此の時を除きて他に其の時あらず、少婦等は別後

白草原頭望京師。黃河水流無盡時。秋天曠野行人絕。馬首東來知是誰。
白草原頭京師を望めば、黃河水流れて盡くる時無し、秋天曠野行人絶ゆ、馬首東來知る是れ誰ぞ、

出塞行

の愁を知らず、但夫婿の立身のみを望み、餘りに好まざる夫婿をして無理に出征せしめしが、さて男爵は何日成る、賜金は何日下る、夫は何日還ると、徒らに虚榮の心を動搖して待ち居る、一日、二日、十日、三十日、百日、千日、遂に何等の消息も無く、何の封侯の事も無し、夫婿も凱旋する氣色無し、今日登樓して楊柳を見、感慨が一時に湧き來り、悔念頻りなるも、如何せん最早及ばず、在レ家貧亦好を少婦も遂に悟るなり。
【評論】 此の篇、昌齡集中尤も得意の作、李太白をして前に疾走せしめ、李庶子をして後に瞠若たらしむ、三唐を通じて、此の種の調を競ふものあらず。蔣春甫曰く不知、忽見、悔教、轉折あり、是れ章法と。黃道周曰く、淺にして近く、淡にして眞、一句一折、波瀾横生と。謝疊山曰く、此れ人情に本づきて言ふ。

【句釋】 出塞行は一本「旋望」に作る、今の題を以て可とす、「從軍行」と意義同じ、塞は蕃界、又

邊界、今其の蕃界に出陣する事を咏す。白草は一本白花に作る、草が可、蕃界の地、所謂不毛の地、荒涼寂寞、草も青草は無し。原頭は荒原塞頭の事。望京師、家を離れ、妻子に別れ、蕃界に赴く者、豈望まざるを得ん、京師は都の長安を云ふ、京は大の意味、師は衆の意味、傳天子の居所は必ず大衆を以てするが故なり、周代より始まる。黄河は支那第一の長河、單に河と稱せば即ち黄河なり、其の源は西藏の青海より出で比摩刺亞を北折して甘肅に及び、甘肅を北折して内蒙古に入り、こゝに南折して山西と陝西との間を流れ、又東折して河南と山東の北境を通過して以て渤海に入る、水流、南流する水は南流し、北流する水は北流し、無盡時、千古も萬古も盡くる時は無し、而かも人事は屢ば變化する。秋天、是れ出塞の時節を云ふ、春天も夏天も冬天も共に不可、秋天ならざれば詩としての意義無し。曠野は空闊なる白草原を云ふ。行人絶、蕃塞は寂寞、游歩の地にあらざるを以て行人の來往は斷絶する、其の行人の斷絶する曠野に、馬首東來、馬首を東方に向け來る者は、知是誰、一人來る者ある、ハテ是れは誰人ぞと驚き恠むなり、馬首を東にして京に歸る者を見て之を羨む意あり、齋藤拙堂は京師より來る者と解するが如けれども、余謂ふ然らず、却て反對京師に歸る者なり、「左傳」に、晉侯秦を伐つ時、大將荀偃、令を下して曰く、井を塞ぎ竈を夷らかにし、唯余が馬首是れ瞻よと、軍を本國へ向け引き廻す時、敵に知らしめざるを示したる語なり、樂黯曰く、余が馬首東せんと欲すと云ひて乃ち歸る。

【評論】此の篇、一二の二句、近體の平仄法に依らず、古體を以て之を出す。顧華玉曰く、慘澹傷む可し、音律柔と雖も、終に是れ盛唐の骨格。唐荆川曰く此の如き荒涼、此の身著落の處無し。蔣春甫曰く末句人の意表に出づ。

從軍行

烽火城西百尺樓、黃昏獨坐海風秋。更吹羌笛關山月、無那金閨萬里愁。

烽火城西の百尺樓、黃昏獨坐す海風の秋、更に羌笛を吹く關山の月、那んと

もする無し金閨萬里の愁を、

【句釋】從軍行は樂府題、唐代の盛賦此を以て第一とす、家を守るの婦、征夫を想ふ情を叙ぶ、傷離者從軍より甚だしきは莫し、功名を遂げて還り、金鶏の章を賜ふ者は可なり、功も成らず、反つて沙場の白骨と成る者は眞に憫むべきものなり、「周禮」に、天子は六軍、諸侯の大國は三軍、次は二軍、小國は一軍と、一軍の數一萬二千五百人なり。烽火は「漢書」に依つて見ると、邊防の警備に高き土櫓を立て、樓上に桔槔を設け、頭上に鏡あり、薪草を其の中に置き、常日には之を低れ、寇あれば、乃ち火を燃し、之を擧げて相告ぐ、之を「ノロシ」と云ふ。城西、詩中に東西の字を用ふ、必ずしも事實に拘泥せず、地理志と同視する者は誤る、但其の調子を取る、城西でも城北でも

可なり、平仄法の上より城西ならざるべからず。百尺樓、烽火を擧ぐる所の城樓を云ふ、烽火城の外に百尺樓あるにあらず、樓は「ヤグラ」即ち戍樓なり。黄昏は日の將に暮れんとする時、晩方の日色より來た字面なり。獨坐、戍樓城に一人成るとは疑はしき事なるが、一人でなければ詩にならず、且淒涼寂寞を意味する故に依る。海風秋、青海の風、樓に入り、無窮の邊思を起す、海風の雄壯は、百尺の雄壯に照應す。更吹、更は代なり、改なり、復なり、「其ノ上ニ」の和訓に當る、邊塞(一)黄昏(二)獨坐(三)秋(四)是れ皆愁を生ずるに堪へたり、其の上に羌笛を吹く、愁の益す所以なり、羌は「ニシノエビス」西方の蠻族を云ふ、「説文」に西戎牧羊人也、彼の十六國分裂の時、秦王と稱して古の長安、今の陝西省慶陽府に在りし、姚萇の種族は即ち羌なり。羌は寛廣の義、羌人自から強大を以て誇る、羌笛は蘆葉を巻き作りしもの、之を吹く悲哀の音を發す。關山月は曲名、征人が事を叙する曲とす。無那、是れ俗語の「ドウスルコトモナラヌ」に當る、笛は慰安の爲め吹くならんも、而かも慰安とはならず。金閨の本義は齊の謝朓が「既ニ通ズ金閨ノ籍」宮中に事へる賢士のことなり、六朝後、婦女の居室に轉用し來る、春閨、香閨、金閨、皆婦を言ふ。萬里愁、漢土の萬里は眞に萬里なり、徒らに語を大にするにはあらず、上杉霜臺が僅僅數十里の地へ出陣して「遮莫家鄉念遠征」なぞと賦して居る、日本の小國としては却て大に過ぎる嫌あり、吹笛を自身吹く、人の吹笛を聞くにあらず、室家を想ふの念は滅し得ざるを云ふ。

【評論】 此の篇、他人に在りては九鼎大呂なれども、龍標に在りては尋常茶飯事に屬す。鍾伯敬曰く、夏吹無那轉折あり。

其二

青海長雲暗雪山。孤城遙望玉門關。黃沙百戰穿金甲。不破樓蘭終不還。
青海の長雲雪山暗し、孤城遙かに望む玉門關、黃沙百戰金甲を穿ち、樓蘭を破らずんば終に還らず、

【句釋】 青海は漢人は「チンハイ」と發音す、「唐書地理志」に據れば臨羌に在りと、臨羌は清の李兆洛の考に、西漢は縣金城郡、東漢は縣涼州金城郡、晉は縣涼州西平郡、宋は若陝西秦鳳路西安府、今關、按ずるに當に甘肅の境に在るべし、卑禾海是れなり、今日は西藏に屬す、卑禾は青草の生ひ茂り水の淺き沼のこと、海と稱するは之を大にせん爲めなり。長雲は長風と同様、海上又は嶽上に用ふ、平地には用ひず。暗雪山、北方の陰鬱と雲とを并せて暗と云ふ、雪山は祈連も崑崙も天山も一にして古の漢人は稱して居る、椿園が「西域聞見録」に、「雪山ハ嘉峪關ヨリ起ル」と有るに由つても知る、嘉峪關は祈連に接近してあるが、崑崙には遠し、且比摩刺亞とは南西の異あり。孤城、是れは玄宗の時、大將哥舒翰築き以て據る、長安より西北に當る。遙望、城樓に上りて望めば

玉門關ですら遠し、況して長安の都は尙ほ遠し、其の希望は生還を欲するなり。玉門關は漢土より西域諸國に至る最終の關門、漢代は敦煌郡、今は甘肅省安西州瓜州城の西北、漢代に之を設く、後漢の班超が、臣敢て酒泉郡に到るを望まず、但願ふ生きて玉門關に入んことを。黄沙は黄土沙原の意味、一寸の青草も見えず、起句の青海と對應す、戈壁沙漠を指すならん。百戰、是れ多く戰ふを云ふ、百戰百勝は古來の成語なり。穿金甲、穿は破る即ち穴のあくを云ふ、苦闘するの状を露はす、金甲は即ち堅鎧なり、秦漢以前は皮を用て製し、秦漢以後は鐵を以て製せしなり。不破、平定せざるに於てはの意。樓蘭は一名鄯善國、西域三十六國二十七國とも云ふの一、甘肅省西安の地方、羅布淖爾附近なり、漢代之を征伐せんと欲して、反對に屢は破られた、武帝が使者を大宛諸國に遣はす時、此の國が要路では非通過せねばならぬ、樓蘭王之を遮り、每每漢使を攻劫したるなり、「漢書」の傅介子傳に依つて之を見るに、樓蘭王は尋常の刀戟で殺す能はざるを以て、酒に酔はしめ、以て之を殺すと有り、明の學者唐荆川は之を評して、之を詐るなり、武に非すと云ふ、詐らずんば殺す能はざればなり。終不還、是れ從軍者の誓ひの堅固なるを云ふ、終の字竟に作り又死に作る本あり、終の意義は死であるに依て、死と改むる必要は無し、終の字は餘味あり、死字は餘味無し。

【評論】 此の篇、從軍行七首の選は三首あり、中一二と下らざる名篇とす、諸家の選本、此の詩を採らざるは無し。鍾伯敬曰く語亦悲壯と。譚元春曰く、慘中帶雄と。沈歸愚曰く、豪語の看を作す亦

可、歸期日無き看を作す倍す餘味あり。

其三

秦時明月漢時關。萬里長征人未還。但使龍城飛將在。不教胡馬度陰山。
秦時の明月漢時の關、萬里長征して人未だ還らず、但龍城に飛將を在らしめば、胡馬をして陰山を度らしめじ、

【句釋】 秦時明月漢時關、是れ歲月は悠久、邊成は長遠、天象は不變、地形は依然、千古も萬古も是の如くなりとの意、秦漢時代より胡人征伐の爲め、此の邊塞へ來る者多し、其の軍兵は皆明月を觀て故郷を思ひ、而かも生きて玉門に入りし者少なし、元來明月は關名なり、秦以來戍兵を置く所、是の故に、秦時明月關の五言が適切なり、但し秦の世を直ちに接ぎしは漢なるが故に秦關は即ち漢關なり、漢時の明月秦時の關として支障無し、平仄法に拘泥せざる時は是れで可。萬里は道途の長遠、長征は懸軍の長久。人未還、還らざる人は、死者も生者も合含して居る。但使は萬卒は軽く、一將は重しとの意を含む。龍城は三處あり、今の直隸省保定府安肅縣西二十五里（是一）甘肅省鞏昌府岷州東北（是二）甘肅省涼州東北漢置縣爲武威郡治（是三）以上三說の中、最後の說を以て正確とす、「晉書」張軌傳に、姑臧城は舊名蓋城後人語訛りて姑臧と爲す、本匈奴の築く所、南北七

里、東西三里、地龍形あり、故に龍城と曰ふ。蔣春甫曰く、西胡龍神に事ふるを謂つて龍城と爲す、其の所據を知らず、此の要處に飛將在を欲するなり、前漢の李廣は隴西の人、少年時代より胡人と闘ひ、其の家に傳ふる射法、神妙を極む、屢ば戦ひ、屢ば破る、胡人之を漢の飛將軍と稱して大に畏怖したるなり、此の如き飛將が龍城を成らば。不教は俗語の「サセナイ」に當る。胡馬、匈奴の騎軍なり、馬を虜と改むるときは餘味無し。度は過來、漢土へ足を入るるなり。陰山は崑崙山脈より成る、支那本部と内蒙古との間を過ぎて以て陰山と爲る、秦皇が民力と財力とを消費したる萬里長城は此の山脈の南方に沿うてある、胡人が一たび此の陰山を過ぎては漢土人は如何とも爲す能はず、然りと雖も、唐代屢ば此の險を破らる、飛將を想ふ所以なり。

【評論】此の篇、幼孩の口にまで上り、有名なる詩とす。此の選人李于鱗曰く、唐人の絶句、當に秦時明月を以て歴卷と爲すべし。王元美曰く、李の言余始め信せず、少伯集中に極巧妙なる者あり、既にして思ふに、若し意解に落ちば、當に別に取る所あるべし、若し有意無意、解すべく解す可らざる間を取りて之を求めば、此の詩第一たるを免れず。楊升菴曰く唐人の歴卷と。沈歸愚曰く、前人之を推獎す、而して未だ其の妙を言はず、蓋し言ふ師勞し力竭き功成らず、將其の人に非ざるの故に繇る、飛將軍を得、邊に備へば邊烽乃熄む。此の老も詩の妙を言はずして詩の注を書くのみ。我邦の山本北山曰く盛唐の常調、少伯が固分のみ。此の老も愚評を述ぶ、少伯が固分乃ち神品に入

ることを知らず、余謂ふ精神魄力共に完好なる此の篇の如きは尠し、他に別題を求めば名篇もあらん、從軍行としては實に唐人の歴卷なり、齋藤拙堂も于鱗の評を評して「所謂其ノ面貌ヲ識リテ未ダ其ノ心情ヲ知ラズ」と叙したるは明白の言ならず、其の心情如何は自ら評せざるべからず、而かも一言も之れ無し、亦笑ひつ可し。

梁苑

梁園秋竹古時煙。城外風悲欲暮天。萬乘旌旗何處在。平臺賓客有誰憐。
梁園の秋竹古時の煙、城外風悲しむ暮れんと欲する天、萬乘の旌旗何れの處に在る、平臺の賓客誰か憐む有らん、

【句釋】梁苑は漢代梁の孝王の故蹟なり、梁は地名、春秋の世は宋、漢代は梁、即ち睢陽、現今は河南省歸德府なり、梁王は漢の第四主文帝の二子、梁に封せられ王瞻陽城を廣むること七十里、大に宮室を修し、平臺を連續すること四十餘里、苑囿の樂を好み、西苑方二百里、兔園を築き、池を設け、宮人と其の中に釣り、王又文辭を好み、司馬相如、鄒陽、枚乘、羊勝、公孫危等を延引して以て詩を賦し文を草し、樂を爲す、此の詩其の蹟を弔す、苑と園と同義に用ふる場合もあるが、田園の語ありて、田苑の語なきを見れば、別義とするが當然なり、詩は平仄に依つて用ふ。秋竹、兔

園の一名を修竹苑と言ふ、秋の字は作者が付せしなり。古時煙、今看る所の煙は即ち古時の煙、物
 在人亡の嘆を含む。城外は古の睢陽城外を言ふ。風悲、吾が主觀が客觀に移れば風も亦悲しむ事
 が知れる、詩人以外に風悲の味を知る者は無し。欲暮天、日暮蕭條の景色は殊に悲痛を増す。萬乘、
 乗の字、平仄兩用、佛教の一乘二乘、小乘大乘皆平用にして、天子萬乘は仄用なり、他動詞、自
 動詞の區別なるにもあらず、唐賢の用法此の如し、後世以て準據とす、孝王は萬乘の字用ひ難けれ
 ども、其の母の竇太后が孝王を愛するの餘、帝に乞うて出入總て天子の儀式を用ひしと云ふ。旌旗、
 出入に護衛の旌旗殆ど天子と同様なり、其の天子と同様の盛儀今は何處在、今日は昔年の盛儀無し、
 唯、暮煙蕭條、舉目淒涼なり。平臺は修竹苑の異名、水經注に、睢陽城東に臺あり、寬廣、而し
 て甚だ極高ならず、俗之を平臺と謂ふ、梁王、鄒枚司馬相如の徒と遊を其の上に極む、「一統志」に
 依れば、平臺二あり、一は開封に在り、古列仙の吹臺、漢の梁孝王武、増築して今の名に易ふ、一
 は歸德に在り、舊傳に亦孝王築く所と、開封の方を以て正とす。賓客、是れ陽には鄒枚や司馬相如
 等の當時の賓客を指し、陰には作者自身を比す。有誰憐、梁王の没後彼等文人は亦誰か其の才を憐
 む者ぞ、己も天下の才人、古の司馬相如にも比すべし、而も梁王の如き憐才の人今有ること亡し、
 終に憾軻に終る。

【評論】 此の篇、字法句法、渾成穩深にして毫も拘束牽縛の態なし。鍾伯敬曰く、古時煙、欲暮天、

何處在、有誰憐、懷古の深情を曲盡すと。

芙蓉樓送辛漸

寒雨連江夜入吳。平明送客楚山孤。洛陽親友如相問。一片冰心在玉壺。
 寒雨江に連りて夜吳に入る、平明客を送りて楚山孤なり、洛陽の親友如相問は、
 問はゞ、一片の氷心玉壺に在り、

【句釋】 芙蓉樓は江蘇省鎮江府城上西北の隅に在る、客を送り、宴を張る處とす。辛漸は未詳。寒
 雨は春秋冬の三季用ふるが、今は秋雨なり。連江は一本連天に作る、天の方、景は大なるが、趣致
 としては江を可とす、連江雨色暝暝たり。夜入吳、吳を一本湖に作る、漁洋の「廣唐賢三昧集」是
 れに従ふ、吳に従ふ本多し。吳吳山曰く、入吳は當に是れ雨を言ふなるべし。王堯衢曰く時に調せ
 られ、吳に入るを以て雨を冒し夜行く、而して連江皆雨色なり。二家意見大底同じ。我邦の瑞公曰
 く、吳説誤る、吳の字が、すまぬ故じゆつ無き解を設けたるなり、是れ少伯時に鎮江吳地に在り、
 入吳と言ふ可からず、想ふに此の時に當りて暫く他處に往き、其の還り來るの時、輒ち辛を送る爲
 に夜中直ちに此處に來る、故に入吳と云ふか、然らずんば吳字穩かならず。又曰く天は江に及ばず、
 湖は吳に及ばず、入湖は行きつまりて甚だ惡し。此の瑞公の説を余も昔破したるが今考ふるに甚だ

善し、雨が湖に入ると言はんより、人が吳に入ると見る方を穩當とす、以て承句の意が出づるなり。平明は平旦明發、昨夜吳に入りし時は雨暝なりしが今旦は霽たるなり。送客、辛漸は洛陽を指して行く之を送る。楚山孤、辛漸が洛陽を指して赴くには、必ず古の楚國を經過する、其の楚國の山が芙蓉樓上より大江の北に當り孤然として見ゆ。洛陽は歴代の天子が都を置きし處、春秋の世は周、周末漢楚分争間の時は河南王が都とし、三國の時は魏が領し、隋末には鄭の王世充が都とし、繁華と便利とを并有して居る、今日の河南省河南府是れなり、長安を西都、洛陽を東都と稱せし事あり、即ち昌齡が生地とす。親友、昌齡が親しき故友を云ふ。如は若なり。相問、吾が謫處に在ての起居動靜を問ふ者あらば、君は爲めに通告して呉れ玉へ。一片は一箇の意。氷心、氷の如く澄清なる心を云ふ。在玉壺、既に澄清なる心、之を玉壺に入る、清と清と合す、今昌齡は、財政は豊富にはあらざるも、氷心は廉潔、聊も志操を汚す様な事は爲さず、能く此の事を傳へて呉れよと依頼する。

【評論】 此の篇、辛漸が行に就いて辛漸の事を叙せず、唯親友に傳言を依頼する、亦是人を送る一法とす、雕飾を假らざる所に會心の妙あり、晚唐吳融の詩に、五陵の年少如相問はゞ、阿對泉頭の一布衣は、此の詩を粉本として來るもの、而かも及ばざること三十里。

送薛大赴安陸

津頭雲雨暗湘山。遷客離憂楚地顔。遙送扁舟安陸郡。天邊何處穆陵關。
津頭の雲雨湘山暗く、遷客の離憂楚地の顔、遙に扁舟を送る安陸郡、天邊何處穆陵關の處か穆陵關。

【句釋】 薛は姓。大は一の字の代名詞、日本で言へば長男とか、太郎とか云ふが如し。安陸は漢代は縣、江夏郡に屬し、唐代は安州安陸郡、都護府、現今は湖北省德安府安陸縣なり。津頭は水邊、コワタシバを云ふ。雲雨暗、雲は濛濛、雨は暝暝。湘山は前にも屢ば辨じた如く、洞庭湖中の君山なり、「水經注」に、是の山、湘君の遊處する所、故に君山と曰ふ、秦の始皇、風に此に遭ふ、而して其の故を問ふ、博士曰く、湘君出入する時は風多しと。遷客は薛大を云ふ、暗に屈原が楚王に放逐せられし意を含む。離憂は別愁なり、遷客は遊客と異なるが故に、別愁が一段と強し。楚地の顔、今日別れる處は吳地なるが、明日行く先は楚地なり、是を以て最早、吳地の顔色は無し、楚地の顔色を爲して居る、屈原が志を展ぶる能はず、楚澤畔に行吟して顔色憔悴せる故事を含ませ、薛大の失意に同情を寄するなり。遙送は薛大の遠行を送る、共に行くにはあらず。扁舟は小舟なり。安陸郡は前説の如し。天邊は遠方を意味する場合と、高處を意味する場合とある、今は遠方と見る

べし、高處と見し瑞公の説は地理を考へざる失なり。何處、「ドコラデアラウ」と云ふ氣味。穆陵關は、「左傳」公四年條下に、齊桓公曰く、我が先君に履を賜うて南穆陵に到る、注に曰く、今の淮南に故の穆陵關あり。蔣春甫曰く、穆陵關青州太峴山上に在り。李兆洛曰く穆陵金時代縣山東路益都府、今山東青州府臨朐縣南と、「類腋輯覽」に、穆陵は山東省青州府臨朐縣大峴山上、左傳管仲曰く我が先君に履を賜ふ、南穆陵に到る、即ち是れ、顧景范の「讀史方輿紀要」縣東南北五里に在り、道徑危惡一に破車峴と名く、宋武帝南燕を伐つ道此を經、穆陵關其上に在りと。明の吳吳山は淮南説を信するが故に蔣春甫を破するが、恐くは、「索隱」の説は誤謬にて青州大峴山の説が眞ならん、淮南の地は今の江西省なるが故、山東省の青州とは道程大に懸隔す、郎士元の詩にも、穆陵關上秋風起、安陸城邊遠行士とあるに依つても知らる、安陸と穆陵とは接近せると思ふ者あらん、安陸は湖北に屬し、山東とは其の差が大なり、天邊何處と字を下すに依つて、地理上の關係は無くとも妨げなし、例へば我邦人が中山道中に於て天邊何處玉芙蓉と作りしとて別に妨げ無きと同様なり。

【評論】此の篇、起句の湘山も次句の楚地も三句の安陸も皆湖北に屬し、結句に至り獨山東の穆陵を出す、但し唐突之を出すにあらず、天邊の二字を以て之が目標として居る、此の詩世に流布してより一千年、一人も思此に至る者無し、余今其の地理を示して詩の精巧絶倫なるを知らしむ。

送別魏二

醉別江樓橘柚香。江風引雨入船涼。憶君遙在湘山月。愁聽清猿夢裏長。
醉うて江樓に別れて橘柚香ばし、江風雨を引いて船に入りて涼し、君を憶ひ遙かに湘山の月に在りて、愁へ聽かん清猿夢裏に長きを、

【句釋】魏二は和刻本多く魏三に作る、「本集」「廣唐賢三昧集」「古唐詩合解」共に魏二に作る。送別、送る者も旅に在る、故に此の二字を用ふ。醉別、人を送るに必ず酒を以てす、行を送るを祖餞と曰ふ、祖は行を送るの祭、餞は因つて饗飲するなり、黃帝の子壘祖、遠行を好み、道に死す、後人以て行神と爲す。江樓、江邊は樓を構ふる第一義諦なり、樓は高層華麗なるも場處惡しければ、登樓の價値無し、王と魏と此の江樓にて醉を極む。橘柚香、正に是れ深秋の景物、橘と柚とは同一物、橘は和名「タチバナ」形小、柚は和名「オニタチバナ」樹は刺有り、冬凋まず、花は白く、子は黄、橙「ダイダイ」に比すれば味も香も非常に勝れる。江風引雨、江上の長風が雨を吹きかけるを云ふ。入船涼、船に入る秋涼、特に好し。憶君、是れ別後の事を言ふ、憶の意味は下の十三字へ係る。遙在湘山月、魏と今別れ去て、道湘山に到る頃、舟を維ぎて定めし月に對する事ならん、湘山は一本瀟湘に作る、元來瀟と湘とは別下瀟水是源を道州と廣東省の境より發し、湘水是廣

西省の全州より發し、而して永州に至り、兩水が合す、其の兩水合したる處を瀟湘と稱す、是に於て洞庭湖に入る、湘山にて妨げ無き所以。愁聽、月に對するのみにても流落の身は已に凄愴なり、沉んや猿聲を聽きては一層愁を増す。清猿、猿の「キツキツ」と啼く聲は一種の哀調をもつて居る。夢裏長、起坐して之を聽くに堪へず、因つて眠に入る、眠に入る後も更に之を夢裏に聽く、離索の感甚だし。

【評論】此の篇、「全唐詩」本に依れば、送別の別字は無し、別の存有るとせば、王が旅行に際し、魏二に遺したるものならん、憶君の字が多少疑となる、想君なれば可なるが、憶君とあるからには王が舟湘山に到る頃、君を回憶すればとなりて義理明白なり。

盧溪別人

武陵溪口駐扁舟。溪水隨君向北流。行到荆門上三峽。莫將孤月對猿愁。武陵溪口扁舟を駐めんとすれば、溪水君に隨つて北に向つて流る、行いて荆門に到つて三峽に上れば、孤月を將て猿愁に對する莫からんや、

【句釋】盧溪は本水の名、唐代は縣に名く、江南道辰州府、今日は湖南省辰州府盧溪縣なり。別人、自も征途に就き、人も征途なり、別を一本主に作る、漁洋の「廣唐賢三昧集」之に従ふ、疑ふべ

し。武陵は盧溪と同一場處、武陵に五溪あり、盧溪は其の一。溪口駐扁舟、駐は留、扁は孤。溪水、武陵は水源武山に在りて、流れて沅水即ち今の盧溪に入る。隨君向北流、盧溪より北向すれば則ち荆州、君が舟を駐めんと欲するも而かも駐むる能はず。行到荆門、荆門は縣名、古は山名、安陸府の當陽縣が即ち古の荆門縣なり。上三峽、江水愈よ急、愈よ上る、三峽は西陵峽と、歸郷峽と巫峽となり。莫將孤月、莫は「ナカラシヤ」と疑問の意、將は與の意味、定んで眼に月を見、耳に猿を聽き新愁を引起するならん。對猿愁、三峽は啼猿の尤も愁絶なる處、客中之を聽く愁を生ずる必せり、然りと雖も之を聽かざる事は能ふまじとなり。

【評論】此の篇、諸家の選本大底は採録す。蔣春甫曰く、莫將の二字を下して其の思愈よ遠し。甚だ確評とす。

重別李評事

莫道秋江離別難。舟船明日是長安。吳姬緩舞留君醉。隨意青楓白露寒。道ふこと莫れ秋江離別難と、舟船明日是れ長安、吳姬緩舞君を留めて醉はしむ、隨意なれ青楓白露の寒さ。

【句釋】重別は二回別れる事なり、「訓解」云云大に誤る。李は未詳。評事は參軍なり。莫道、是れ

禁止の語、道と言と同義に用ふるは、道は能く物を通ずるに依つてならん。秋江は離別の場處。離別難は行路難と同讀法を爲す、「楚辭」に出づ、別を悲しむの謂なり。舟船、同一物を二字重ぬ、「魏碣石篇」の流澌浮漂、舟船行難の語に據る。明日は迅速に至るを意味して云ふ、實に明日至るにはあらず。是長安、明日にも至る長安なり、豈行路難ならん。吳姬は吳國の美人との意味、吳は國名で、姬は周の姓。緩舞、緩歌慢舞、去者の心急なるに馳走するが爲め、特に緩く歌ひ慢く舞ふ。留君醉、君を留めて醉はしむるは吾が愛慕の切なる故なり。隨意は一任なり、俗語の勝手にせよと云ふこと。青楓白露寒、極醉以て權を盡し、勝手氣儘に吾も爲す、白露が青楓を侵して夜氣の寒きも亦勝手なれとの意、季節は秋八月頃ならん。

【評論】此の篇、龍標の作として上乘の部に屬するものならざるも、語淺く情深く、絶句として完好なるは、亦諸家の及ぶ所にあらず。

少年行

王維

出身仕漢羽林郎。初隨驃騎戰漁陽。孰知不向邊庭苦。縱死猶聞俠骨香。出身漢に仕ふ羽林郎、初めて驃騎に隨つて漁陽に戰ふ、孰か知らん邊庭に向つて苦しまざるも、縱死して猶ほ俠骨の香しきを聞かんとは、

【句釋】少年行は前に辨せり。出身は初めて身を宦に致すなり。仕漢、漢朝の臣と爲る。羽林郎、漢の武帝の時、建章營騎を置く、後改めて羽林騎と名く、宿衛侍從を掌る、常に六郡の良家を選んで之を補す、即ち金吾侍衛の臣なり。初隨、部下と爲る。驃騎、元狩二年の春、冠軍侯去病を以て驃騎將軍と爲す、萬騎に將として隴西に出でて功あり、二千石を益封すと。戰漁陽、秦代漁陽郡を置く、幽州に屬す、諸説古の薊州とす、清の顧炎武云ふ、薊は漁陽の西に在り、今人漁陽を以て薊と爲す、其の本を忘る。孰知は、誰か知らんなり、不向邊庭苦、人の名譽として稱讚を博するは邊庭に向つて彼の班超の如く辛苦して大功を樹立するに在り、然るに此の少年は、此の如き苦を未だ嘗めざるも。縱死は、如何なる意味を帶ぶるや、瑞公は「ヨシヤマタ、ウチジニヲナストモ」と解す、非常に誤る、「ウチジニ」にはあらず、閭巷に縱死すとも意なり、邊庭即ち野蠻の地に戰死をせず、閭巷の間に徒死すとも。猶聞は死後人が名譽を歌ふ。俠骨香、少年は戰場に向はざるも、閭巷を以て戰場と心得て居る者なり、此れ身は朽つるも名は決して朽ちず、俠客としての名、必ず身後に傳ふべしとの意なり。

【評論】此の篇、古詩體を以て製し、尋常全體の平仄法に據らず。李太白が曰く「縱死して俠骨香ばし」と、結句猶聞の二字を加へしのみ、暗合此に至りしならん、朝川は他人の句を拾ふ人にあらず、少年の俠を稱して全く遺恨無し。

九月九日憶山中兄弟

獨在異鄉爲異客。每逢佳節倍思親。遙知兄弟登高處。遍插茱萸少一人。
獨異鄉に在りて異客と爲る、佳節に逢ふ毎に倍す親を思ふ、遙に知る兄弟高
きに登る處、遍く茱萸を挿んで一人を少くらん、

【句釋】 九月九日は重陽前に辨せり。憶山中兄弟、中の字は東ならん、山東の太原は右丞の郷里なり。從兄弟を指す、右丞に眞の兄弟無し。獨在は右丞自身。異郷は他郷。爲異客、異は同の反對、且重ねて用ふ、疊字法とす。每逢佳節、普通の日は左程に郷思は起らざるも、上巳とか、端五とか、七夕とか、中秋とか、重陽とか、同族相集まりて是の日を賞する節に逢へば、倍は一倍なり。思親、親族を思ふ情が強く起る。遙知、遠方の異郷から知る。兄弟登高處、重陽は必ず山に登りて菊花酒を飲む、之を登高會と謂ひ、又泛菊會とも謂ふ。遍は各自なり。挿は刺し入れるなり、頭髮に挿む。茱萸、九月九日を上九と稱す、茱萸此の日に到りて、氣烈く色赤し、其の房を折りて頭に挿む、以て惡氣を辟くと云ふ、漢代より之れ有り。少一人の字は史記平原君傳に出づ、少は缺なり、右丞一人異郷に在りて登高を共にせざるなり。

【評論】 此の篇、右丞十七歳の時の作とす、至情言外に藹然、人をして孝友の篤きに泣かしむ、起

與盧員外象過崔處士興宗林亭

綠樹重陰蓋四鄰。青苔日厚自無塵。科頭箕踞長松下。白眼看他世上人。
綠樹の重陰四鄰を蓋ふ、青苔日に厚うして自から塵無し、科頭に箕踞す長松
の下、白眼にして看他世上の人、

【句釋】 盧は姓、員外は官名。崔は姓、處士は未だ嘗て仕へざる人の稱、女の未だ嫁せざるを處女と曰ふが如し。興宗は名。林亭は林中の孤亭。綠樹重陰、正に是れ仲夏の景。蓋は蓋世なぞと熟語して世を「フタニスル」自分より上に物無きなり、今は四鄰、五家をおほうて樹陰が密なるを謂ふ。青苔日厚、庭の青苔が日に濃厚と爲るは人の來往が劇しからざればなり。自は自然。無塵、苔が清淨にして一塵一埃も無し。科頭は散髪を謂ふ、冠巾を具せざるを言ふ、貴賤品を異にするも、冠巾を具するは一樣の禮式とす、處士は世俗を眼中に置かず。箕踞、兩足を伸べ出して其の形箕の如きを言ふ、「論語」に原壤なる者躑躅して孔子に叩かれし事あり、躑躅は野人の態度、無禮なればなり、箕踞は即ち躑躅と同じ。長松下、崔が原壤の態度を學んで長松の下に箕踞するは何の爲めぞ。白眼看他世上人、愚俗は徒らに外面の禮讓を事として、聊かも雅致を存せず、此れ等の徒輩を世上人と

言ふ、コンナ下等ノ人間は白眼即ち「イヤナ目付キ」で看る、俗に言ふ胸糞悪く思ふに依てなり、「他ノ世上ノ人ヲ看ル」と訓ますは俗讀なり、「看他世上ノ人」と訓むべし、他の字は「アノ様ナモノ」との意、晋の阮籍と魯の原壤とを以て崔處士に比するなり。

【評論】此の篇、崔を訪問せし時の實事を賦せしならん。顧華玉曰く亦自から睥睨、冲澹ならざる處あるも、句自から清雅。譚元春曰く一世を可とせざる態あり、右丞の氣骨、崔と共に此の中に在り。館柳灣が目白不動に謁する時、「曾テ摩詰詩中ニ於テ見ル、白眼ニ看他世上ノ人」一笑を發すべし。

送韋評事

欲逐將軍取右賢。沙場走馬向居延。遙知漢使蕭關外。愁見孤成落日邊。將軍を逐うて右賢を取らんと欲して、沙場に馬を走らして居延に向ふ、遙かに知る漢使蕭關の外、愁へ見ん孤城落日の邊。

【句釋】韋は姓。評事は官名、從軍して邊地に赴くを送るなり。欲逐將軍、逐の字は逐客なぞと意味は反對なり、逐客は放逐さるゝなるが、今の欲逐は將軍を放逐するにはあらず、將軍に韋が評事即ち屬官の資格を以て追尾して行く事なり、將軍は何人なるを詳にせず。取右賢、匈奴に右賢王と左賢王とあり、居延の地、右賢の部落に近し、故に右賢と曰ふ、「史記」の衛青傳に、元朔五年の春、漢、車騎將軍青をして三萬騎に將として高闕より出でしむ、匈奴右賢王、衛青等が兵に當る、以爲らく漢兵此に至る能はずと、飲んで醉ふ、漢兵、夜之を圍み、右賢王驚き逃る、漢の輕騎校尉郭成等逐ふこと數百里及ばず、右賢の裨王十餘人を得と。取の字は王を生禽すること、其の土地とを合して奪はんとの意なり。沙場は沙漠。走馬、功名に切なるを見はす。向居延、居延は漢江縣張掖郡、今日は甘肅甘州府張掖縣東北一千五百里と稱す、今其の地分明ならず、祈連山脈に沿うて棲息する土族ならん。遙知、韋が去つて後を言ふなれば、漢使は韋を言ふ。蕭關は上郡の北に屬す。外なれば居延は蕭關外に在るなり。愁見は之を望んで愁を生ずるを云ふ。孤城落日邊、居延が孤城落日の有様と言ふにはあらず、征戍の人居る所の城、今方に夕陽暮景に向ひ、其の景色の蕭條慘澹なるを云ふ、韋が右賢王を生擒せん志を以て居延に出發するも、蠻土の蕭條索寞の景を見ては、豪懷も時に愁懷と變ずる事あらん。

送沈子福之江南

楊柳渡頭行客稀。罌師盪槳向臨圻。唯有相思似春色。江南江北送君歸。

【評論】此の篇、蔣春甫の評に、兩種の情思を結んで一堆と做す、一二封侯の志、三四遠征の悲。

楊柳渡頭行客稀なり、罌師漿を盪して圻に臨む向す、唯相思の春色に似る有り、江南江北君が歸るを送る、

【句釋】 沈は姓。子福は字、之は一本歸に作る、歸が正ならん。江南は吳楚の地、江水の南に在れば之を江南と謂ふ。楊柳渡頭、江岸に沿うて見る所の景。行客稀、字の如く、寂寥たる状なり。罌師は舟夫を云ふ。盪漿、カヂを振盪して。向臨圻、臨圻ニ向フ」と和訓せる本多し、典公は「圻ニ臨ム向ス」と訓を付す、甚だ可し、圻は岸の曲る頭を云ふの字なり、舟夫が臨圻の處に於て沈を載せて渡る、此れ相別る、地を言ふ、未だ水中にはあらず。唯有相思似春色、行客は稀なるも、唯我が別を惜む情の春色、到る處に滿つる如くなるが有る。江南江北送君歸、典公は「君ヲ送リテ其ノ歸ニ及ブヲ謂フ」と解釋するが是は臆斷に過ぐ、送レ君歸と訓するなぞ其の例の無き事なり、送ニ君歸」と訓して普通の例に隨ふべし。

【評論】 此の篇、一景一情、景好と雖も、情傷むべし、淡に似て實に濃か、疎に似て實に密、朝川にあらざるより能はざる伎倆を見る、蔣春甫曰く相送るの情、春色の之く所に隨ふ、何ぞ其れ濃至なる。東坡曰く王維詩中に畫あり、此の篇亦以て畫趣を存す。

春思

賈至

草色青青柳色黃、桃花歷亂李花香、東風不爲吹愁去、春日偏能惹恨長、
草色青青として柳色黃なり、桃花歷亂して李花香ばし、東風爲に愁を吹き去らず、春日偏に能く恨を惹きて長し、

【句釋】 春思は古の樂府題、多く閨怨に屬す、今は女子に關せず、詩人、春に就いて思を叙するのみ。草色青青柳色黃、草の青と柳の黄と其の異なるは何ぞ、青は東方の色、黄は中央の色、青よりして黄に變ず、黄より青に變せず、草弱くして、柳は強けたる事と知るべし。桃花は紅。歷亂は花の飛ぶ形容。李花は「スモモ」なり。香、花氣の香を云ふ、青黄赤白の四色を出す。東風不爲吹愁去、我が爲に愁を吹き去らざるを言ふ、春色を見て何の爲に愁ふ、賈至が謫居中なれば、桃花も李花も我を娛しましむる具とはならず。春日偏能惹恨長、謫居して寂寞の境、春を傷むの情生じ、春日長きが故に亦恨も亦長し、無情の春日、還て能く我が恨をして之を惹きて長からしむるなり。【評論】 此の篇、一二景を叙し、三四情を叙す、蔣春甫曰く去らざるが故に惹く、句法字法皆妙なり。明人惹の字に就いて無情と有情を説く、信するに足らざるなり。

其二

紅粉當爐弱柳垂、金花臘酒醉醺醺、笙歌日暮能留客、醉殺長安輕薄兒。

紅粉壚に當つて弱柳垂る、金花の臘酒醪醪を解く、笙歌日暮に能く客を留む、
醉殺す長安の輕薄兒、

【句釋】紅粉は料理店の給仕女が靚粧して坐する状を言ふ。當壚、當は正面に坐して居る、壚は酒甕カメを置く臺なり、形、鍛壚の如きを以て云ふ、史記に、文君名女の當壚は有名なる話とす。弱柳垂、俗に「シダレヤナギ」輒ち蜀柳を弱柳と稱す、酒家の景状を言ふ、酒家、料理店の前には柳樹が植ゑてある。金花は酒色の奇麗なるを言ふ。臘酒、臘月は俗に云ふ寒中、此の寒中に醸造せし酒。解は俗に酒樽の口を開く事なり、解は開なり。醪醪は、ビール麥酒を云ふ、唐代朝廷より宰臣に醪醪を賜ふ、醪醪と稱する花あり、其の花に似たる色なるを以て酒に名く。笙歌は料理店の女共が客を遇する爲め之を奏す。日暮能留客、愉快に遊樂せしむ、客何ぞ歸るを欲せん、日暮るるを知らず。醉殺は俗語の酔ひ潰すと云ふ事。長安輕薄兒、都會のツマラン奴と云ふ意味、物質より外、學術も倫理も知らぬ徒輩を輕薄兒と云ふ、「薄ッペラノ人間」と解して可し。

【評論】此の篇、恰かも今日の成金輩の爲め詠するかの感がある、「春思」の題目を借り、長安游蕩兒の狀態を叙し、以て己が不平の一端を露はす。鍾伯敬曰く關合の妙、大に人思を費す。

西亭春望

日長風暖柳青青、北雁歸飛入宵冥。岳陽樓上聞吹笛、能使春心滿洞庭。
日長く風暖にして柳青青、北雁歸飛して宵冥に入る、岳陽樓上吹笛を聞く、
能く春心をして洞庭に満たしむ、

【句釋】西亭春望、瑞公曰く「西亭ハ西ニ在ルノ亭」何に依つて言ふやを知らず。日長風暖、二三月の時節。柳青青、地上の景。北雁は北向の雁、瑞公の雁本北に住する鳥、故に曰ふとは、鑿に過ぐ。歸飛入宵冥、遙かに空中に入つて其の影の遠くなるを云ふ、宵冥、宵冥、皆同じ「老子」に窈兮冥兮の語あり、道の玄妙見難きを言ふ、今の句は太虚を言ふ。岳陽城は即ち岳陽樓なり。上聞吹笛、城上ニ吹笛を聞くにあらす、城上ヨリノ吹笛を聞く、聞く所の人ハ西亭に在り。能使春心、春に感ずるの心を春心と云ふ。春心春情は別の意に用ふる事多し、混ざる勿れ。滿洞庭、春に感ずる我が心が洞庭湖に滿つる程に廣大なりとの意。

【評論】此の篇、賈幼鄰が楚中に謫居して作りしもの、雁聲を聞くに已に春愁を生ず、況んや又吹笛を聞くに於てをや、句の穩妥は前三句に在り、句の巧緻は結句に在り、詩法は拗體を以て出せり。

初至巴陵與李十二白同泛洞庭湖

楓岸紛紛落葉多。洞庭秋水晚來波。乘興輕舟無近遠。白雲明月弔湘娥。
楓岸紛紛落葉多し、洞庭秋水晚來波たつ、興に乗じて輕舟近遠無し、白雲明
月湘娥を弔す、

【句釋】 初至巴陵、岳州府を云ふ。李十二白は李白を云ふ。同泛洞庭湖、太白の詩出前に依れば、
賈至と白の族叔暉と三人なり、暉は記すに足らずとして題に入れざりしものか。楓岸、吳楚の地、
楓樹殊に多し。紛紛は散亂の形容語。落葉多、正に是れ秋九月なり。洞庭秋水晚來波、「莊子」に「秋
水篇」あり、「楚辭」に「洞庭波」あり、洞庭の二字を上に波を下に、拆字法を用ひしもの。乘興は
晋の王子猷が語、興に乗じて行き、興盡きて返る。輕舟無近遠、近遠を論ずる間は、興に非ず、興
湧かば何ぞ近遠を口にせん。白雲明月、白雲を看、明月を指して。弔湘娥、即ち湘君を弔ふ、湘妃
を弔するの情は在り、興に乗ずるは自から之と別、興に乗ずるが故に湘娥を弔すと解する莫れ。
【評論】 此の篇、太白と同じく容易にして成る如く、而かも細心、太白が不知何處と歌ひたるを
以て白雲明月と下す、和詩の妙、是に於て見る可し、諸家此の詩を評する者、大底白の案を翻すと
あるに一致せり。

送李侍郎赴常州

雪晴雲散北風寒。楚水吳山道路難。今日送君須盡醉。明朝相憶路漫漫。
雪晴れ雲散じて北風寒し、楚水吳山道路難し、今日君を送る須く醉を盡くす
べし、明朝相憶ふとも路漫漫、

【句釋】 李は姓。侍郎は官名、尙書郎に屬す、字は暉、白の族叔なり。常州は晉陵郡、江南道に屬
す。雪晴雲散北風寒、雲後の晴景を言ふ。楚水吳山、李が行路を云ふ。道路難、北風の寒に依つて
行人殊に道路を難しと爲す。今日送君須盡醉、俗に云ふ十二分に權を盡さんとなり。明朝、纔かに
分手すれば。相憶、雙方にて憶ひ出すが故に相の字活きる。路漫漫は遠方を意味す。
【評論】 此の篇、胡濟鼎の評を以て注脚とすべし、曰く、後の兩句を以て之を論ずれば、今日君を
送つて醉はざるべからず、明朝相憶ふとも路漫漫を以ての故なり、四句を總べて之を論ずれば、雪
晴雲散北風寒、君を送り醉を盡すべき所以、楚水吳山道路難し、相望んで路漫漫なる所以、橫堅錯
綜、秩然として亂れず、蓋規矩法度の作。

岳陽樓重宴別王八員外貶長沙

江路東連千里潮。青雲北望紫微遙。莫道巴陵湖水闊。長沙南畔更蕭條。
江路東に連なる千里の潮、青雲北に望めば紫微遙かなり、道ふ莫れ巴陵湖水

闊しと、長沙南畔更に蕭條たらん、

【句釋】 岳陽樓は前に辨せり。重は再度。宴別は詩宴離別なり。王は姓、八は尊稱、員外は官名、貶長沙、賈至が謫せられて巴陵に在る時、王長沙に貶せられて巴陵を過ぎて之に遇ふ、夜相別を爲す、既にして又岳陽樓に筵を設けて重別すると解すべし。江路は舟路なり。東連、長沙は岳州の東に在り。千里潮、洞庭の水は海潮と通ずるなり。青雲は朝廷を指す、立身出世の事にはあらず。北望、長安は岳州の西北に當る。紫微は天子の宮を譬ふ、天帝の宮、青雲の字に對して甚だ佳。遙、但道里の遠きのみならず、青雲の上の宦途甚だ間隔する意を含む。莫道は禁止の辭。巴陵、至が居る所、岳州の地。湖水闊、巴陵の地、湖水渺茫として、長安の樓臺連綿城市繁華なるに異なるを言ふ。長沙南畔、洞庭湖水の南畔なる長沙と云ふ意、長沙の南畔にはあらず、畔は田界と注する字、都に對して鄙の意を帶ぶ。夏は俗語の「其上」と云ふ意。蕭條は寂寞と同じ、巴陵も蕭條たるを免れざるが、長沙は巴陵以上に邊鄙ならんと云ふ。

【評論】 此の篇、同里の人を送るに依つて情殊に深し、詩眼前の情景を輕輕に叙し、而かも自から人を動かす、初至巴陵の詩と同じく拗體を以て出す。

封大夫破播仙凱歌

岑參

漢將承恩西破戎。捷書先奏未央宮。天子預開麟閣待。祇今誰數貳師功。

漢將承恩西破戎。捷書先奏未央宮。天子預開麟閣待。祇今誰數貳師功。

【句釋】 封大夫は封常清を謂ふ。播仙は未詳なるも、或は言ふ吐蕃の城名ならんと。天寶六載に高仙芝、安西の節度と爲る、封常清を以て判官と爲す、大に吐蕃の勃律王及び其の屬二十餘國を破る、岑參は封が部下に在り、依つて此の詩を作る。凱歌は戰勝を祝するなり、「周禮」に出で、凱は愷即ち樂しむを云ふ。漢將は漢國の大將、今封を言ふ。承恩、大將の任に選ばれたるは即ち是れ恩を承けたるなり。西破戎、西戎を破るなり。捷書先奏、今日の事にて言はゞ戰地より其捷報を電奏するなり。未央宮は漢の高祖が治して居る宮、唐の宮名にては、起句の漢將に切ならず。天子預開麟閣待、其の必ず播仙を破り封が功を樹つるを知りて、宮殿を開き、其の凱歌を奏し來るを待つ。祇今は只今と同じ。誰數貳師功、大宛の城を貳師と名く、此の貳師城を破り功を樹てし者を漢の李廣利將軍とす、依つて廣利の名は人人嘆稱措かざる所なるが、只今からは封が功を嘆稱して廣利が事を言ふ者は無からんとの意なり。

【評論】 此の篇、封大夫を以て李廣利以上に優待する所、嘉州の本心見るべし。鍾伯敬白く預開誰

數の四字何等の氣力。譚元春曰く其の壯にして切なるを取る。

其二

日落轅門鼓角鳴。千羣面縛出蕃城。洗兵魚海雲迎陣。秣馬龍堆月照營。
日落ちて轅門鼓角鳴る、千羣面縛して蕃城を出づ、兵を洗うて魚海雲陣を迎へ、馬に秣して龍堆月營を照す、

【句釋】 日落は將に夜に入らんとす。轅門は軍門なり、軍行車を以て陣と爲し、轅相向へて門と爲す、「穀梁傳」に出づ。鼓角鳴、兩陣の交戦を言ふ。千羣は多數を言ふ。面縛は降將を言ふ、面縛して壁を衝むは降參の禮、手を後に縛し、其の面を見、壁を執ること能はず、故に口を以て之を衝む。出蕃城、吐蕃の軍破れ、將卒等、先を争ひ降を乞ふ。洗兵、周の武王が殷の紂王を伐つ時、大雨、武王曰く天洗兵と、兵は兵器即ち戈や矢の類、血に汚る、天雨を降して之を洗滌する、今は戦罷み水を以て兵器を洗ふを言ふ。魚海は縣名、吐蕃の境とす。雲迎陣、戦勝者が本營に歸る時、雲も亦權迎するが如し。秣馬、穀粟を以て馬に飲ふを云ふ。龍堆は胡地、樓蘭王が所居。月照營、胡兵を平らげ來り甲を脱ぎ、安坐して望む所の景を叙す。

【評論】 此の篇、一二は散句、三四は對句を以て成る、凱旋の氣色を畫き出して觀る如し、雄偉の

作と謂つ可し。

苜蓿烽寄家人

苜蓿烽邊逢立春。胡蘆河上淚沾巾。閨中只是空相憶。不見沙場愁殺人。
苜蓿烽邊立春に逢ふ、胡蘆河上涙巾を沾す、閨中只是れ空しく相憶はん、沙場人を愁殺するを見ず、

【句釋】 苜蓿烽は、「西域記」に、塞上驛亭無し、又山嶺無し、止烽火を以て識と爲す、玉門關外に五烽あり、苜蓿烽其の一なり、嘉州が封常清に從つて西征、玉關を出づ、今凱歌以下の詩、皆西征中の作。寄家人、細君に寄す。逢立春、元日に立春の時もあり、又元日と異なる時もあり、四季各九十日を以て定む、冬盡きたる時は即ち立春なり。胡蘆河は上狭く下廣くして胡蘆「ヘウタ」の形に似たるを以て名く、回波甚だ急、深くして渡るべからず、上に玉門關を置く、即ち西域の襟喉。涙沾巾、節序の變に逢うて感涙巾を沾す。閨中只是空相憶、室家は家に在りて征夫の事を憶はんが、徒らに憶ふのみにて。不見沙場愁殺人、沙場征戦の人の苦は閨中に在りて憶ふ如きものにあらず、困苦甚だしきものあり、見ざるが故に且知らざるなり。

【評論】 此の篇、家に在る者の愁より、外に在る者の愁の更に大なるを示すに在り、支那の婦女や

日本の婦女の狀態は洵に此の詩の如くなり。教子綏曰く實に苦を歷るの語。譚元春曰く讀むに堪へず。

玉關寄長安李主簿

東去長安萬里餘、故人那惜一行書。玉關西望腸堪斷。況復明朝是歲除。

東 長安を去ること萬里餘、故人那ぞ惜む一行の書、玉關西望して腸斷つに堪へたり、況んや復明朝是れ歲除なるをや、

【句釋】玉關は玉門關。李は姓。主簿は官名。縣の簿書を掌る。東去長安、身は東の長安を去つて西の玉關に在り。萬里餘、長安と玉關との實里は三千六百里なり。故人は李を云ふ。那惜一行書、李より音信の無きを恨む意。玉關西望、玉關の西より望むなり。瑞公曰く「玉關ニ於テ西ニ向テ望ム」長安の東を望むが作者の本意なり。腸堪斷、此の事前に辨せり。況復明朝是歲除、玉關に在りて今年も復暮れぬと嘆ず、征戍の人、旅愁常に去らず、況んや歲晩に於てをや。

【評論】此の篇、平易の語を以て、感慨の深きを出す。鍾伯敬曰く凄楚末句に在り、蔣春甫曰く又一意を添ふ、益す復深長。

逢入京使

故園東望路漫漫、雙袖龍鍾淚不乾。馬上相逢無紙筆、憑君傳語報平安。

故園東に望めば路漫漫、雙袖龍鍾として淚乾かず、馬上に相逢うて紙筆無し、君に憑つて傳語して平安を報ぜしむ、

【句釋】逢入京使、長安に返る使者に逢ふ、邊塞に向ふ途中にして逢ふ。故園は長安。東望路漫漫、三千六百里、近しとなさず。雙袖は字の如し。龍鍾は衰弱の形容語、人の衰老流落して自ら振ふ能はざること竹の枝葉の搖曳して自ら禁持する能はざるが如きを言ふ、故に龍鍾を以て竹に名くることあり、今は淚袖を沾ほし、振ひ拂ふ能はず、竹の龍鍾たる如くなるを言ふ。淚不乾、龍鍾を雙袖の上に置いて見る可し、淚乾かすが分明となる。馬上相逢無紙筆、字の如く明白なり。憑君傳語報平安、參は無事で居ると傳言を憑む、此の人より彼の人、甲の人より、乙の人と告げるが是れ傳語なり。

【評論】此の篇、人口に膾炙する久し、他人に於て見ざる句として有名になりしもの。譚元春曰く人人此の事あるも、從來曾て寫出せず、後人蹈襲し得ず、久しかるべき所以。劉會孟曰く辭達と。

積中作

走馬西來欲到天、辭家見月兩回圓。今夜不知何處宿、平沙萬里絕人煙。

馬を走らしめて西來天に到らんと欲す、家を辭して月の兩回圓かなるを見る、今夜知らず何れの處に宿せん、平沙萬里人煙を絶つ、

【句釋】 積中は胡地を云ふ、水中に石あるを磧と曰ふ、沙州磧あり長さ五百里、廣さも五百里。走馬は胡敵に向ふ。西來は西に来る、禪家に祖師西來の語あり。欲到天、高遠の路を意味して云ふ、遠望すれば天低く地に接する如く、行き行き、地盡くるの處に到り、則ち或は是れ正に天の垠なる處にして此の處より登ることを得べきが如く、故に遠到の甚だしきを謂ふ。辭家見月兩回圓、家を辭し去つて二ヶ月三十日を経過せしなり。今夜不知何處宿、積中民家の宿すべき無し。平沙萬里絶人煙、人の在る處煙あり、人の無き處煙無し。

【評論】 此の篇、積中の狀を叙し、語句雄壯、嘉州の面目此等の詩に於て見るべし。鍾伯敬曰く馬上の眞境、未だ嘗て邊に行かざる者、此の苦を知らず。

虢州後亭送李判官使赴晉絳得秋字

西原驛路挂城頭。客散江亭雨未休。君去試看汾水上。白雲猶似漢時秋。

西原の驛落城頭に挂る、客散じて江亭雨未だ休まず、君去つて試に看よ汾水上、白雲は猶漢時の秋に似ん、

【句釋】 虢州は漢の弘農郡河南道なり、今の陝西省。後亭は驛樓の後に在る者。送李判官は未詳。使は朝廷の使者となる。赴晉絳、山西の平陽府春秋の時、晉の故絳とす。西原驛路は、江戸時代の立場と云ふ者が驛路なり。挂は高處に在る驛なればなり。城頭は虢州の府城、山路の驛、知る可し。客散、別を送る人散去する。江亭は後亭、江上に在るを以てなり。雨未休、雨色瞑暝たり。君去試看汾水上、太原より出でて黄河に入る水を汾と云ふ。白雲猶似漢時秋、人事は變ずるも天象は依然たらん、漢の武帝の詩に、「樓船を泛べて汾河を濟る」又「秋風起つて白雲飛ぶ」の句なり、結句此の詩意に依つて、景色舊に仍ることを言ふ。

【評論】 此の篇、李に失意の事あり、之を慰する情あるに似たり。徐而菴曰く、千古を塵視す、胸懷曠然。蔣春甫曰く、日用の事に放倒して意を生ず、猶の字力を用ふ。敖子發曰く、末二句蓋し萬古を洞視するの意を以て之を寛うす、其の盛衰を無窮に相尋ね、榮華轉眼一夢の如くなるが如くならしむ、何ぞ必ず區區の得失を以て中に交戦せんや。

送人還京

匹馬西從天外歸。揚鞭只共鳥爭飛。送君九月交河北。雪裏題詩淚滿衣。

匹馬西天外より歸る、鞭を揚げて只鳥と共に争ひ飛ぶ、君を送る九月交河の

北、雪裏詩を題して涙衣に満つ、

【句釋】 送人還京、邊地に於て、人の長安に還るを送るなり。匹馬は獨行を云ふ。西從天外歸、作者の事にあらず、還る人の事なり、西より東の長安へ歸る、至遠なるを天外と云ふ。揚鞭只共鳥爭飛、一刻も迅速に京に歸還を急ぐ事を叙す、喜び勇むを意味す、歸る者の樂を借りて留まる者の苦を言ふ。送君九月交河北、土魯番の西に交河在り、源を祈連山に發す、唐に交河縣と爲す、長安八千里の外に在り。雪裏題詩、九月は仲秋なり、中秋に已に雪下る、邊塞の苦寒知るべし。淚滿衣、丈夫も亦涙を流さざるを得んや。

【評論】 此の篇、歸人を欣羨して、我が淹留を傷んで作る。譚元春曰く結深意あり。

赴北庭度隴思家

西向輪臺萬里餘。也知鄉信日應疎。隴山鸚鵡能言語。爲報家人數寄書。

西輪臺に向ふ萬里餘、也知る鄉信の日に應に疎なるべきを、隴山の鸚鵡能く言語す、爲に報ぜよ家人數は書を寄せよと、

【句釋】 北庭は唐代、隴右道、今日は此の地名なし、土魯番の境ならん、大都護府を置きし地。度隴、隴山を度る。思家、長安の家を思つて作る。西向輪臺、北庭は即ち輪臺、漢書の注には、車

師國の西北千餘里に在り、今日は天山南路の玉古爾、萬里餘、長安よりの里程を言ふ。也は發語辭と注して又復より非常に輕し。知の字に付して動らくのみ。鄉信日應疎、萬里餘も隔たる、家信は定んで稀ならん。隴山鸚鵡、山海經に、黄山に鳥あり、其の狀鸚鵡に似たり、青羽赤喙、人の舌にして能く言ふ、鸚鵡と名く、隴城此の鳥を出す。能言語、言語すること能ならば、爲報は我が爲めに報せよ。家人數寄書、傳言を鸚鵡に託するは、鳥は翅あり、千里の遠きも、速に到るを得、鸚鵡能言の鳥にして隴山に此の鳥あり、我が依屬する所以此に在り。

【評論】 此の篇、無中に有を生ずる格、嘉州邊地に在るの作、大底家郷を言はざるは無し、肺肝より發する事なるか、或は單に詩として此の語を發するか、殆んど兒女の情に類するものあり、然りと雖も、人情大底此の如きもの、余謂ふ詩としてにあらず、肺肝より出でしものならんと。

酒泉太守席上醉後作

酒泉太守能劍舞。高堂置酒夜擊鼓。胡笳一曲斷人腸。座客相看淚如雨。酒泉の太守能く劍舞す、高堂置酒して夜鼓を撃つ、胡笳一曲人腸を斷つ、座客相看着て涙雨の如し、

【句釋】 酒泉は郡名、漢代始めて置く、今日の甘肅省の肅州なり。太守は知事なり、漢書趙充

國傳に、上、酒泉太守辛賢を拜して破羌將軍と爲す、今の太守は何人なるを知らず。席上醉後作、城下に金泉あり味酒の如し、酒泉郡の名、因てあり、軍中の酒宴。能劍舞、「史記」に、項莊が曰く、軍中以て樂を爲すこと無し、請ふ劍舞を以てせん。高堂置酒、置は設なり、安なり、古代は席の中、中央に帝を置き各自に酌んで飲む、注子巡行は唐以後の事に屬す。夜擊鼓、一人は劍舞し、一人は和して鼓を撃つ、「詩經」に、擊鼓其鏜とあり。胡茄一曲、「晉書」に、城中に胡笳を吹き、胡兵之を聞き、郷思に堪へず、圍を棄てて去る事を前に辨せり。斷人腸、情思の極度を形容して、斷腸と云ふ。座客相看は、互に眼と眼と見合はすなり。涙如雨、悲しみを以て樂しみとす、劇を観て涙を流し、而して以て快樂と爲すの類。

【評論】此の篇、平仄法に依らざる作、全く古詩の法。黄家鼎曰く題に醉後作と云ふ、苟もせざるなり、蓋醉後にして悲涙、何等の苦況、醉中の悲苦、醒人の知る所にあらず。

送劉判官赴磧西

火山五月行人少。看君馬去疾如鳥。都使行營太白西。角聲一動胡天曉。

火山五月行人少。看君馬去疾如鳥。都使行營太白西。角聲一動胡天曉。

【句釋】送劉判官は未詳。磧西は沙漠の西を云ふ、今の甘肅や西藏皆磧西に屬す。火山は劉が通過する處の山、山西省山丹衛城の北に在り、噴火山なり。五月行人少、正に是れ仲夏、亂世にして

而かも邊地、往來人少なし。看君馬去疾如鳥、此の如き寂寞の處、豈遲遅せん、馬に鞭つて、鳥と其の疾きを争ふ。都使は都護府使の行營即ち胡に備へてある戍營。太白西、諸注に陝西省鳳翔府の太白山と爲す、滑稽笑ふ可し、山にはあらず星を言ふ、太白星の西に當る、高遠を意味して言ふ。角聲は笳聲なり。一動胡天曉、劉が著したる時の景を叙す、太白星が未だ影を没せざるの曉天を言ふ。

【評論】此の篇も、前篇と同じく、古體を以て作る、仄韻なるが故に平仄を無視するにはあらず、仄韻を以て作るは、多く古體となせばなり。蔣春甫曰く、又「鞭を揚げ只鳥と共に争ひ飛ぶ」の句を用ふ。葉弘助曰く、只角動天曉と言つて、此を後れ何事と言はず、而して其の意、已に次句の中に伏す、此れ含蓄の法。

山房春事

梁園日暮亂飛鴉。極目蕭條三兩家。庭樹不知人去盡。春來還發舊時花。

梁園日暮亂飛鴉。極目蕭條三兩家。庭樹不知人去盡。春來還發舊時花。

春來還つて發く舊時の花

【句釋】山房春事、山居して春日の景を叙す。梁園は梁の孝王の古蹟。日暮亂飛鴉、梁園人無うして昏鴉、隨意に散亂飛鳴す、孝王の遺蹟荒廢、感慨無きこと能はず。極目は目の見える所。蕭條、暮景倍す寂寥。三兩家、二三の田家存するのみ。庭樹不知、無情の者なれば知らず。人去盡、有情の人、梁王を初め、宮女賓客皆没し去る。春來還、年年春は循環するゆる、還の字を用ふ。舊時花、曾て發きし花と今日發く花とは其の色異ならず。

【評論】此の篇、山房春事と題して、其の實梁王の古蹟を弔するなり、盛唐人の絶句三昧、此等の詩に於て悟入すべし。舒伸言曰く、庭樹の一聯、本嘉州が絶調、家ごとに竊み、戸ごとに攘み、遂に套語と爲る。何等の名評ぞ。

寄孫山人

儲光羲

新林二月孤舟還、水滿清江花滿山。借問故園隱君子、時時來往住人間。
新林二月孤舟還、水是清江に滿ち花は山に滿つ、借問す故園の隱君子、時時來往して人間に住するや、

【句釋】寄は寄呈、又寄示。孫山人は儲と同郷、山東即ち魯國の人。新林は浦の名、應天府の西南

二十里に在り。二月孤舟還、還るのみならず、舟の往還を云ふ。水滿清江、碧水江に渺渺たり。花滿山、紅花山に宛然たり。借問は面示の場合用ひざる語なり、寄示、即ち郵示なればなり。故園隱君子、我が同郷の隱君子、孫山人を稱して言ふ、官に就かざる人、隱君子でも山人でも、共に適稱とす。時時來往住人間、山中に對して城市を稱して人間と言ふ、孫の獨往を稱す、孫登傳に「時時游人間」とあり、姓同じきを以て山人に稱す。

【評論】此の篇、不用意の作に似て、其の實用意周到とす。鍾伯敬曰く、真にして淺。何等の愚評ぞ、妄に詩を作る者、人に寄る詩に君は淵明に似たり、君は謝眺に似たりなどと記す、其の人、姓、陶にもあらず、又謝にもあらず、全く意義無きことを平然と言ふ、今此の結句孫登の故事を以て孫山人に用ふ、唐賢の用意、大底此の如し、獨儲御史にあらざるなり。

贈花卿

杜甫

錦城絲管日紛紛。半入江風半入雲。此曲祇應天上有。人間能得幾回聞。
錦城の絲管日に紛紛、半は江風に入り半は雲に入る、此の曲祇應に天上有るべし、人間能く幾回か聞くを得ん、

【句釋】花卿は敬定、劍南の節度使、蜀を鎮す、頗る天子の禮樂を僭す、杜此を贈り、之を諷す。

錦城、蜀の成都府城を一名、錦管城と云ふ。絲管、絲を絃と爲し、竹を管と爲す、琴や笛の類。日紛紛、日に琴笛の音、騷擾しく宴飲せるを云ふ。半入江風、廣く散ずる。半入雲、高く響く。花卿が僭亂、忌憚する所無く、驕奢なる状。此曲祇應、此の如き音は天上のみにて、人間には無きものと思へり、然るに、今之を聞く。天上有、鈞天之廣樂、天子一人之れ有り、臣子の分にあらず。人間、天上に對して言ふ、側面は普通の人間はと云ふ意味。能得幾回聞、天上に遊び、天子に謁したる場合は聞き得べくも、其の他に在りては聞くを得ざる者なり、正面の解は嘆美したるも、裏面は規諷したるなり。

【評論】此の篇、花卿を諷規する所、老杜の面目躍如たり。胡元瑞は花卿を妓女とす。笑ひつ可し。楊升菴曰く、唐人の樂府、多く詩人の絶句を唱ふ、杜子美の七言絶、百に近し、錦城の妓女、獨其の贈花卿の一首を唱ふ、蓋し花卿蜀に在り、頗る天子の禮樂を僭用す、子美此を作り之を諷す、意言外に在り、最も詩人の旨を得、當時妓女獨此の詩を以て歌に入る、亦識ある哉、子美の詩、諸體皆絶妙なるものあり、獨絶句本解する所無し、而して近世乃ち之に倣うて諸家を廢す、是れ其の眞識冥契、猶ほ唐世妓人の下に在るか。

重贈鄭鍊

鄭子將行罷使臣。囊無一物獻尊親。江山路遠羈離日。裘馬誰爲感激人。
鄭子將に行かんとして使臣を罷む、囊に一物の尊親に獻する無し、江山路遠し羈離の日、裘馬誰か感激の人と爲らん、

【句釋】重は二度なり。鄭鍊は新たに郡縣の官を罷め襄陽に之き親を省するなり。鄭子將行、子は人の美稱、鄭將に旅行せんとす。罷使臣、天子に代り國を巡り政治を見る役を使臣とす、左傳に出づ。囊無一物、其の清廉を敬し、其の貧を憐む。獻尊親、君父に對して用ふる語を尊と云ふ、其の尊き親に獻すべき物なし。江山路遠羈離日、羈は羈と本義異なるが、同一に用ふる場合もあり、旅なり。裘馬は富豪を言ふ、肥馬に乗り輕裘を衣る、論語の語。誰爲感激人、富豪の徒輩が此の如き清廉の士を見て己が濁心を恥ぢて感激し、鄭を佑ける人があるぞ。

【評論】此の篇、鄭に贈るとあるも、鄭を送る詩なり、支那人は一度官に上ると財幣は豊富となるが通常なり、贈賄の多きが爲め、然るに鄭が此の如き貧は、此の賄を受けざる證として明白、杜は之を敬すると同時に、其の貧に同情したるもの。鍾伯敬曰く、忠孝廉潔の語。

奉和嚴武軍城早秋

秋風嫋嫋動高旌。玉帳分弓射虜營。已收滴博雲間戍。欲奪蓬婆雪外城。

秋風嫋嫋として高旗を動かす、玉帳より弓を分つて虜營を射る、已に滴博雲間の成を収めて、蓬婆雪外の城を奪はんと欲す、

【句釋】奉和は上長に對して用ふ。嚴武は吐蕃を征する大將として當狗城を破る、依つて軍城早秋の詩を作る、杜は武が幕中に在り、賦して和す。秋風嫋嫋は、「楚詞」の語、秋風の聲を云ふ、春風習習とは大に異なる。動高旗、天子の旌高き九仞、諸侯は七仞、將軍は之に準ずと、風が此の高旗に吹き當る。玉帳は將軍の帳中を云ふ、「抱朴子」に軍、太乙玉帳の中に在るは攻む可らず、此に本づく。分弓、諸軍士に弓矢を分付する。射虜營、虜の陣營を目標として射さしむ。已收、モハヤ收めてある。滴博は城名、蜀に在り。雲間は城が高處即ち山上に在るより言ふ。成、將士の衛成、彼が成を、我が手に歸せしめたるを言ふ。欲奪、其の上に奪はんと欲する城は何ぞ。蓬婆は吐蕃が城の名。雪外城、蓬婆城に雪外の二字を入る、城は雪山の外に在ると云ふの意味、以て前の雲間と對を取る。

【評論】此の篇、平を以て起り、仄を以て結ぶ、拗體の作とす、嚴武の勇を稱嘆するが主意なり。譚元春曰く、已に收む、奪はんと欲す、説き得て雄偉。

解悶

一辭故國十經秋、每見秋瓜憶故丘。今日南湖采薇蕨、何人爲覓鄭瓜州。

一たび故國を辭して十たび秋を經、秋瓜を見る毎に故丘を憶ふ、今日南湖薇蕨を採る、何人か爲に覓めん鄭瓜州、

【句釋】解悶は心中に結ぶ鬱懷煩悶を撥ひ解くなり、本集十二首あり、此れ其の一。一辭故國十經秋、乾元元年肅宗 戊戌を以て京を出で、大歷元年代宗 丙午を以て夔州に到る、三年戊申正月夔を去つて江陵に到る、秋を經ること正に是れ十度、此の詩夔を去る時の作。每見秋瓜、「詩經」に、七月食瓜とある、甜瓜「マクワウリ」即ち秋瓜なり。憶故丘、秦の邵平、瓜を長安の東門に種う、杜は長安の人、故に秋瓜に感じて故丘を憶ふ。今日南湖、此の南湖は夔州に在る。采薇蕨、瓜を欲して瓜を得ず、「ゼンマイ」の類を採る。何人爲覓、誰か我が爲めに覓めて呉れるぞ。鄭瓜州は、杜自注に、鄭審と、鄭審は時に謫せられて江陵に在り、其の不在中に杜が南湖上の鄭が故宅を過ぎ采薇に依つて其の人を想ひ出し此を賦す、故丘に歸るを得ず、故に嗜む所の秋瓜すら喫する能はず、頼に瓜を以て號と爲す鄭審あるも、此の人、亦江陵に在りて此に在らず、其の瓜は得ざるも、セメテ瓜の號の人とでも談話せばやと思ふ、而かも其の人も無きなり。

【評論】此の篇、題の解悶にて知る、殆んど餅を畫きて饑に充て、梅を望んで渴を止めんと欲する

に似たり、杜詩の俗人に嫌はるゝ所、此の如き屈曲なる詩あるに由る。

書堂飲既夜復邀李尚書下馬月下賦

湖月林風相與清。殘尊下馬復同傾。久拌野鶴如雙髻。遮莫鄰鷄下五更。

湖月林風相與に清し、殘尊馬より下して復同じく傾く、久しく野鶴の雙髻の如くなるを拌す、遮莫あれ鄰鷄五更に下ることを、

【句釋】書堂は學問室、飲は酒宴。既夜、他の賓客と酒を飲み夜に入るを知らざりしなり。復邀李尚書、一度辭去せし李を再び邀ふ。下馬、騎馬にて來るを下して。月下賦、堂中か庭上かは分明ならず。湖月林風、湖を照す月と、林を吹く風と。相與清、相與の二字を明旦と改めた屈復と云ふ人あり、一笑す可し。殘尊、必ず殘尊ならざるも、謙して言ふ。下馬は寛然たらしめん爲め、急急の時馬の上にて飲ましむ。復同傾、二回李と飲むを云ふ。久拌、「揚子方言」に、楚人、凡そ物を揮ひ棄つる之を拌と謂ふ、揮ひ棄て、顧みず、管せざるの意。野鶴如雙髻、雙髻如野鶴とすべきを倒裝句法を用ひたるもの、髻が野鶴の如く亂れて居ること久しきが、棄て置くとの意。遮莫は俗語の勝手にせよと云ふ事、儘教や從教や從他や不管等は悉く意同じ。鄰鷄下五更、夜の將に曙げんとする時刻を五更と云ふ、其の五更に到るまで二人飲み明すも管はんとの意なり。

【評論】此の篇、李尚書の事は一向に叙せず、唯自身の衰老を叙す、人と酒を飲む、亦此の作法有ること知るべし。蔣春甫曰く、二句甚だ當日の意を得たり、第三倒裝の法。譚元春曰く風神骨力俱に奇。黃家鼎曰く鍾情自ら道ふ、氣味宛然。

塞下曲

常建

玉帛朝回望帝鄉。烏孫歸去不稱王。天涯靜處無征戰。兵氣消爲日月光。

玉帛朝より回りて帝郷を望み、烏孫歸り去りて王と稱せず、天涯靜なる處征

戰無く、兵氣消して日月の光と爲る、

【句釋】塞下曲は前卷に辯せり。玉帛、「書經」に五玉三帛とあり、贊と爲し見ゆる所以の者。朝回、烏孫が贊を獻じて回るなり。望帝郷、望は認むなり、帝郷を認定するは心服の證據なり。烏孫歸去、今の伊犁即ち新疆地方を領せし者を烏孫と云ふ、漢の元封中、中土に貢馬し來りしより、江都王建が女を遣り公主と爲し彼に妻はす、哀帝元壽二年に大昆彌來朝せり。不稱王、王と稱せざるにはあらず、唯心服したるなり。天涯は中土より邊疆を指して云ふ。靜處無征戰、一時四海安寧なるを云ふ。兵氣、軍が起れば天象に兵氣が表はれ殺伐となる。消爲日月光、暗雲滅して晴雲出づるの意、朝廷の功成るを言ふ。

【評論】此の篇、盛唐塞下曲として一二を下らざる名篇とす、語語雄偉。譚元春曰く太平頌聖の奇語。

其二

北海陰風動地來。明君祠上望龍堆。鬪體盡是長城卒。日暮沙場飛作灰。
北海の陰風地を動かし來る、明君祠上龍堆を望む、鬪體盡な是れ長城の卒、日暮沙場飛んで灰と作る、

【句釋】北海は匈奴の地、山東青州府の北海郡にはあらず。陰風動地來、風蓬蓬然として大地を振動し來る、明君は昭君の事、昭と言はずして明と言ふは文帝の諱に觸るゝを以て之を避く。祠上、山西の大同府に王昭君が祠ありと。望龍堆、白龍堆を望む、白龍堆は甘肅敦煌郡西關の外に在り。鬪體盡是長城卒、秦は蒙恬をして三十萬に將として北戎狄を逐ひ河南を收め長城を築かしむ、卒は士卒病没の士卒もあらん、戦没の士卒もあらん、多數の鬪體盡な戰爭の爲め没したる者のみなり。日暮沙場飛作灰、灰と作りて飛ぶを言ふ、骨を暴らし灰を揚ぐる者、漢の爲めに盡したる卒ならざるは無し。

【評論】此の篇、前首と斤量相等しく、千古の名篇たるを失はず、兵は凶器の戒を知らざる人君は、意を邊功に急にして多く人命を損するに至る、之を諷する爲め此を作る、今日獨帝の如き者、全く此の諷戒に當る。唐汝詢曰く上篇修文の美を言ふ、此の篇、耀武の非を見る、第三句は望字を承け、第四句は風の字を承く。

送宇文六

花映垂楊漢水清。微風林裏一枝輕。即今江北還如此。愁殺江南離別情。
花は垂楊に映じて漢水清し、微風林裏一枝輕し、即今江北還此の如し、愁殺江南離別の情、

【句釋】宇は姓、文は字、六は尊稱。花映垂楊漢水清、長安を圍繞するの水を漢水とす、方に是れ我邦向島墨陀川の景。微風林裏一枝輕、花の將に飛んと欲する狀。即今江北、楊子江北。還如此、江北ですら此の如く花飛ぶ。愁殺江南離別情、江南花飛んで萬點、人をして愁殺せしむ、江北は別れる地、江南は赴くの地、江南に去つて、江北の事を追懷せらるゝならん。

【評論】此の篇、輕輕に叙し去つて、離憂自から在り、微と一と輕との字、工夫の存する所。鍾伯敬曰く直にして深し。

三日尋李九莊

雨歇楊林東渡頭。永和三日盪輕舟。故人家在桃花岸。直到門前溪水流。
雨は歇む楊林東渡の頭。永和三日輕舟を盪かす。故人家は桃花の岸に在り、
直ちに到る門前溪水の流。

【句釋】 三日、單に三日と言ふは、三月に限る。尋李九莊、李が別莊を訪ふ。雨歇楊林東渡頭、雨後の晴天に興を催し渡頭より乗舟して之を訪はんと欲す。永和三日、晉の王羲之が蘭亭に會して禊事を修するを以て此の會ある初めとす。永和九年の三月三日、上巳、初巳、三巳、重三、三三、共には是の日の稱なり、今は永和の年にはあらず、字を借りしのみ。盪は動かす。輕舟、曲水の故事よりして水游を以て是の日の事とす。故人家、李九が家。在桃花岸、水と桃花は此の令辰に缺くべからざるなり、三月の異名を桃花水と稱するに於てをや。直到門前溪水流、桃花の岸を目標とし、一直線に舟を掉し寄するなり。

【評論】 此の篇、盛唐の面目風格、之を以て代表したるの觀あり。鍾伯敬曰く直直に説き來り、會て翻案せず、只清健を覺ゆ。評し得て善。

九曲詞

高適

鐵騎橫行鐵嶺頭。西看邏迓取封侯。青海只今將飲馬。黃河不用更防秋。

鐵騎橫行す鐵嶺の頭。西邏迓を見て封侯を取らんとす、青海只今將に飲馬せんとす、黃河用ひず更に防秋するを、

【句釋】 九曲詞、天寶中に哥舒翰、吐蕃の洪濟大莫等の城を攻破し、黃河九曲を收む、其の地を以て隴西郡を置く、是に由つて九曲詞を作る。鐵騎、甲冑を著けし乘馬の士。橫行、功を樹てんかなとて自由闊歩するを橫行と言ふ。鐵嶺は盛京省奉天府の鐵嶺にはあらず、盧氏縣の北四十里にして山極めて險隘、古關を此に設く。西看、西方に當つて看る。邏迓は今日西藏の首都たる拉薩是れなり、吐蕃を破り、取封侯、即ち勳一等、金鷄の章を取らんと欲するなり。青海は會て甘肅に屬す、今は西藏なり。只今將飲馬、馬に飲ふ事が青海に出來得れば。黃河不用更防秋、黃河上に於て匈奴を防ぐの要はあらず、青海の方は難く、黃河の方は易きを意味す、匈奴、秋を以て戰爭の時期とす、是を以て防秋と言ふ。

【評論】 此の篇、九曲詞の題に依つて、功を立つるの至難なるを叙す、達夫自身が事を詠じて亦他人へも通ずるなり、雄偉の詩と謂つ可し。

除夜

旅館寒燈獨不眠。客心何事轉凄然。故鄉今夜思千里。霜鬢明朝又一年。
旅館の寒燈獨眠らず、客心何事ぞ轉た凄然、故郷今夜千里を思ふ、霜鬢明朝又一年、

【句釋】 除夜、十二月を除月と言ひ、其の月の盡日を除夜と言ふ。旅館寒燈獨不眠、家居しても眠らざるなり、況んや旅寓に於てや、千感萬慨生ずるなり。客心何事轉凄然、自身で自身を何事ぞと訝る、轉は「イヨイヨ」の意、「ウタタ」と訓するも可、凄然は「サビシキ」なり。故郷今夜思千里、思ふに依つて、上句凄然の字動らく、思はざれば凄然にあらず。霜鬢なるも故郷へは歸る能はず。明朝又一年、客中に於て明年も亦消光するなり。

【評論】 此の篇、自問自答の作法として人口に膾炙する久し。顧華玉曰く、此の篇音律稍中唐に似たり、但四句の中、意態圓足自ら別なり。敖子發曰く、首句固より凄然、後の二句又轉凄然の情を説き出す、客中の除夜、此の詩を誦するを怕る。徐子擴曰く、獨は他人然らず、轉は常に比すれば尤も甚だし、二字詩眼と爲す、胡濟鼎曰く、轉の一字後二句を喚起す、唐の絶句謹嚴一字も亂下せず、此の類見る可し。

塞上聞吹笛

雲淨胡天牧馬還。月明羌笛戍樓間。借問梅花何處落。風吹一夜滿關山。
雲淨うして胡天馬を牧して還る、月明にして羌笛戍樓の間、借問す梅花何れの處にか落つ、風吹いて一夜關山に滿つ、

【句釋】 塞上聞吹笛、題目分明なり。雲淨は晴日を云ふ。胡天牧馬還、我は牧馬して日暮に還る。月明羌笛戍樓間、笛聲の起る處は戍樓の間なり。借問は「キキタキモノヂヤ」の意味。梅花何處落、塞上には梅花は無し、梅花落の笛に依て之を問ふ。風吹一夜滿關山、梅花は落ちて何處に在ると問ふが、落ちて關山に在りと示す、而かも笛聲が風に依つて滿つ、實事と虚事とを合成したるものなり。

【評論】 此の篇、蔣春甫は評して中唐に似たりと言ふ、此の詩、中唐に似たるにあらず、中唐人が此等の詩を學びしなり、釋皎然が塞下曲に、寒塞落梅を見るに因無し、胡人吹いて笛聲に入れ來る、勞勞亭上春將に度るべし、夜夜城南戰うて未だ回らず、此の詩と意も同じ、巧力も相敵すべし。鍾伯敬曰く、滿の字、梅花を言うて雪月聲情皆其の中に在り、我が齋藤拙堂は此の詩を非常に愛誦して、王にあらず、岑にあらず、一種の風味ありと。

別董大

十里黃雲白日曛。北風吹雁雪紛紛。莫愁前路無知己。天下誰人不識君。
十里の黃雲白日曛ず、北風雁を吹いて雪紛紛、愁ふること莫れ前路知己無きを、天下誰人か君を識らざらん、

【句釋】別董大、董大が旅行を送るなり、董大は琵琶を弾ずる人。十里黃雲白日曛、日將に夕ならんと雲色は黄を呈す、送地の景。北風吹雁雪紛紛、正に是れ殘臘の期節。莫愁前路無知己、時節は寒し、知己は無し、旅人何ぞ愁へざらん、愁ふる莫れは之を慰むるなり。天下誰人不識君、面は知らずとも、名は高きゆゑ、到る處で懼迎せらるゝならん。

【評論】此の篇、筆を把つて直ちに賦し構思せざるもの、然れども慷慨悲壯、行者を慰するに足る。

送杜十四之江南

孟浩然

荆吳相接水為鄉。君去春江正淼茫。日暮孤舟何處泊。天涯一望斷人腸。
荆吳相接して水を郷と爲す、君去つて春江正に淼茫、日暮孤舟何れの處に泊せん、天涯一望人腸を斷つ、

【句釋】杜は姓。十四は及第の番號。江南は江北に對す、楊子江を中心とす、今日南方支那、北方

支那とは、此の江を中心とすと見るべし、江蘇、浙江、湖南の地、皆南方に屬す。荆吳、荆は今日の湖北省荊州府、春秋には楚、吳は今日の江蘇省蘇州府。相接水為郷、楚地も吳地も全く水國而かも接続してある。君去は行なり。春江正淼茫、水の廣く流るゝ形容を淼茫と云ふ。日暮孤舟何處泊、泊處の無きにはあらず、何處なるやを知らずと言ふに在り、淼茫の字に對して言ふ、且春水の多き謬ちあらんを憂へるなり。天涯一望斷人腸、其の行を壯んにせず、此の悲語を以て送る、杜に何等か失意の有るならん。

【評論】此の篇、吳江の險を憂へて、以て其の人を送る。蔣春甫曰く、岐路の泣くに勝へず。鍾伯敬曰く、明靜、一點の塵氣無し、蓋し襄陽の至れるものにはあらず。

寄韓鵬

李頎

爲政心閒物自閒。朝看飛鳥暮飛還。寄書河上神明宰。羨爾城頭姑射山。
政を爲す心閒にして物自ら閒なり、朝に看る飛鳥暮に飛び還るを、書を寄す河上神明の宰に、羨む爾が城頭姑射の山、

【句釋】寄は寄呈なり。韓鵬は臨汾縣の令。爲政、政治を執る者、心閒物自閒、閒は大人の事にて忙は小人の事なり、心は主にして物は客なり。朝看飛鳥暮飛還、心の閒なる人にあらざるより、此

の閑事は看ざるなり。寄書河上神明宰、河上は黄河の南岸即ち滄徳二州の北界、鵬が縣令として在
住する地にはあらず、神の如き明德ある宰尹、其の人に書を寄呈する。羨爾城頭姑射山、晉州平陽
郡臨汾縣に姑射山あり、姑射は元來仙山にて神人の居る所、今此の明德ある人此の山に住す、欣羨
せざるを得ず、爾は典公「ソコノ」と譯す「ナンヂ」で宜し「アナタ」の意味を帯ぶる字なり。
【評論】此の篇、徹頭徹尾、鵬の人品を稱して餘事に涉らず。譚元春曰く心閑物自閑、幽人の妙境
爲政の中に寫し入ること夢想にも到らず、羨爾の二字淺からず深からず妙。

九日

崔國輔

江邊楓落菊花黃。少長登高一望郷。九日陶家雖載酒。三年楚客已霑裳。
江邊楓落つて菊花黄なり、少長高きに登りて一に郷を望む、九日陶家酒を載
すと雖も、三年楚客己に裳を霑ほす、

【句釋】九日は單に稱する場合、九月に限る、重九、九九、重陽、皆同じ。江邊楓落、楚江は楓樹
多し、深秋正に落散す。菊花黄、菊は黄色を以て正とす。少長、少年も壯年も、登高一望郷、郷を望む
者は一人なり、高きに登る者は多し、一人は作者を言ふ。九日陶家、淵明は九九の佳辰に遇うて、
菊ありと雖も酒無きを嘆ずる時、刺史王弘酒を送り來る、便ち酌み、酔うて歸る。雖載酒、刺史が

酒を載せて送りしなり。三年楚客已霑裳、陶家も楚客も共に自身を比して云ふ。今日酒ありと雖も
三年も楚客と成り居る身、涙の裳を霑するも、權の以て起る無きを云ふ。

【評論】此の篇、國輔が王鉄が舊親に坐して竟陵の司馬に貶せらるゝ時の作、邀へ飲む者有つて、
此の詩を賦せしなり。鍾伯敬曰く、一字も移易する能はず。

題長安主人壁

張謂

世人結交須黃金。黃金不多交不深。縱令然諾暫相許。終是悠悠行路心。
世人交を結ぶに黄金を須ふ、黄金多からざれば交深からず、縱令ひ然諾して
暫く相許すも、終に是れ悠悠たる行路の心、

【句釋】題長安主人壁、主人は何人なるや未詳、此の篇、世人の薄情に對して、己が落第の不平を
漏らせし詩なり。世人結交、燕の太子、交を荆卿に結ぶと、其の結交は此の人に在り。須黄金「須
ラク黄金ナルベシ」と訓むも、「黄金ヲ須フ」と訓むも、大差無し、眞交は黄金にあらざる事を云ふ。
黄金不多交不深、輕薄の結交皆此に在り、金の有る時はチャラチャラの類なり。縱令は「ヨシンバ」
の俗語に當る。然諾は「ヨシヨシ」と承知すること。暫相許、肝膽相許すにはあらず、黄金に對し
て相許すのみ。終是、金が消滅すれば、悠悠行路心、昨日は非常に親しきが如きも今日は何處の人

間か知らぬ態度を爲す事を云ふ。

【評論】此の篇 世人の輕薄を痛罵して肯綮に中る、露骨なるも、風格を甚だしく害するに到らず、人口に膾炙する所以なり、主人が然諾して遂げざるを恨むならんとの説眞に近し。黄家鼎曰く直截説破。

送人使河源

故人行役向邊州。匹馬今朝不少留。長路關山何日盡。滿堂絲竹爲君愁。

故人行役して邊州に向ふ、匹馬今朝少くも留まらず、長路關山何れの日か盡

きん、滿堂の絲竹君が爲に愁ふ、

【句釋】送人使河源、漢の張騫傳に、騫、大夏に使用するの、後、河源を窮む、西域傳に、河に兩源あり、

一は葱嶺に出で、一は于闐に出づ、于闐は南山の下に在り、其の河北流葱嶺河と合下して蒲昌海に注ぐ、蒲昌海一に蓋澤と名る者なり、玉門陽關を去る三百里、隋の煬帝初めて郡を置く、李靖、吐谷渾を伐つ、積石河源を經と、即ち此れ。故人は友人。行役、使命を奉じて行くを行役と言ふ。向邊州、中土の外を盡く邊州と言ふ。匹馬今朝不少留、行役任重きを以て其の行を遅延せず。長路關山何日盡、少らくも留まらざる急を欲し乍ら、路は長し、何日を経て行き盡すぞや。滿堂絲竹爲君

愁、絲竹は樂しむべきもの、而かも樂しまずして却て愁ふ、君が此の遠行を思へばなり。

【評論】此の篇、張謂の至るものにあらざるも、亦以て誦すべきなり、鍾伯敬曰く、四語韻勝る、龍標の手段あり。

涼州詞

王之渙

黃河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。羌笛何須怨楊柳。春光不度玉門關。

黃河遠く上る白雲の間、一片の孤城萬仞の山、羌笛何ぞ須ひん楊柳を怨むる

ことを、春光は度らず玉門關、

【句釋】涼州詞は蠻土の狀を歌ふものなり、唐代隴右道涼州武夷郡、今日の甘肅に屬す。黃河遠上

白雲間、人より言へば上るなり、河より言へば下るなり。一片孤城、片は箇の意味なり。萬仞山、崑崙益高し。羌笛何須怨楊柳、折楊柳は笛の曲名、然るに蠻土は此の曲名は無用に屬す。春光不度玉門關、楊柳曲の無用なるは春光が度らざればなり、春光の度らざる地、楊柳の生ずる理由なし、涼州の地理險惡、氣候順ならざるを言ふ。

【評論】此の篇、涼州詞として千古の名篇に屬す。唐汝詢曰く、語、征人に及ばずして征人の苦想

ふ可し。王敬美曰く、于鱗唐の七言絶句を選び、王龍標秦時明月漢時關を取つて第一と爲す、于鱗

が意止秦時明月の四字を擊奏するのみ、必ず壓卷を欲せば還た當に王翰が葡萄美酒、王之渙が黄河
遠上の二詩に之を求むべし、深婉なる所、王は龍標が上にあるべし、雄偉なる所、龍標は王が上に
あり、甲乙を分つは、各其の性の好む所に由るのみ、紛紛の論、茲に録せず。

九日送別

薊庭蕭瑟故人稀。何處登高且送歸。今日暫同芳菊酒。明朝應作斷蓬飛。

薊庭蕭瑟として故人稀なり、何の處ぞ高に登り且歸を送る、今日暫く芳菊の
酒を同うす、明朝應に斷蓬の飛ぶことを作すべし、

【句釋】 九日、九月なり、薊庭は戰國の幽燕、北庭とも云ふ、支那地方の極端なればなり、顧炎武の

「日知錄」を讀むべし、薊の事を辯せり。蕭瑟はサビシキなり。故人稀、北方には君が故人稀なら
ん。何處登高、九日は登高すべき山又は樓あり、今日は何處の山に登りてか、且送歸、佳辰と共に
君が歸を送らんと欲するも其の何れの處が好きぞ。今日暫同、明日は復見ず、暫時芳菊酒を飲んで
今日の權を作さん。明朝應作斷蓬飛、九日ならでは菊が蓬と變化して飛ぶ、即ち明日は君一人天涯
へ飛ぶならんと譬へるなり。

【評論】 此の篇、前首と比較するときは、其の巧拙別手に出づるが如し、肯て拙と爲すにあらざる

も玉膳前に在り、疎羹を奈何せん。

洛陽客舍逢祖詠留宴

蔡希叔

綿綿漏鼓洛陽城。客舍平居絕送迎。逢君買酒因成醉。醉後焉知世上情。

綿綿たる漏鼓洛陽城、客舍平居送迎を絶す、君に逢ひ酒を買ひ因て醉を成し、
醉後焉ぞ知らん世上の情、

【句釋】 洛陽客舍逢祖詠、此の祖詠は前に詩あり、洛陽の人なり、蔡希叔は曲阿の人、官南尉に
至る、詳傳は無し、留宴は詠を留めて酒を飲みしなり。綿綿は長きを云ふ。漏鼓洛陽城、居は靜な
り、宵は長し、二人緩緩飲むに宜し。客舍平居絶送迎、送迎を絶つは、平居人と交はらざるの謂な
り、君獨邂逅したるのみ。逢君買酒因成醉、買字一本貫に作る、貫は和訓「オキノル」買と殆んど
同義。醉後焉知世上情、醉人の常態多くは是れなり。

【評論】 此の篇、客舍の無聊と、交情の款洽とを叙して一篇を爲す、「訓解」に悠然趣を成すと評
す。唐汝詢曰く、淺率粗鄙、宜しく之を刪るべし。蔡の詩、此の一首を録す、何の意たるを知らず、
刪除して可なるもの。

少年行

吳象之

承恩借獵小平津。使氣常游中貴人。一擲千金渾是膽。家無四壁不知貧。恩を承けて借りて獵す小平津、氣を常用て常に遊ぶ中貴人、一擲千金渾て是れ膽、家に四壁無きに貧を知らず、

【句釋】 吳象之は「唐書」に傳無し。少年行は前に辨せり。承恩は、例せば現今御獵場に於ては普通人は獵する能はず、陛下の恩命を承くる者は獵するを得る如く此の少年も今天子の恩を承くるなり。借獵、自由にあらざれば、借るなり。小平津は滄州鹽山縣の界、漢の公孫弘、宰相を以て平津侯に封せられし地とす、此の小平津は所謂普通人の獵場にあらざるなり。使氣は強ひて豪氣を装ふ。常游中貴人、内臣の貴幸せらるる者の中貴人と名く、少年は此の輩と結交す。一擲千金渾是膽、氣を重しとし、金を輕しと爲す。家無四壁、司馬相如が成都に歸りし時、唯四壁立つのみ、貯蓄の無きを言ふ。不知貧、貧を知らざるは即ち富をも知らざるなり、貧富なぞの事眼中に置かざるなり。【評論】 此の篇、少年の俠氣を叙し面目躍如たり。蔣春甫曰く、妙は渾是膽の三字に在り。鍾伯敬曰く、妙は不知貧の三字に在り。余謂ふ、貧を知らざるは膽大なればなり、膽大なるが故に貧を知らざるなり、之を離分して妙を言ふべからず。

江南行

張潮

茨菰葉爛別西灣。蓮子花開猶未還。妾夢不離江上水。人傳郎在鳳凰山。茨菰葉爛れしとき西灣に別れしが、蓮子花開いて猶未だ還らず、妾が夢は江上の水を離れず、人は傳ふ郎は鳳凰山に在りと、

【句釋】 作者張潮は潤州曲阿の人、仕へず。江南行は樂府題、婦人が思を叙ぶ。茨菰は水田中に生ず、五月の間白花あり、冬に至り葉死して、根、食ふべし、花無きもの其の根尤も佳、江南多く之れ有り。葉爛は冬の節なり。別西灣、夫と西灣に於て別れしは已に去年と爲る。蓮子の子は實にはあらず、子は語助のみ。花開猶未還、今年の夏に近づくも、夫は猶還らず。妾は婦人の自稱。夢不離江上水、夜夜夢は去年相別れし西灣即ち江上の水畔に在り。人傳、夢中に人が傳ふるなり、實事にはあらず。郎在鳳凰山、此の山は何州と定めたるにあらず、「訓解」に、數十處有り、必ずしも其の指す所に泥ますと、洵に然り。

【評論】 此の篇、婦女の情を叙して淫靡ならず、名篇として可なるもの。吳吳山曰く、妾夢の二句最も能く閨人の貞靜を狀す、蓋目の接する所、夢此に止まるのみ。我國松前節の「忍路高島及ビモナイガ、セメテウタスツイソヤマデ。」

軍城早秋

嚴武

昨夜秋風入漢關。朔雲邊月滿西山。更催飛將追驕虜。莫遣沙場匹馬還。
昨夜秋風漢關に入る、朔雲邊月西山に滿つ、更に飛將を催して驕虜を追ひ、
沙場の匹馬をして還ら遣ること莫れ、

【略傳】嚴武、字は季鷹、華州の人、幼にして豪爽、成都の尹、劍南の節度使に擢んでらる、杜甫と厚し、永泰の初め卒す。

嚴武傳新唐書卷五十四

【句釋】軍城は蜀の西邊の塞を言ふ。早秋は新秋なり。昨夜秋風入漢關、冒頓悉く復秦が蒙恬を使うて奪ひし所の匈奴の地を收めて漢關と爲す、匈奴傳 秋風の漢關に入りしは僅かに昨夜なりと思ひしに。朔雲邊月、朔邊の雲月の意味。滿西山、蜀の西山に滿つ。更催飛將、飛將を催促して。追驕虜、勝に驕る所の胡虜、秋に乗じて益す驕る、之を追撃すべきなり。莫遣沙場匹馬還、一人も餘さず、或は殺し或は俘虜とせよ、廣德二年嚴武、吐番の兵七萬を破る。

【評論】此の篇、邊地氣候の別なるを叙し、時に乗じて胡の撃つ可きを云ふ。鍾伯敬曰く、壯氣、秋風と齊しく高し。田子藝曰く、氣概雄壯、武將の本色。

春行寄興

李華

宜陽城下草萋萋。澗水東流復向西。芳樹無人花自落。春山一路鳥空啼。
宜陽城下草萋萋、澗水東流復向西、芳樹無人花自落、春山一路鳥空啼。

【句傳】李華、字は遐叔、趙州の人、進士に上る、天寶中監察御史に遷る、祿山反し鳳閣舍人に僞署す、華自ら危亂を踐み節を全うすること能はざるを傷む、上元中左補闕を以て召せども拜せず、大歴の初め卒す、前集十卷、中集二十卷あり。

【句釋】春行寄興、春遊して其の興情を叙す。宜陽城は即ち韓の城、洛州に在り。下草萋萋、草色の盛んなるを萋萋と云ふ、澗水東流復向西、水流の屈曲せる實事。芳樹は春樹なり。無人花自落、花の開落共に見る人無し。春山一路鳥空啼、此の春景は佳ならざるにあらず、悲む所は寂寥として人無し。

【評論】此の篇、天寶亂後の作、其の荒涼察すべきものあり。「訓解」に、韓偓の「千村萬落寒食の如く、人煙を見ず空しく花を見る」と比較して、韓は淺く李は深しと。或は其れ然らん。

重送裴郎中貶吉州

劉長卿

猿啼客散暮江頭。人自傷心水自流。同作逐臣君更遠。青山萬里一孤舟。
猿啼客散暮江頭。人は自ら傷心水は自ら流る。同じく逐臣と作りて君
更に遠し、青山萬里一孤舟。

【句釋】 重送裴郎中貶吉州、江西省の吉安府に裴が貶謫せらるゝを送る、前に貶せられし時、送るを以て重と云ふ。猿啼、唯猿啼を聞くも悲し、況んや人を送る時に於てや。客散暮江頭、送る客も送らざる客も皆散じ去る、江邊の薄暮を云ふ、裴が上舟する處。人自傷心水自流、水の流るゝ、逝く者斯の如し、悲凄を帶ぶ、而かも自ら流れ、人は貶謫に逢ふ、自然に傷心たらざるを得ず、有情無情共に傷む。同作逐臣、劉長卿は時に貶せられて南巴の尉と爲る。君更遠、京師を去ること南巴は近く、吉州は遠し。青山萬里一孤舟、一孤舟より外、餘物無し、苦我より甚だしきを憫むなり、典公一孤舟に就いて宋人の論を笑ふ、眞に笑はざるを得ず。

【評論】 此の篇、中唐の絶句として實に上乘に屬す。鍾伯敬曰く、此の詩之を朝堂に獻せば、縦ひ賜環の望無きも、當に亦惜別の悲しみを深うすべし。

送李判官之潤州行營

萬里辭家事。鼓鼙。金陵驛路楚雲西。江春不肯留行客。草色青青送馬蹄。

萬里家を辭して鼓鼙を事とす、金陵の驛路楚雲の西、江春肯て行客を留めず、草色青青として馬蹄を送る、

【句釋】 李判官之潤州行營、潤州は今の江蘇の鎮江府、判官は閩兵官なれば、營中の實狀を視察に赴くなり。萬里辭家、判官が公役の爲め郷を去る。事鼓鼙、從軍する事、鼙は戰鼓又旗鼓なり、俗に「セメツヅミ」と云ふものなり。金陵驛路、行營所在は即ち金陵、此の金陵に向ふ驛路は楚雲西に當る。江春不肯留行客、我が爲めに暫くも此の行客を留める心は江春に無し。草色青青送馬蹄、草色の馬蹄を送るは、即ち江春の留めざる所以なり。

【評論】 此の篇、判官兵を典して潤に之く、道金陵を出づ、行路留めずと言はずして、江春肯て留めずと言ふ、正に絶句中翻弄の法、後人摹擬既に多し、便ち套語を爲す、是れ「訓解」の評當れり、譚元春曰く立意高達。

歸雁

錢起

瀟湘何事等閒回。水碧沙明兩岸苔。二十五絃彈夜月。不勝清怨却飛來。

瀟湘より何事ぞ等閒に回る、水碧沙明にして兩岸は苔、二十五絃夜月に弾ぜば、清怨に勝へずして却て飛來せん、

【句釋】 歸雁、寒なる則是北より南し、熱する則是南より北するは此の鳥の性とす。瀟湘は住むに佳處なり、然るに何事ぞ等閒回、無駄な住處の如く考へて此を去る。水碧沙明兩岸苔、瀟湘の佳なる景、此の如く佳き處ならずや。二十五絃彈夜月、瀟湘には湘君の靈あり、若し其の靈が夜月に乗じて、「歸雁操」の曲でも奏彈したならば、不勝清怨、琴音の清怨に勝へずして却飛來、一度飛び去つても亦引き返さるゝならん。

【評論】 此の篇、瀟湘の佳景を叙して、雁の北飛を恠しむなり、唐汝詢は此の山水の美を捨て、北飛する所以は、湘靈二十五絃を彈奏する其の清怨に勝へずして飛來するならんと解す、余は反對に解する意を以て此の篇を見る。鍾伯敬曰く奇幻。吳吳山曰く、情と境と會し、觸緒牽懷、比たり興たり、妙合せざるゝこと無し。

登樓寄王卿

韋應物

踏閣攀林恨不同。楚雲滄海思無窮。數家砧杵秋山下。一郡荊榛寒雨中。閣を踏み林を攀ちて同じうせざるを恨む、楚雲滄海思窮まり無し、數家の砧

杵秋山の下、一郡の荊榛寒雨中、

【句釋】 登樓して詩を作り。寄王卿、韋時に郡宰として其の友を憶ふ。踏閣攀林、閣に上らんとするに先づ林中よりするを言ふ。恨不同、一人の寂寞を恨む。楚雲、我は楚雲、滄海、君は滄海、思無窮、離思の窮まり無きを嘆す。數家砧杵秋山下、樓上より聞く所の聲、一郡荊榛寒雨中、樓上より見る所の景、砧を聞き、荊榛に對す、悽愴の情に勝へず。

【評論】 此の篇、四句全對格を以て成る、而かも律詩を讀むの感無し、蘇州の奇才是に於て見る可し。蔣春甫曰く、登樓の愁思宛然として涙下る。譚元春曰く、字字恨み有り。劉會孟曰く、此の如く開合、野興甚濃、正に是れ絶意、復兩聯を増すときは情味此の如くならず。

酬柳郎中春日歸揚州南郭見別之作

廣陵三月花正開。花裏逢君醉一廻。南北相過殊不遠。暮潮歸去早潮來。

廣陵三月花正に開く、花裏君に逢うて酔ふこと一廻せん、南北相過殊に遠からず、暮潮に歸り去つて早潮に來らん、

【句釋】 揚州は即ち廣陵、今の江蘇省揚州府。南郭は一本南國に作る、即ち揚州の事なり。三月花正開、揚州は繁華の地にして花も亦多し。花裏逢君醉一廻、花開きし時節には花裏に於て君と一

酌を催さんと豫め云ふ。南は徐州、韋が刺史として此に在り、北は揚州。相過殊不遠、訪問するに遠からざる距離なり。暮潮歸去早潮來、孤舟來去の頗る便利なるを云ふ、暮天早天と言はずして暮潮早潮と言ふ、揚州の水國なること知るべし。

【評論】此の篇、柳が送別に就て一酌を催すに由つて來れとの詩に對して作る、柳を慰安する爲め報ゆ。鍾伯敬曰く、只是れ一自然便ち幽廻を極む。

送魏十六還蘇州

皇甫冉

秋夜沈沈此送君。陰蟲切切不堪聞。歸舟明日毘陵道。回首姑蘇是白雲。

秋夜沈沈として此に君を送る、陰蟲切切として聞くに堪へず、歸舟明日毘陵の道、首を回さば姑蘇是れ白雲ならん、

【句釋】題は注無きも分明なり。秋夜沈沈、夜の深なるを沈沈と形容す。此送君、送處は何處なるや判然せず、此は其の送處を云ふ。陰蟲切切、蟲の啼聲を切切と云ふ。不堪聞、愁へ中に在るが故に聞くに堪へざるなり。歸舟明日毘陵道、即ち揚州の道、今の江蘇鎮江府丹徒縣東南十八里。回首、來處を回看すれば。姑蘇は山、是も其の地に在り。是白雲、白雲に鎖されてあるならん。

【評論】此の篇、送別の詩としては尋常一様に屬す。蔣春甫曰く、意言外に在り。

曾山送別

淒淒游子若飄蓬。明月清尊祇暫同。南望千山如黛色。愁君客路在其中。

淒淒たる游子飄蓬の若し、明月清尊祇暫く同じうす、南に望めば千山黛色の如し、愁ふ君が客路其の中に在らん、

【句釋】曾山は浙江の遂昌縣に在り、西山又文筆山の名あり、此の山下にて別を送る。淒淒游子、得意の人は淒淒にあらず、失意の人たること知るべし。若飄蓬、若を典公の集注苦に作る、若を以て勝れりとす、定め無く、又得意ならざるを言ふ。明月の下清尊に對し。祇暫同、暫時杯を共にして飲むべし。南望千山如黛色、未だ通過せずして、先づ其の通過する所の山を望めば、南に當りて悉く黛色の如し。愁君客路在其中、山路崎嶇行に惱む、愁ふる所以なり。

【評論】此の篇、魏を送る詩と殆んど其の調を同じうす。蔣春甫曰く、遂に去路より境を得、落句助語を用ひて詩に入る。譚元春曰く婉至。

寒食

韓翃

春城無處不飛花。寒食東風御柳斜。日暮漢宮傳蠟燭。青煙散入五侯家。

春城處として飛花ならざるは無し、寒食東風御柳斜なり、日暮漢宮より蠟燭を傳へ、青煙散じて五侯の家に入る、

【略傳】韓翃、字は君平、南陽の人、天寶十三年の進士、侯希逸、表して幕府に佐たり、府罷めて十年仕へず、李勉、宣武に任ず、復之を辟く、建中の初、賀部郎中を以て知制誥たり、中書舍人に終る、集五卷あり。

【句釋】寒食、清明前二日之を寒食と謂ふ、并州は孝子介子推が爲め火を斷つ三日冷食すと、謝肇淛の曰く、寒食火を禁ず、以て介子推に起ると爲すは、固より俗説の悞りにして、龍星東方に見はれ心大火と爲し、火の盛を懼る、故に之を禁ずと爲す者は迂の迂なるものと、而して自説を述べず、要するに清明前二日之を寒食と稱して火を禁ずるは事實にして、其の根原は分明ならざるなり。春城無處不飛花、城中正に是れ落花紛紛の時節。寒食東風御柳斜、青晚初夏なれども尙東風の節、南風の節ならず、御溝を繞る柳枝斜斜たり。日暮漢宮傳蠟燭、清明の日に榆柳の火を取りて以て近臣に賜ふ。青煙散入五侯家、五侯は前卷に於て辨せり、唐、肅宗代宗以來、權勢宦官に在りて、朝廷にあらす、衰亂恰も漢末と比すべし、此の詩以て諷する所あり。

【評論】此の篇、寒食の詩として古今第一、此の右に出づるもの無し、杜甫詩注に依つて見る、秦

人は寒食と言はずして熟食と言ふ、煙火を動かさずして預め熟食物を辨じ節を過すを謂ふなり、故に吳人は寒食を稱して過節と言ふ、家貧富と無く、皆其の先を祭る、而して新に亡する者有る家は、其の家必ず悲痛を倍すに依つて新寒食と名く、先を祭るに吳俗は麥麩を用ひ、鄴俗は麥飯を用ふ、徳宗の時、制誥人を闕く、天子批して曰く、韓翃に與へよ、時に韓翃二人あり、中書二人を具して進む、天子、寒食詩の韓翃に與ふと、徳宗亦詩を解する天子なりと謂つ可し。

送客知鄂州

江口千家帶楚雲。江花亂點雪紛紛。春風落日誰相見。青翰舟中有鄂君。

江口の千家楚雲を帶ぶ、江花亂點して雪紛紛、春風落日誰か相見ん、青翰舟

中鄂君あり、

【句釋】送客知鄂州、「唐書地理志」に、鄂州、江夏縣江夏郡に屬す、今日の湖北省武昌府なり、楚の熊渠が其の子紅を封じて鄂王と爲し始めて鄂と名く、唐之に因る、客が鄂州の知府と爲りて赴くを送る。江口は楊子江口を云ふ。千家帶楚雲、客が赴く處の景を叙す。江花亂點雪紛紛、飛花が紛紛として雪の若くなるを言ふ。春風落日誰相見、楚雲の形状や、飛花の景趣を見る者は誰と共にするや。青翰は青輪なり、青鶴なり、「ツグミ」と云ふ鳥、青艦にも作る、單に舟と稱する事になりし

は後世の事、江東の貴人船の前に青雀を作る、是れ其の像、雀にあらすして其の實翰なり。舟中有鄂君、説苑に、鄂君子皙、青翰の舟に乗じ、越人楫を擁して歌うて曰く、今夕何の夕ぞ、舟を中流に放つ、今日何の日ぞ、子と舟を同じうす、是に於て鄂君乃ち揄袂を以て行いて之を擁し、繡被を舉げて之を覆ふと。鄂君は楚王の母弟なり、客と共に見る者は鄂君ならんとの意。

宿石邑山中

浮雲不共此山齊。山靄蒼蒼望轉迷。曉月暫飛千樹裏。秋河隔在數峰西。

浮雲も此の山と齊しからず、山靄蒼蒼として望轉た迷ふ、曉月暫く飛ぶ千樹の裏、秋河隔たりて數峰の西に在り、

【句釋】石邑は「韓非子」に、董安于、趙の土地の守と爲る、石邑山中を行く、澗深峭、墻の如く深きこと百仞、今の直隸省眞定府獲鹿縣の山中たり。浮雲不共此山齊、山の高きこと雲の高きより高しと云ふ意。山靄蒼蒼望轉迷、山の深きこと靄の深きより深しと云ふ意。曉月暫飛千樹裏、深中に高を見はす、早く入るを暫飛と用ふ、殘月が千樹の裏へ暫時見る間に入るなり。秋河は銀漢、

隔在數峰西、高中に深を見はす。

【評論】此の篇、奇峭の作として人口に膾炙する久し。鍾伯敬曰く、中唐絶句、多得すべからず。唐汝詢曰く、暫飛隔在の四字奇絶、雲靄月河の四字並用して重なるを覺ゆ。余今謂ふ、此の篇は、四句一貫せる作と見ても可、一句一句切つて以て見るも亦可、而して高深の二字を離れざる所、作者の伎倆を見る、我邦津阪東陽は「絶句類選」に、「客旅」と「游覽」の二分類して、此の詩を「客旅」に收めず、「游覽」に收む、注意足らずと言ふ可し。

送劉侍郎

李端

幾人同入謝宣城。末及酬恩隔死生。唯有夜猿知客恨。驛陽溪路第三聲。幾人か同じく謝宣城に入る、未だ恩に酬ゆるに及ばず死生を隔つ、唯夜猿の客恨を知る有り、驛陽の溪路第三聲、

【略傳】李端は趙州の人、嘉祐が姪なり、大曆五年の進士、郭曖に従つて遊ぶ、曖嘗て官に進む、大に賓客を集めて詩を賦す、端最も工なり、錢起曰く、此れ素より之を爲る、請ふ起が姓を賦せよ、端立に一章を賦す、又前よりも工なり、客乃ち服す、曖帛百匹を賜ふ、後江南に移疾す、仕へて杭州の司馬に至る、詩三卷あり。

【句釋】送劉侍郎、劉は姓、侍郎は官名。幾人同入謝宣城、晉の謝眺は宣城の太守と爲る、因て人が之を稱して謝宣城と云ふ、劉も亦宣城の太守と爲りし時、其の恩を承けて、劉が家に入らせしもの幾人なるを知らずとなり。未及酬恩、其の幾人の賓客が劉が恩に酬いた事ぞ、恐くは未だ酬いざらん、其の酬いざる中に隔死生、隔字の上に如の字を加へて見よ、死生隔世の人に對する如く、顧みざる忘恩の徒輩を云ふ。唯有夜猿知客恨、君が旅情を知る者は人にはあらで、夜猿に在り。嶧陽、嶧は音「エキ」山の名、陽は南の意味、魯國の鄒縣に在る山、一名を葛陂山と云ふ、邳州城の西北六里に在り。溪路第三聲、猿聲を聞いて三聲に至るときは大底の者は斷腸すと、今劉も失意の人として此の嶧陽を通過し猿の第三聲を聞くに勝へざるべしとなり。

【評論】此の篇、劉の失意に同情して、以て忘恩の徒の無情を言ふ、世に益ある作と謂ふ可し。唐汝詢曰く、世態炎涼、恨むに堪へ亦哀しむに堪へたり。

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。
月落ち烏啼いて霜天に滿つ、江楓の漁火愁眠に對す、姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る、

【略傳】張繼、字は懿孫、兗州の人、天寶十二年の進士、大理司法と爲る、左拾遺に終る、集二卷あり。

【句釋】楓橋は江蘇省蘇州府城西七里に在り、山に面し、水に臨み、南北往來、必ず此を經、古代は封橋と稱せしを、張繼が此の詩ありてより楓橋に作る。夜泊、字の如く舟中に宿泊して此の詩を作る。月落烏啼、普通の解は此の四字を曉景とす、典公は曉景にあらず、爾の時の實景を言ふのみと、余初め典公を信せざりしも、再考するに典公の説可なる者の如し、月落の字を曉天に用ふる事は普通なるが、十五日の間の中には夜半に落つる事もあり、烏啼の字も曉天に用ふる、是れ亦普通なり、然るに何ぞ知らん此の鳥は夜も亦啼くことを、余は東台に二十五年間も住して夜半に烏啼を聞くこと一再ならず、月夜は殊に多きも、暗夜にも啼くことあり、是に由つて之を觀れば、此の月落烏啼も夜半の實景を叙せしと見て、余の實感と一致する所、必ずしも曉天と云ふの凡想を用ひざるなり。霜滿天、文章の如くに詩を實事とのみ解する者は、詩の神を失す、秋晚の天と見て可なり。江楓漁火、魚を取る所の江火點點。對愁眠、眞に眠に著けば對も不對も知る所にあらず、眞に眠著せざるゆる漁火の點點たるを知るなり、何の爲めに愁ふるやは知る所にあらず、唯愁ふるが故に眠らざるなり。姑蘇城外寒山寺、蘇州には梵刹多し、果して寒山寺なりしや、封橋寺なりしやは分明ならざるも、寒山寺ならでは詩としての趣致を害するなり。夜半鐘聲、唐の詩人、夜半鐘を用ふる

者于鶴、白樂天、皇甫冉、溫庭筠、陳羽、李洞等にあり、以て其の實事を證す可し、夜半に鐘を撃たずと云ふ宋人の論は迂愚極まるものなり。到客船、眠らんと欲して而かも眠らざるゆゑ、鐘聲の吾が船に到るを知る。

【評論】 此の篇、曾て解して普通の曉天と爲す、今は前説の非なるを知つて之を改む、亦善に従ふもの、「月烏啼ニ落チテ」の如きは滑稽極まる、烏啼山や愁眠山は此の詩有てより後に有り、古焉んぞ烏啼山も愁眠山もあらんや、王堯衢の解に、鐘聲が寒山寺より來り、天已に曉ならんとす、張繼猛然醒め、猶疑うて夜半と爲すなり、全體に就いて曉色を悉く夜半のものと疑ふと、曲解も極まる、張繼知るあらば大笑すべし。

聽角思歸

顧況

故園黃葉滿青苔。夢後城頭曉角哀。此夜斷腸人不見。起行殘月影徘徊。故園の黃葉青苔に滿つらん、夢後城頭曉角哀しむ、此の夜斷腸人見えず、殘月に起行すれば影と徘徊。

【略傳】 顧況、字は逋翁、姑蘇の人、至徳の進士、性恢諧、柳渾、李泌に道士と方外の友と爲る、徳宗の時、渾政を輔け、召して秘書郎と爲す、泌、相と爲るに及んで、著作郎に遷る、詩語調諠に坐

して、饒州の司戸に貶せられ、華山に居り、老壽を以て終ふ、集二十卷あり。

【句釋】 角は胡人が軍中に用ふる具、之を吹いて馬を驚かすもの、長さ五尺、形竹筒の如し、本細に末大なり。思歸、顧が實際なりや、詩を作る爲め設けし題なるや分明ならず、「魏書」に、武帝、烏桓を征す、軍士、歸を思ふ、乃ち角を減じて中鳴を爲す、其の聲尤も悲しと。故園黃葉滿青苔、主人不在中の郷園の晩秋の状を言ふ。夢後、黃葉が青苔に滿ちて居る夢を見しなり、其の夢覺めし後、城頭曉角哀、角聲が城頭に起りしを聴く、是れは分明なり、前は分明にあらず。此夜斷腸人不見、他人は勿論、故園の人も見えず、獨斷腸するなり。起行殘月、五更に起きて行けば。影徘徊、己の影と月の影とのみ徘徊して他に人無きなり。

【評論】 此の篇、傳に恢諧の人とあるが、此の詩の如き、毫も其の習無し。蔣春甫曰く此の結眞に斷腸すべし、無聊の態を見るに足る。

宿昭應

武帝祈靈太乙壇。新豐樹色繞千官。那知今夜長生殿。獨閉空山月影寒。武帝靈を祈る太乙壇、新豐の樹色千官を繞りき、那ぞ知らん今夜長生殿、獨空山月影の寒きに閉ぢんとは、